
レストロ アルモニコ (旧)

烏丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レストロ アルモニコ（旧）

【Nコード】

N5898C

【作者名】

烏丸

【あらすじ】

主人公・高倉一純は普通の高校生である。しかしその周りでは、兄との禁断の愛に燃える実妹、ストーカーの幼なじみ、最終兵器チツクなアンドロイド、妖怪テイストな小さい先輩その他諸々が一純をめぐって暴れまくっていた。そんな一純の有り得ない日常を描く、ラブ：コメⅡ1：9の超アンバランスラブコメディ・レストロ アルモニコ。完全版連載開始しました。そのうち、こっちの方でもトロイメライ編の続きを書きたいと思います。

第1夜：プレリユード（前書き）

注意

本作品は軽いコメディ作品であり、音楽とは一切合切無関係となっておりますので、どうぞご了承ください承お願いいたします

第1夜：プレリユード

「はぁ・・・・・・・・・・・・・・・・」

授業も終わり放課後。俺は本日何度目かわからない溜め息を吐き出した

周囲の生徒達は本日の授業が終わった開放感からか、みな一様に生き生きとした顔している

そんな中で俺は、1人浮かれる気分にはなれずに只々ため息を吐く。顔もほんのり土気色だ

陰鬱な空気を醸し出している、というのが我ながらよく分かる。ちなみにその空気の成分の80%にはKOK（今日は俺に構わないで）が多量に含まれている。ちなみに残り20%は優しさで出来てます

朝からこんな感じの空気を排出し続けていたので、回りの方もさぞかし気を使った事だろう

だが1人、その陰鬱な空気を読めない命知らずのザ・フルが、無謀にも虎穴に飛び込んで来た

「いずみん、そんな何時までも重力10倍な空気背負ってないで帰ろっぜ」

悩みとは無縁そうな、茶髪のツンツン頭が話しかける

「……………いずみん言うな佐倉、お前が言うど果てしなく気持ち悪い」

俺は心の底から嫌そうな顔を向けて、そいつの顔を見る

この、目の前に立っている奴の名前は佐倉正臣。一応俺の友人にあたるような気がしなくてもない

「親友に向かって気持ち悪いはないじゃないか！！酷いぞいずみん！この悪魔超人！！アトランティス！！」

佐倉はその親友に罵詈雑言を浴びせながら、ビシィッ！という効果音が付きそうな勢いで指を指す

ボキッ

まるで枯れ枝をへし折ったかのような乾いた音が、生徒達の喧噪に包まれていた教室に響き渡る

「指があらぬ方向にいいいいっ！？」

無言で俺に人差し指をへし折られた佐倉が、教室内を縦横無尽に駆け回る。椅子や机に激突しようがお構い無しだ

周囲のクラスメート達も慣れた身のこなしで、転がってくる佐倉を回避している。これも日常茶飯事の光景だ

「人を指差すなって小さい時に教わらなかったか？」

聞こえているかは分からないが、俺は指をへし折ったついでに、

転がり回ってる佐倉にそう言ってやる

「教わった気もしないでもないけどこんな体罰があるなんて初耳ですがあああああっ!?!」

どうやら転がり続けながらも俺の声は聞こえていたらしく、不思議な方向に曲がった指を押さえながら、絶叫というはた迷惑な返事をしてくれた。本当、もう少し周囲に迷惑のかからないように悶絶してもらいたいものだ

「はああああ.....」

俺はそんな佐倉を視界の隅に捉えながら、先ほどよりも更に深く溜め息を吐き出す

このアホにいつまでもかまっても、無駄に体力が消費されるというデメリット以外何も発生しない。ここは早々に退散するが吉だ

「.....とつとと帰るか」

俺は誰に言うわけでもなくそう呟くと、机の横にぶら下がってる鞆を掴む。そして教室を転げ回る佐倉をほっぽって教室の入口に向かって歩きだす

「いずみんの薄情者おおおおっ!!--」

ゴスンッ!!

振り返りざまに、セカンドベースに牽制球を投げるかの如く俺が投擲した音速の広辞苑が、コンクリートに鉄球を打ち付けたような

音を立てて佐倉の脳天に直撃する。ちなみに広辞苑は、何故か近くの机に置いてあったので、ありがたく勝手に使わせていただいた

広辞苑の直撃を食らった佐倉は、まるで編集されたかのようにスローモーションで倒れる

「…………へへ…………お花畑だあ…………暖かあい…………」

仕舞いには、妙なうわ言を言いながら安らかな笑みを浮かべだす
佐倉

流石ヤバイと思ったにクラスメイト達が、フランダースの犬のラストみたいな状態になっている佐倉に駆け寄って来ている

「いずみん言うなって言ってるだろうが、このヒヨコ頭」

勿論俺は、そんな佐倉は無視してサツサと教室を出る。あの馬鹿はあれくらいで天使に連れて行かれるような奴ではない。せめてマントルに突き落とすくらいしないと消滅しないだろう

(アホに付き合ってる暇は無い……………)

教室からは、クラスメイト達が蛍の光を斉唱する声が聞こえて来るが、そんなのは軽く無視して俺は家路へ着くのだった

家路を進むにつれ、俺の精神状態は着々と鬱へと向かい下がり始めていた

そもそも何故俺がこんな鬱状態になっているかというところ、その原因は昨日親に唐突に聞かされた

「明日妹が帰ってくる」

の一言だった

そうなのだ

俺こと高倉一純は、今日9年ぶりに妹と再会する

妹は小さい頃、それこそ小学校に上がる時。兄の俺にだけ何も言わずに、全寮制の学校へ通うため家を出た。両親が行けと行ったのではなく、自分からそう言いだしたらしい。俺がいくら聞いても、妹は家を出るまでその理由を話してはくれなかった

後で聞いた話なのだが、その学園は校則が厳しいことで有名な超名門校らしく、小中高一貫のエスカレーター方式にも関わらず、高等部まで残る者は少ないそう。帰省した事も一度も無く、俺が妹の現状を知る術は、たまに送られてくる手紙と、学校行事などで呼ばれた両親から聞く話程度のものであった

(うう………胃がキリキリして来たぞ)

俺の緊張もクライマックスだ

正直9年ぶりの再会を果たしても、9年前の幼い妹と違う、思春期真っ只中の成長した妹相手に一体何を話し、どう接してやればいいのか皆自分からない

それどころか、もしかすると妹が家から離れる決意をしたのも、兄である俺に嫌気が差したからなのかもしれない

自分としては、嫌われるような事をした覚えは全くの皆無なのが、女性の思考回路という物は複雑怪奇な構造をしている物らしい。もしかしたら知らず知らずの間に、妹の怒りの琴線に触れるような事をしてしまったのかもしれない

そんな思考の悪循環が、一純の不安をより一層掻き立てていた

(……………このまま家に着かなければいいのに)

仕舞いには、そんなありえない現実逃避まで始める始末

しかし、どんなに一純が現実逃避しようとも、リアルは容赦なく一純の背中をマイホームへ押ししていく

だが一純は気付いていない

マイホームを覆う、強烈でいて異様なオーラに

飛ぶ鳥が落ちるほどの、ドス黒く恐ろしいオーラに……………

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.
.
.
.

第2夜：小夜の夜想曲 1番

「これが我が家か？」

気後れしながらも家に帰り着いた一純は、思わずそう呟いてしまう

外見的には何ら異常はない、いつもの我が家だ

ただ明らかに雰囲気が違う

今まで暮らしてきた住み慣れた我が家とは思えないような、異質な空気が辺りを取り巻いているように感じられる

だが、何時までも玄関先で立ち往生してる場合ではない

一純は意を決して、我が家という名の魔窟に足を踏み入れる事にした

「……………ただいま」

そう言いながら、玄関の扉を開く一純

玄関は異常無し

だが異様な雰囲気の原因の根源は明らかに家の中、しかも居間周辺であるという事は確信できる

……………玄関から居間に近づくにつれ、徐々に空気が痛くなってきたのだ

一純はある意味、放射能の漏れた核施設並に危険な雰囲気の場合に、果敢にも歩を進める

おそらく、ここで逃走してしまつたら、核は反物質にランクアップしてしまい、更なる被害がでてしまうだろう

そして一純は居間の扉に手をかけた

喉がカラカラに渴いているのが、自分でもハッキリと分かる

そして意を決したように、一純はゆっくりとドアのノブを回していく

やがて、ドアノブがこれ以上回らない限界までくる

後は、これを引っ張るだけで、全てがハッキリとする

一純は、ドアノブを回した時と同じように、ゆっくりとゆっくりと扉を開いていく

そして視界の中に、徐々に居間の中の様子が映ってくる

一純の目に映つたのは、9年もの間見ることの無かつた、かつてこの場所にいる事が当然であつた人間

それでいて、初めてこの空間と一緒に映つたと言っても過言ではない程、成長した人間だつた

腰まである、黒曜石を思わせるくらい美しい黒髪

整った顔立ちに、スラっとした細身の体

十人いれば、関係ない奴らまで集まり始めて、合計二十人が美人と答えるであろう女の子が、居間のソファに腰掛けていた

ハッキリ言ってこの女の子が、本当に自分の妹なのか全く自信がない。

ただのお客さんだと言われた方が、まだリアリティがある

そして不意に、ドアを開けた音に気づいたのが、女の子が一純の方に顔を向けた

「……………兄さん？」

女の子が……………いや、妹の小夜こよがソファから立ち上がった、一純に歩み寄る

「……………小夜……………なのか？」

一純は未だに自身が持てず、思わず聞き返してしまう

「ええ……………正真正銘……………兄さんの妹の小夜です。分かりませんでしたか？」

疑問詞をつけられた事がショックだったのか、小夜が不安そうに尋ねる

「……………悪い、随分綺麗になってたんで、正直自信が持てなかった」

自分でも言った後で、何てこつぱずかしい台詞を言ったんだと思っ
てしまったが、実際にそう思っていたのだから仕方がない

一純にそう言われ、不意に小夜の目が潤みだす

そして

「兄さん・・・兄さん!!」

感極まった様子で、小夜が一純の胸目掛けて抱きついてきた

「さ、小夜!？」

突然の出来事に、一純は驚きと混乱を隠せない。一純としては、
小夜に嫌われているものだから思っていたので、こんな反応を
見せられるのは正直予想外だった

「会いたかったです・・・会いたかったです・・・!!」

胸に顔をうずめてられていて表情はわからないが、小夜からは静
かに嗚咽が聞こえてくる

「・・・・・・・・」

色々と聞きたいことはあるのだが、一純は何も言わず小夜の頭を
優しく撫でる

すでに、一純の中にあつた妹へのわだかまりは霧散しており、今
は自分の腕の中に抱かれているこの少女を、ただただ愛おしく感じた

一純が感慨深くなっていると、不意に小夜から嗚咽が止む

「・・・・・・・・・・兄さん？」

心なしか、背中に回されている小夜の腕に力が入る

「・・・・・・・・・・何故、一度も私に会いに来てくれなかったのですか？」

先ほどまでの汐らしい雰囲気はなりをひそめ、その声からは何やら底冷えのするような恐ろしさが感じられる

「私は待っていました。来る日も来る日も、兄さんが私に会いに来てくれるその日を」

小夜の腕に更に力が入った

「さ、小夜？ち、ちよつと苦しいんですが？」

一純の背骨がギシギシと嫌な音を出し始めた

「なのに兄さんは、この9年間一度も会いに来てくれないどころか、手紙の一通も送ってくれませんでしたね？」

「さ、小夜・・・・・・・・・・ちよ・・・・・・・・・・背骨が・・・・・・・・・・」

「兄さんは遠方に旅立った妹に対して、これっぽっちの心配もなかったのですか？」

小夜は静かにそう言いながら、スウッと顔を上る

(し、修羅がいる………)

薄れゆく意識の中で一純は思い知った

身内にはこまめに連絡をした方が良く、と

「さあ、答えなさい！！兄さああああんっ！！！！」

トドメとばかりに小夜の腕に力が入った

「¥ % £ × ……！！！！」

言葉にならない悲鳴を上げながら、一純の意識はゆっくりと闇の中に沈んでいった

9年前の小さい小夜を走馬灯のように頭に浮かべながら………

t o b e c o n t i n u e d

第2夜・小夜の夜想曲 1番（後書き）

第3夜：小夜の夜想曲 2番

私は帰ってきた

9年間離れていた故郷へ

9年間離れていた愛しい兄さんの側へ

勿論、ちゃんとした予定通りに

決して、9年間も兄さんが会いに来てくれないから業を煮やしたからだとか、9年間も会いに来てくれないのは兄さんに悪い虫がついてしまったから心配になったからだとか、9年間も会いに来てくれないという事はもしかして私の事などキレイサツパリ忘却の彼方へと忘れ去られてしまったのではないかと不安のあまり情緒不安定になってしまったからではない。断じてない

そもそも、9年間も妹をほったらかしにするというのはどうかと思っ

だから、兄さんの顔を見た途端、遂に会う事ができた嬉しさと一緒に、よくも9年間もほったらかしにしてくれたな、っていう殺意も湧いてきてしまった

………いわゆる可愛さ余って憎さ100倍という奴だと思っ

ホントに100倍になるものなんだと、改めてしみじみと思っ

「……………という訳なの」

「という訳なの、じゃないだろ……」

ソファーに横になりながら一純は呟いた

先程の小夜のフルパワーの鯖折りから意識は取り戻したものの、まだ立ち上がる事は出来ないらしい

ちなみに、小夜はちゃっかり一純を膝枕している

「でも、確かに9年も会わなかったのは悪かった。本当にすまない」

一純は膝枕されながら小夜に謝罪をする

「兄さん、もういいの。私の方も何も説明しないで行ったのも悪かったのです。それに、これからはずっと一緒に暮らせますしね」

小夜はそう言うと、怒った様子など微塵も感じさせない天使のような微笑みを浮かべながら、一純の頭を優しく撫でた

(……………そうずっと一緒よ、ウフフフフフフフフフ)

小夜の目が怪しく光っているが、小夜の優しさに目が眩んだ一純は気付いていなかったりする

「……………ところで」

「何ですか？」

「小夜は何で9年も全寮制の女子校になんか行ってたんだ？詳しい理由は親父達も知らないらしいし」

「ああ、それは……………」

言えない

言えるわけない

あの女以上に完璧な女になって、兄さんを横取りされなかったためだなんて

そのために9年もものリスクを背負ったんだけど……………

小夜はチラリと一純の顔を見た

まさか9年の間に一度も会いに来なかったのは誤算だったわ

甘えにならないように自分から連絡するのは自重していたけど、よもや兄さんの方から一度も連絡が無かったのは大誤算だった

流石に9年も会わなければ、兄さんもあの女に傾いてしまうかも
しれない

しかしそれを兄さんに直接言える訳はない

だけど兄さんに嘘言つのも……………

「……………や、大和撫子を志していたから」

う、嘘は言っていないわよね

「でも、せめて高校位は兄さんと一緒に通いたいから帰ってきたの
」
「^や

」という事はやっぱりウチ学校に編入するのか」

「そうよ」

兄さんはコメカミを押さえて、難しそうな顔で少し唸る

「………一つ言っておくが、ウチの学校には凜の奴も通
つてるぞ？」

そして、その口からは私の想像したとおりの答えが返ってくる

「でしょうね」

兄さんが入学してるのに、あの女がいない訳がない

「………一応言っておくが、くれぐれも学校内を騒然とさ
せるような喧嘩は起こさないでくれよ？」

兄さんは心配そうな顔をして私を見つめる。

それもそうでしょうね。なんせ小学校入学前にグーで殴り合いの
喧嘩をした程ですもの。おそらく幼稚園史上最凶の喧嘩だったんじ
やないかしら？

「心配しすぎよ。私も凜も子供じゃないんだから」

そう、子供じゃないんだから、もうあの程度で終わるわけではないわ

「まあ、どの道会ってみないと何とも言えないけど……………」

私はそう言つと、兄さんの頭をそつと膝から下ろすと立ち上がる

「それじゃあ、部屋を片付けてくるわね」

そつ兄さんに言つと、私は部屋に向かつて歩き出す

(……………甘いわ兄さん、私はこの9年間で身に付けたもの全てを駆使して凜の奴を再起不能にしてやるから……………)

一純はまたまた気付かなかった

妹の放つドス黒いオーラに……………

明日学校で起こるであろう惨劇の予兆に……………

t o b e c o n t i n u e d

第4夜：ストーキング・ブギ 1番（前書き）

タイトルで微妙にネタばれ？

第4夜：ストーキング・ブギ 1番

何気ない、いつも通りの毎日

今日も俺は学校へ行く

只、違う点があるとすれば、一緒に通う人間が1人、昨日よりも多いという事だろう

そう、妹の小夜だ

小夜は公言どおりウチの高校に今日から通うらしい

本当は編入手続きやらがある小夜はもっと遅く登校してもいい筈なのだが

「いいじゃないですか、初めて兄さんと一緒に登校するのですから」と、返されてしまった

そう言われてしまうと、こちらも少し照れてしまう

そうこうして学校に着いた俺は小夜を職員室に案内してから別れ、自分の教室に入りいつもの日常を乗り越えるべく席に着き授業を受けるのだった

＊

そうして昼

弁当の包みを開けていると、数秒前に購買にパンを買いに教室を出て行った佐倉の奇声が聞こえてきた

「おおおおおい！いずみん！！今日一年に編入してきた黒髪美人がお前の妹ってマジかあああああつ！？」

背中にロケットエンジンを背負ったような勢いで佐倉が教室に突貫する

コイツはこの数秒でその情報を耳にして飛んできたのか……

ていうか早すぎだろ

佐倉の一声で教室内がにわかになぞわめく

それも当たり前だ

編入生の事も俺に妹がいる事も今まで一言も言った事は無いからな

周囲の眼差しが「それは本当か」と俺に向けられる

まあ、今更とぼけても意味はないしな……

「ああ、その通りだ」

正直にそう答える

「妹さんを俺に下さい御義兄様あああつ！！！！」

佐倉のヤツがトチ狂った事をほざきながら俺にダイブしてきた

すると周囲から佐倉に向かって

バキッ

バケツが飛んできた

ゴスン

広辞苑が飛んできた

ドガンッ！

机が飛んできた

ドガガガガッ！！！！

無数の国語辞典が飛んできた

………今回はクラスメイトが制裁を与えてくれた（主に男子だったが）

すると辞典の山に埋もれてる佐倉を踏み越えて教室内に入ってくる女生徒がいた

「純はいるか？」

女生徒は俺に話しかける

長い髪を後ろでアップで束ねた髪型が印象的だ

「……………やっぱり来たか凜」

俺の馴染みの顔だった

類家 凜

俺の幼なじみで、才色兼備、文武両道、実家は地元の名家と非の打ち所のない完璧超人にして、この学校の生徒会長を勤めるといってもう漫画でも今時希少な位の完璧ぶりである

「小夜の奴が帰ってきたの言っつのは真実か？」

予想通りの質問が凜の口から出てくる

そして心なし髪が逆立ってる

……………殺気だってるな

「生徒会ならそれ位の情報入っているだろう」

俺は軽く答える

生徒会には学校中のあらゆる情報が入ってくるらしいからな

「……………受け入れ難い現実というものもあるからな」

一瞬苦虫を噛み潰したような顔を見ると凜はサッと身を翻す

「もう行くのか？」

「ああ……………一応生徒会長なもんでな。編入生に生徒手帳を渡すのは私の役目だ」

行くこととする凜に一純は少し不安そうな表情を見せた

「……………一応言っておくが」

「分かっている、分別はつけているつもりだ」

そう言つと凜は再び佐倉の埋まった辞典の山を踏んずけながら、教室から出て行った

「やれやれ……………」

まあ心配だが凜も小夜も子供じゃあるまいし、杞憂だという事にしておこう……………

一純は広げた弁当を口に運ぶ

そしてまたまたまた一純は気付かなかった

凜の目に宿る決意と殺気に

・
・
・

凜は早足で廊下を進む

挨拶をしてくる生徒への反応も薄い

そして、少し思い詰めたような顔をしながら凜は思った

(……………すまん一純、小夜だけは何としてでも今の内に始
末しなくてはならない……………小夜の奴にアレがバレる前に……………
……………これも愛の為だ、許せ一純……………!!)

生徒会室の向かいながら、凜は一純に懺悔した

そして生徒会室の前に着くと、その扉を勢いよく開ける

ガラガラッ

凜は生徒会室に入るとロッカーに入っていたモノを静かに握り締

めた

(言い訳は小夜を討ち滅ぼしてからだ……………!!)

凜はそう静かに心に誓うのだった

t o b e c o n t i n u e d

第5夜：ストーキング・ブギ 2番

ピンポンパンポーン

『全校の皆さんに連絡です。只今生徒会室周辺にて恐ろしい殺気のようなものが発生し、数十人の生徒が倒れました。危険ですので全校生徒及び全職員は教室ならびに職員室から外に出ないようにお願いします』

ブツン

「おいおい、何か物騒な事になってんじゃね〜か？」

辞典の山から頭だけ出して佐倉が言った

「なんか生徒会室の周りの生徒がバタバタ倒れてたみたいだよ」

女の子のような顔立ちの男子生徒が佐倉に答えた

「おう御崎、相変わらず女みたいな顔しやがって、ホントに勿体な」

バキッ

「もう、顔合わせる度に変な事言わないでよ」

御崎はにこやかに辞典で佐倉をブツ叩いた

「どうやらこのクラスでは辞典＝武器の方程式が成り立っているらしい」

「そういえば、いずみんはどうした？」

「……回復時間が早くなってるよ」

「うん、それがね」

御崎はそう言つと一純の席を指差した

「なんか、ご飯食べながら寝てるみたい」

御崎の言つとおり、一純は箸を持ったまま寝てた

「……海賊王みたいな奴だな」

「もう、せつかく一緒に昼ご飯食べようと思って来たのに」

「まあまあ、どうせしばらくは教室から出られないだろうからゆっくりしてけよ」

佐倉もたまには普通の事を言う

「まず手始めに、俺をここからデイグアウトしてく」「暇だし一純君にイタズラでもしよ」

御崎は佐倉を完全無視して、一純の所に駆けて行った

「……フツ、なんとなく読めてたさ」

哀れ佐倉は次の日までそのままだったそうなの

一方、生徒会室周辺は死屍類類としていた

一般生徒数十人と侵入禁止の看板を置きに来た生徒会の方々が周
辺で気絶している

そして根源である生徒会室の中では、龍と虎が会いまみえていた

生徒会室の中はまさに混沌カオスだった

常人なら数秒も持たない位の殺気だ

そしておもむろに小夜が口を開く

「久しぶりね凜」

言葉こそ再会の言葉に聞こえるが、かもし出す殺気と、その目線の先の人物を射抜くような目線には、一切再会の喜びは無い

「貴様こそ生きていたとはな」

凜も、小夜のそんな気配に臆することなく不適に返す

そんな余裕のある凜の様子に小夜は苛立ちを覚えるが、顔に出すことなく言葉を続ける

「……………それはこっちの台詞よ、まさかまだ兄さんにつきまとっていたなんてね」

そう言うと小夜はポケットから小さな機械をいくつか取り出し、ガラガラと目の前の机の上に並べる

「……………やはり既に見つけていたか」

凜は、まるで予想していたかのようにそう言うと、静かに溜息を吐く

「貴女が9年前と変わっていないならと思ってね、徹底的に家捜ししたの……………そしたら案の定見つけたわ、大量の盗聴器と隠しカメラをね」

小夜はやれやれといった風に肩をすくめる

「……………全く、9年前に叩きのめしたっていうのに、兄さんへのストーキング癖はちつとも治ってないみたいね」

「フツ、叩きのめされたのは貴様方だろう？それに愛する者の事を知りたがる事の何が悪い？貴様の方だっていい加減兄離れしたらどうなのだ？」

凜の方も負けじと言い返す

互いに一步も譲る気配はない

「……フフフ、元々こんな話だけで終わるなんて思っ
てないわ」

そう言うと小夜はガーターベルトに仕込んでいた拳銃を取り出す

というか最初から生徒手帳なんて頭に無いらしい

「実弾じゃなくて暴徒鎮圧用のゴム弾なのが残念だけど、貴女相手なら十分でしょう?」

それを聞くと凜はフフンと鼻で笑い、背中から一本の木刀を取り出した

「奇遇だな、こちらも残念ながら真剣を使う訳にはいかないの
で鉛を仕込んだ木刀を用意したが、貴様相手なら十分だろう」

二人の殺気で窓ガラスに亀裂が入り始める

「兄さんならお弁当に仕込んでおいた睡眠薬で眠っているはずだ
から、心配せずに死になさい」

「気が利くな、愚妹といえど一純に自分の妹が死ぬ姿を見せるのは
忍びないからな」

「……」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

数秒程全てが停止した

だがそれは、これから起こる地獄の前のほんのわずかな静寂に過ぎなかった

「・・・・・・・・私のストーキング癖を治す手段が1つだけある」

「へえ？」

何かしら？と小夜が聞く

穏やかなやり取りに見えるが、殺気は先程と比較にならない位に膨れ上がる

「・・・・・・・・貴様を始末して一純と夫婦めおとになればよいのだあああ
っ！！！！」

言つと同時に凜の斬撃が目の前の机を小夜の方へ弾き飛ばす

小夜はサツと横っ飛びでかわすと、そのまま弾丸を凜目掛けて数発撃ち込んだ

だが既に凜の姿は無く、後ろのドアが開かっていた

「・・・・・・・・ふざけた事言ってくるじゃない」

小夜はゆらりと身を起こす

「でもそんな事は私が存在する限り、未来永劫有り得ないわ」

そう呟くと小夜は凜を追撃すべく、生徒会室から飛び出した

t o b e c o n t i n u e d

第6夜：ストーキング・ブギ 3番

人のいない廊下を小夜は駆け抜けていた

黒い髪をなびかせ、手に持った拳銃を強く握り締めながら

そして思考する

凜を始末する算段を

愛しの兄をあの手・この手・この学校で救うために

(……………この学校の内部構造は完全に頭に入っているわ。……………しかし、それでも相手に地の利があることに変わりはない。ましてあの女は腐ってもこの学校の生徒会長……………。校内は庭みtainなものだろうし……………。まずは間合いに入られるより先にあの女を見つけなくちゃ……………)

幸い先ほどの放送で廊下にはネズミ一匹いない

人の気配があつたらすぐに気づく

「普通の人の気配だつたらな」

「何っ!?!」

声が出た瞬間小夜は反射的に前に飛んだ

すると先程まで立っていたリノリユームの床に木刀が突き刺さる

・・・・・・・・木刀が地面に刺さるって

「ほう、よく回避したものだな」

上を見ると凧が蝙蝠のように天井にぶら下がってた

因みにスカートは完全に捲れていたが、下にはちゃんとジャージを穿いていた

「・・・・・・・・流石ストーカー、欠片も気配を出さないなんてたいしたものね。・・・・でも直前に声かけられれば誰だってかわせるわ？」

言いながら小夜はトリガーを引く

問答無用で放った弾丸は真っ直ぐ凧へ打ち込まれる

しかし凧はぶら下がった状態のまま弾丸を避ける

・・・・蓑虫が揺れてるみたいな動きだ

「何、僅かばかりの情けというものだ。ここからは手加減しない」

「・・・・・・・・随分と舐めた事言ってくれるわね」

「では、舐めたついでに貴様の算段を当ててやるつか？」

そついうと凧は天井から飛び降りてくる

「おそらく、お前が浮かんでいる私の弱点は2つ。まずはリーチ。貴様の銃のほうで圧倒的に長い上にこちらは狭いところでは振り回せない」

「……2つめは？」

「2つめは私が生徒会長という立場にあることだ。生徒の見本たる生徒会長としては、備品の破壊はよろしくないからな」

「あら？罪も無い生徒への暴行は良いのかしら？それに、さっき机ぶっ飛ばしてたじゃないの」

「何、これも教育的処刑という奴だ。それにあの机は私個人の持ち物だ」

軽いやり取りをしてるように見えるが、内心で小夜は少し焦っていた

(完全に読まれてるじゃない……)

小夜は凜の指摘したとおりの弱点を突くつもりだった

(……2つの弱点のそろう場所、図書室か理科実験室にでも誘い込もうと思ってたんだけど……)

小夜は内股のガーターベルトからもう一丁拳銃を取り出した

「……ガーターベルトは校則違反だぞ」

「それは失礼したわ」

小夜は冗談めかして肩をすくめた

しかしスグにその表情は鋭くなる

「……バレてるみたいだし、小細工なしでいくわ」

言っや否や小夜は両手に構えた拳銃を乱射した

「フツ……」

凜は木刀を引き抜くと、無数の弾丸を弾きかわしながら小夜に突撃した

「弾丸など、銃口から身をずらせば容易くかわせる……それ……」

凜が一気に小夜の懐まで入る

「速っ……!」

ガキイイイイイイン!!

床に2丁の拳銃がカラカラと転がる

小夜も一緒に弾きとばされ、床に倒れる

「クツ……………」

弾かれた衝撃で体を打ったせいか小夜はうつ伏せに倒れたまま動けないでいた

凜は落ちていた2丁の拳銃を拾い上げる

「拳銃は本来、両手で1丁の銃をホールドするものだ。……………短期決戦に焦るあまり2丁にしたのが仇となったな」

そして木刀の切っ先を小夜に向ける

「……………一純を諦めるというなら、これ以上痛めつけることもないが？」

小夜は顔だけ向けて言った

「……………貴女が……………私なら……………そういかし……………ら？」

「……………死んでも言わないな」

凜は静かに笑った

そして木刀を小夜目掛けて振り下ろ……………

「……………かかったわね」

小夜の目が怪しく光る

「!?!」

今まで痛みをこらえていたのが嘘のような速度で小夜が凜の懐へ飛び込む

さっきとは逆のシチュエーションだ

そしてその右手にはさっき弾かれたはずの拳銃が握られてた

「拳銃が2丁だけ何ていつ言ったかしら？」

さっきまでうつ伏せで倒れてたのも、凜に気づかれずに拳銃を取り出すためだった

全てはこの一瞬のためのブラフだ

「零距离なら避けられないでしょう!?!」

「クツ……………貴様……………」

凜もとっさに木刀を引いた

小夜と凜

互いの喉元を狙った一撃が今まさに……！！

ピンポンパンポン

……邪魔された

木刀と拳銃が互いの喉元で止まる

『お呼び出しいたします。……えと会長と妹さん、一純君が呼んでますので至急2・Cまでお越しください』

間延びした放送部員の呼び出しコールが校内に響いた

「……………」

「……………」

二人とも顔から血の気が引いていた

（お、怒られる……………）

二人同時にそう思った

そして、二人共まさに疾風のごとく2-Cへとスッ飛んで行く

さっきまでの攻防が、まるで嘘だったような静けさだけがそこには残っているのだった……………

t o b e c o n t i n u e d ……

第7夜：ストーキング・ブギ バックステージ（前書き）

今後もちよくちよく出てくるバックステージ。文字通りその話の舞
台裏を書いています。

第7夜：ストーキング・ブギ バックステージ

時間は小夜と凜がドンパチやり始める前辺りまで遡る

場所は職員室、その中では緊急の職員会議が行われていた

議題は勿論、生徒会室周辺の異常の解決だ

「はてさて、どうしたのですかねえ……………」

いかにも教頭といった顔の教頭がため息交じりに呟いた

「近づいて調べようにも、その前に気絶してしまいますしね」

いかにも体育教師といったガタイの体育教師もため息混じりに呟いた

「逃げ延びた生徒の証言を聞くと『背中に来るでピストルと刀を同時に突きつけられたような恐ろしい殺気がして急いで逃げた、少しでも遅れてたらその見えなピストルと刀で背中を貫かれていたかもしれない』……………」
「だそうです。」

モブ教師Aがそう告げた

「……………モブはあんまりじゃないですか」

いいの……!

「それで、あの時間に生徒会室を使用したのは？」

教頭が職員に聞く

「昼休みには確か生徒会長が編入生が編入生に生徒手帳の配布を行ってた筈です」

モブAが言った

「……………略されてるし」

「ということは、その編入生が類家に喧嘩でも売ったのか？」

体育教師が驚いたように言った

凜の恐ろしさは折紙つきらしい

とその時

ズガアアアアアアン！！

まるで机が凜によって木刀で吹っ飛ばされたような音がした

「むっ、何てわかりやすい音じゃ……………」

老齢の地学教師が言った

「生徒会室のほうから聞こえましたねえ」

「ついに始まりましたか」

「……もう一刻の猶予もありません、何とかして2人を止めないと午後の授業に支障がでてしまいます」

教頭がスツと立ち上がった

「こうなったら突貫あるのみです!!」

「きよ、教頭先生!! あんた男ですよ!! 私もお供します!!!!」

体育教師が感涙しながら立ち上がった

無駄に熱血な空気をだしてる

「……待ってください。神風特攻隊になるにはまだ早いですよ」

「え?」

特攻しようとしてた2人はその声に振り向く

声の主は数学教師にして2・Cの担任、瀬尾 南だった

「……いいなあ、名前までついて」

「主人公の担任ですから」

モブAは自分の出生を嘆いた

「確か編入生の苗字は高倉でしたよね？」

「はい、瀬尾先生の所の一純君と兄妹のはずです、自己紹介のときに妙にそこを強調して言っていましたから間違いありません」

小夜の担任の岡山がそう答えた

(……メインキャラの担任に生まれたかった)

モブAは心中でそう嘆く。もう何を言っても無駄らしい事を悟ったようだ

「そして、確か類家さんは一純君の幼馴染のはずです」

「おお!!という事は!!」

教頭は瀬尾の考えが分かったらしくポンと相槌を打った

「そうです、一純君の名前を利用します」

そういつと瀬尾は携帯を取り出して電話をかけ始めた

ブルルルルルルルルルル

「……………」

ブルルルルルルルルルル

「……………」

ガチャッ！

「純君？ちよつと緊急事態なんだけどね・・・」

『留守番電話サービスセンタ・・・』

ブチッ！！

「留守電でした・・・」

教師達から落胆の色が隠せなかった

「いや、まだ大丈夫です」

そついうと瀬尾は再び電話のボタンに手をかけた

*

所変わって21Cの教室

「ねえ、さっきの凄い音何だったんだろうね？」

御崎が佐倉に尋ねる

「そりゃあ、机が凜によつて木刀で吹っ飛ばされたような音じゃないか？」

「もう、トンチンカンな事言わないでよ。僕までおかしい人だと思われちゃうじゃないか」

「おかしい人って言うなああああああ!!」

辞典に埋もれた姿では少しの説得力も無かった

ピロロロロロロロロ

すると突然御崎の携帯が鳴った

「誰からだろう?」

そついつと御崎は電話に出た

「はい、もしもし?・・・瀬尾先生?・・・はい今2-Cですけど?・・・」

「はい?・・・いや、そこで寝てますよ?・・・はい・・・
・・・はい・・・分かりました」

ピッ

「何だ?瀬尾ティ〜チャ〜がどうしたんだ?」

「うん、何か今の状況を打破するために、早急に純君を起こしてくれだって」

「?なんとも不思議な電話だな?起こすだけでいいのか?」

「そうみたい、…………でも一純君さつきから何やっても起きなかったしなあ…………」

御崎はさつきまで一純の頬を引っ張ったり、鼻と口を塞いだりと様々な悪戯に興じていた所だった

「だったらこうすれば一発で起きるぞ、ちょっと耳貸せ」

御崎がトコトコ佐倉に歩み寄り耳を貸した

ゴニョゴニョリ…………

「あ、確かに基本を忘れてたね」

御崎は一純の所に静かに歩み寄り、その耳元に弱くそして長く息を吹き込んだ

「フ……………」

*

時間を同じくして放送室

中には3人の生徒がいた

一人が床に寝かせられたまま2人にパタパタ下敷きで扇がれてる

「せんぱい、伝令さん大丈夫でしょうか？」

間延びした声の女生徒がもう1人の女生徒に聞いた

「……ま、二階級特進ってどこかしらね」

先輩はサラリとそう言った

「殺さないであげてくださいよ」

伝令をパタパタ扇ぎながら後輩が言う

どうやら爆心地からココまで進入禁止の旨を直接伝えに来た生徒
会の人間らしい

………親分が元凶なのに………不憫な人達だ

「全く、何時になったら戻れるのかしら？」

先輩が苛立たしくそう言う

「さあ〜?」

音響設備の整ったこの放送室は壁も厚く回りの音も聞こえないので状況が分かりにくいのだ

「あ〜!!もう回りはどうなってんのよ!」

先輩のストレスもピークだ

と、その時

ブルルルルルルルル

内線が鳴った

ガチャ

「はい放送室です……あ、ちょっと待ってください、メモ用紙出しますで……はいOKです……はい……はい……わかりました、じゃあスグに流します」

ガチャ

「お上からのお達しよ、今からこの通りに流してだつてさ」

先輩は後輩の部員にさっきのメモを渡す

「了解しました」

そして後輩は放送器具にスイッチを入れていく

そして最後にマイクの電源を入れスイッチを押した

ピンポンパンポン

『お呼び出しいたします……。……。え〜と会長と妹さん、一純君が呼んでますので至急２・Ｃまでお越しください〜』

*

「ふ~~~~~」

「きいやあああああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

そこに居合わせた２・Ｃの生徒はこう語った

男子生徒A

「いや〜、一純のあんな声初めて聞きましたよ。最初は一純だって気づきませんでした」

女生徒B

「もういつものイメージからは想像もできない声で……もう教室中唾然としてたわ〜」

との事でした

「起きた〜？」

御崎がにこやかにそう言った

一方一純は自分の身に何が起きたか理解できず挙動不審状態になつてた

お構いなしで御崎が続ける

「あのね？さつき瀬尾先生から電話があつて『次の放送をよく聞いていて？そしてアドリブで頑張つて！』って一純君に伝えるように言われたんだけど」

「は？……放送？……アドリブ？……」

起きたばかりの一純の脳には未だに現状が読み込めないでいた

「一体なんの……」

ピンポンパンポ〜ン

「あ、放送始まったよ」

「え？」

『お呼び出しいたします。．．．え」と会長と妹さん、一純君が呼んでますので至急2・Cまでお越しく下さい』

(なるほど．．．) × 2・Cの皆さん

一純以外の2・Cの生徒全員は瀬尾の意図を理解した

つまりこの事件の元凶は一純の幼馴染である生徒会長と一純の妹によるものなので、とりあ

えず一純の名前を使って喧嘩を止めるけども、そのアフターフォロワーはよろしくね．．．

っていう事だ

(．．．でも余計な事言つと会長と妹に何されるか分からないから、喧嘩してたことは黙っ

ておこう．．．) × 2・Cの皆さん

命より大事なものは無い

生物の生存本能がそういていた

そして間も無く廊下から誰かが走ってくる音が聞こえてきた

一純は未だに状況が分からないままだった．．．

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.

第8夜：ストーキング・ブギ 4番

放送が流れてから僅か数秒、二つの足音が爆音をたてて教室の前に到着した

その足音の片割れが息を切らせながら、もう片方に尋ねる

「はあ……はあ……一純は睡眠薬で眠ってるんじゃないか？
たのか？」

尋ねられたほうも肩で息をしながら答える

「……こ、こっちだって全くの想定外よ……」

尋ねられた方、つまり小夜にとっても一純が目覚める事はイレギ
ユラーな事体らしい

(睡眠薬の効き目で最低5時限目までは目覚めない予定だったのに
……薬の配分にミスがあったのかしら……
ああ、そんな事よりも兄さんに凜を抹殺しようとした事がバレてし
まった事のほうの問題よ……このままじゃあ兄さんに叱
られるどころか絶縁されてしまうかもしれない……あ
あああああどうしようどうしようどうしようどうしようどうし
ようどうしようどうしようどうしよう)

どうやら小夜は完全にパニック状態になったらしい

一方凜の方はというとまだ冷静な状態だった

(…………一純には叱られるかもしれないが、もし咎められたら妹の方から仕掛けてきたと言い張れば矛先は妹に向くだろうしな・
…………うまくいけば一純の妹に対する好感度を下げられるかもしれない・
…………まあ、どちらに転んでも私にはあまり被害はあるまい・
…………)

……………小夜を陥れる策略まで練ってるほどだ

「いつまでも立ち尽くしてる訳にもいかん。開けるぞ」

凜はそう言うと教室の入り口に手をかけた

「ちょ、ちょっと!?!まだ心の準備が!?!」

一方、凜とは反対に冷静さを失った状態の小夜はワタワタとして
いる

小夜の言葉を無視して入り口を開いた

ガラガラガラッ!!

「失礼する……………ん?」

「あああああああの、に、兄さん?これはその……………ちょっと
とした手違……………あ?」

入り口を開けた二人は足を止めた、いや正確に言うと止められた

入り口を塞ぐ巨大な辞書の山に

その山越しに声が聞こえてきた

「小夜と凜か？」

「に、兄さん!？」

「一純か？」

二人も山越に返事をする

しかし凜は少し疑問に思うことがあった

「この辞書の山、先程より大きくなっていないか？」

凜が疑問をぶつけた、確かさつき来た時はふんずけて乗り越えられたはずだが、今は自分の肩位の高さになってる

一体どこからこれだけの本が出てきたんだか

すると地の底から呻くような声が聞こえてきた

「・・・・・・・・・・クラスの連中が面白半分で積み上げていったんだよ
・・・・・・・・・・」

勿論、孫悟空の如く山の下敷きになっている佐倉本人の声だ

「全く、いずみんもやっと起きたと思ったのに全然助けしてくれる気配ないしよ〜」

その言葉を聞き逃す2人では無かった

「兄さん、今起きたとこなの？」

小夜が一純に尋ねる

「ああ、起きたら放送が流れてな、なんか2人を呼んだ事になってるらしいが俺はサツパリ状況が分からないぞ？」

「そ、そうなんだ・・・」

表面上はなんとも無いが、小夜は心の中で歓喜に踊り狂った

(チツ・・・)

一方凜のほうは心の中で舌打ちした

「そうか、いずみんは知らないんだっただけ、あのな？どうやらこの2人がな・・・」

「「!？」」

小夜と凜に戦慄が走った

(こいつうううううう、余計なおおおおお!!)

(この状態でも構わないが、私の好感度を下げような事は無いに越した事はない!!)

「おお!!こんなところにゴキブリがああああああ!!」

わざとらしく、凜が木刀で辞書の山ごと佐倉を上を吹き飛ばす

「ぎゃばおおおおおおお！？」

佐倉は某カンタービレの人のような声をあげて宙を舞った

「ああ！あんなところにスズメバチがああああああ！！」

これまたわざとらしく、小夜が宙を舞う佐倉に弾丸を撃ち込む

「うげふうっ！？」

この時クラスみんなは佐倉の死を悟った

それと同時に佐倉のアホさを再確認したのだった

そして佐倉は別の場所に墜落した

ドサドサドサッ！！

その上に再び辞書の山が築き上げられていく、まるでそっくりそのまま場所だけシフトしたみたいだ

（まるで墓標みたいだ・・・）

クラス全員がそう思った

「随分息が合ってるなあ、最初は心配してたけど2人と仲よくなつてお兄ちゃん嬉しいぞ」

あくまで一純は気づかない

「ま、まあね」

「ふ、分別はつけてると言っただろう？」

だが2人の目はいろんな方向へと泳いでいた

おまけに制服は汚れてたり破けてたりと、いかにもさっきまで戦ってました感MAXだ

「ところで結局さっきの放送はなんだったんだらうな？」

一純は一人で首を捻る

小夜と凜は無言の「お前ら黙ってる」的なプレッシャーを他の生徒に放ちながら

「「さあ?」「」

2人仲良くしらばっくれた

t o b e c o n t i n u e d

第9夜：ストーキング・ブギ 5番

昼の騒動も収まり放課後

一純が教科書を仕舞っているとき小夜が教室に迎えに来た

「兄さん、一緒に帰りましょう？ 答えは聞いてないわ」

小夜はどこそそのイメージのような台詞を言つと問答無用で一純の制服の裾を掴む

「……一体どこから覚えてくるんだか」

一純は呆れながらも小夜に引かれるまま教室から引きずられていった

そして数分後

入れ替わりに凜が2・Cに入ってくる

「一純は………チツ………既にいないか」

その後から黒子の格好をした集団が追ってきた

「親方様あああああああ！ 生徒会の仕事をほっぽりだして何処に行かれますかあああああ！……！」

「昼間の件の事後処理もありますのにいいいいいい……！」

「どうやら生徒会執行部の人達らしい、黒子の格好には疑問が残るが・・・」

「チィ・・・もう追いついて来たか」

「トイレに行くと言って逃げ出して来たのだが、あいつら最初から網を張っていたな・・・」

「今回だけは何としても早く帰らねばなんだ！！邪魔立てするなら容赦はせんぞ！！」

「そうとうと凜はどこか四次元空間から木刀を取り出した」

凜の恐ろしさは身にしみて理解している黒子の皆さんは少し怯む

そして小声で相談を始める

（親方様も普段は真面目で立派なお方なのに、どうも一純殿が関るとタガが外れて自分を見失いになる・・・）

（ここは大人しく行かせた方がよろしいのでは？会長の目的が果たせなかった場合の方が後の業務に関するかもしれない）

（それに我らの身も危険です）

（・・・仕方ないここは引くか）

黒子達は小声での相談を終える

「・・・仕方ありません、今回だけですからね？」

そういつと黒子達は戻っていった

「……………すまないお前達」

自分に気遣って手を引いてくれた部下達に礼を言い凜は廊下を駆けた

*

そのころ2人は商店街を歩いていた

勿論小夜は一純と腕を組んでいる

「……………小夜、幾らなんでもこれは恥ずかしいんだが」

そついいながら一純は知ってる顔に見られてないか辺りをキョロキョロしてる

「私は平気ですから心配無く」

小夜はサラリと流す

しかし小夜の方も少しだけ回りを警戒していた

(・・・おかしいわね、あの女の事だからてつきり後をつけて来てると思ったんだけど・・・つけてるにしても何のアクシヨンも無いのは不自然だわ・・・)

「ところで兄さん夕飯は何にする？お父さんもお母さんも今日は遅いけど・・・」

「ああ、それなら俺が作る」

「兄さんが？」

小夜は意外な言葉に驚く

「ああ、料理は数少ない俺の趣味だ、心配しなくてもちゃんと食べるものを作る」

最近ではお袋より台所に立つ回数が多い程だ

「なら今日はお言葉に甘えて兄さんをお願いするわね」

(普通は逆なんだけど・・・まあこれはこれでアリね)

小夜は凜の事なんてスツカリ忘れたらしく、嬉しそうに鼻歌を歌いながら一純を引っ張ってスーパーに入って行った

*

その頃凜は高倉邸に潜入していた

玄関は勝手に作った合鍵により開けられている

勿論入ったあとで鍵は閉め、靴も鞆に閉まっております

そして凜は勝手知ったる他人の家といった具合に一直線に二階の一純の部屋に向かって行った

(おそらく、一度盗聴器の発見された場所では再び妹に発見されてしまっただろうな……まあ、妹が帰ってきてしまった時点で今までのようなアプローチに甘んじているワケにはいかなかったしな……盗聴器やカメラも一純の部屋の一箇所に留めておく)

部屋の前に着いた凜は、そのまま扉を開き部屋に入る

そして部屋に充満する一純の香りを胸いっぱい吸い込む

まさに凜にとって至福の時間だ

(ああ……この為なら死ねる……)

もはや麻薬中毒者のようである

事実3日に1度はこうやって不法侵入してるわけだが

生徒会の仕事のある日には、夜寝静まった時に侵入してるから筋金入りだ

そんな事してないでとつと告白でも何でもしちまえ！と言いたくもなるが、恋する乙女というものは本人の前では素直になれないものなのだ

そして凜はいつの間にか一純の布団にまで潜り込んでいた

(・・・本当はこの布団も持ち帰りたいのだが)

流石にそんな事をしては一純はまだしも妹の方に瞬時にばれてしまっ

・・・ていうか本来の目的など既に頭にないらしい

と凜が目先の快楽に囚われていると、なにやら玄関の鍵を開ける音と声が聞こえてきた

「兄さんそれで一体何作るの？」

「ボルシチだ」

凜は飛び起きた

「しまった・・・少し調子に乗りすぎたか」

カメラを仕掛ける時間は無い・・・

そして2階に上がってくる足音が聞こえてくる

(・・・仕方ない、今日は引くか)

そして部屋のドアが開かれるのと同時に凜は天井に跳んだ

そしてその一瞬後から一純が部屋に入ってくる

「エプロン、エプロン・・・と」

鞆をベツトに放り投げ一純はタンスからマイエプロンを取り出す

そして部屋を出ようとしてフと足が止まる

「・・・方が一、制服が汚れたら困るし・・・一応着替えるか」

(おおおおおおお!!一純の生着替えがああああ!!)

天井裏に隠れていた凜は静かに狂喜した

勝手にこの部屋の天井に出入り口を作っていたらしい

(カメラ越しではなく生で見るといふのはこんなにも興奮するものだったのか・・・!!)

完全に変態である

そんな怪しい気配を察知したのか一純は

「・・・やっぱり面倒だからこのまま料理しよう」

(何イイイイイイ!!・・・あ、ちよつと!?!純いいいい!!)

凜は血の涙を流してその場に崩れた

「残念だったわね」

「!?!」

凜はゆっくりと背後を振り向いた

背後には天井裏の暗闇のよりさらに黒いオーラを放つ般若が立っていた

「・・・大人しくしてると思っていたらやっぱり忍び込んでいたのね、油断も隙もない」

「貴様、何故この場所を知っている!?!この天井裏の入り口はこの家の人間に知られぬよう秘密裏に作ったのに!?!」

因みにこの部屋と二階廊下に一箇所ずつある

「勝手に人の家をリフォームしないでもらいたいわね・・・まあ簡単な話よ、私の部屋から天井裏の入り口を作ったからよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ハッ!?!」

小夜はしまったと言ったような顔をした

「ようするに今の私と同じ事をする為だな？」

(しまった、つい口が滑ってしまったわ……)

まあ、実際は夜這い用に作ったんだけどね……

「……あ、あなたはそれ以前に完全に不法侵入じゃないのよ！」

「まあまあ落ち着け、この事は一純に黙っててやろう」

そういつと凜は懐から隠しカメラを取り出した

「そして取引だ、一純の部屋の隠しカメラを許可しろ」

「いいわけないでしょ！！大体貴女のやってる事の方が遙かにヤバイじゃないの！！貴女の取引に应じるより警察に突き出したほうが遙かに私にメリットがあるわよ！！」

そりゃもつともだ

しかし凜は慌てずに続けた

「焦るな、まだ話しは終わってない」

そして再び懐から何かを取り出す

「お前がない間の一純を隠し撮りした映像の入ったROMと写真だ、もし应じるならこれもやろう」

「む、昔の兄さんの映像……」

小夜はゴクリと生唾を飲む

そして即決した

鼻血を出しながら見事なサムズアップを凧に向けた

「今ある分はそれだけだが、カメラ回収の時に他のも渡してやろう」
そう言うと凧はゴソゴソと天井裏からカメラを仕掛けた

(勿論、重要なのは抜いてあるが……)

一般用と重要文化財用の2種類が存在する事を小夜は知らない

「では、私はこれで帰らせてもらおう」

凧は小夜に言うが、小夜は鼻血をだしながら写真を見てトリップ
してる

「……無理も無い、一純の秘蔵写真だからな」

凧は小夜に対して奇妙な仲間意識を抱きながら、屋根に勝手に作
ったと思われる出口から外に出て行った

「……あの女、人の家をどれだけ改造してるんだか……
でも……」

まんざら嫌な女でも無くなったみたいね

凜はそういつと自分の部屋に戻って行った

一純はといつと・・・

「ん、うまい」

そんな事があつたなど露知らず、夕飯のボルシチを黙々と煮込んでいるのだつた

その日の夕食で、小夜が異様に浮かれているのが少し気になったが・・・

t o b e c o n t i n u e d

第9夜：ストーキング・ブギ 5番（後書き）

いや〜長くなりましたね。本当はこの第5夜の部分を書きたかったんですが……。無駄に戦闘シーンとか書いちゃいましたw。

第10夜：Monnequin's Lullaby 1番(前書き)

今回はちょっとマツタリ風味？

第10夜：Monnequin's Lullaby 1番

少し暗め照明に、まるで時間が止まっているようなマッタリとした雰囲気

BGMで流れているジャズもレコードプレイヤーもかなり昔のものらしく俺にはよく分からないが、この雰囲気に合わせてるという事だけはわかる

「そして何より、ここのコーヒーが飲みたくて来てしまっんだ」

「確かに、良い雰囲気・・・まさに隠れた名店ね」

「ああ、他の連中には秘密の取っておきの店だ」

とある日曜日

一純は小夜にお願いされて町を散策していた

9年も経てば町並みもガラツと変わってしまったもので、それが小さい時の記憶ならばなおさら町の記憶は薄らぐ

小夜にとつて帰ってきた故郷と言っても、もはや全く知らない町に来たのと同意義であった

そうして町を歩いている時に一純おススメの秘密の名店と聞かされ連れて来てもらったのが、この喫茶店「フランベルジュ」だった

そうして話していると注文したコーヒーを持って店のマスターが

やってきた

「一純君、私は別に隠れてるんじゃない、普通に名店になりたいんだけどねえ」

口ひげを蓄えたダンディなマスターが苦笑する

「そう言われても、いつ来たって他にお客さんいないじゃないですか」

一純も冗談まじりに返す

「君がいない時には大量さ」

マスターはフッフと笑うと2人にコーヒーを置く、そして

「お嬢さんにはケーキもサービスしよう」

小夜にはアイスチーズケーキをプラスして置いた

「い、いいんですか？」

「気にするな、マスターはフェミニストだからな」

一純はそういうと一口コーヒーを啜る

「それにマスターのケーキは手作りで美味しいぞ、何てったって俺のお菓子作りの師匠だからな」

「へえ……」

兄さんお菓子作りまでするんだ……

「イヤですねえー純君、褒めても何もでませんよ？」

マスターはアハハと笑う

「それに私の求めるのはあくまで美味しいコーヒーですから、ケーキ目的のお客さんも嬉しいですが、それだけじゃちょっと困ります」

「お客もそんなに来ないのに贅沢言うもんじゃありませんよ」

「だから、君のいない時には満席ですってば」

そうして二人で笑う

しかしそれを眺めるあまり面白くなさそうなお方が一名

(兄さんとマスターさん、2人でとっても楽しそうね……)

もしマスターが女性だったら殺意の眼光で射殺してやるが、マスターは男性、しかもナイスミドルときたもんだ

(しかも優しいし……)

小夜はパクリと一口ケーキを食べる

(ケーキも滅茶苦茶美味しいし……)

その美味しさに小夜の顔が蕩ける

(確かに、兄さんが秘密にしたがる気持ち分かるわ……)

コーヒーやケーキの味は勿論だが、何と云ってもこの店に流れるゆったりとした時間の流れに癒される

まるで外の空間とはべつの次元のようだ

個人的にもかなり良い店だと思う

(……また兄さんと一緒に来よう)

密かに次の来店プランを練る小夜だった

それから30分

二人は十二分にまったりして店を後にした

*

そうして結構歩いた2人は、最後に一純行きつけの雑貨屋に向か

う事にした

少し裏に入った所にその店はある

そして店の前にまで得体の知れない商品が溢れている何とも乱雑な店だった

「俺が使ってる鉄も切れる包丁はここで買ったんだぞ」

確かに小夜がその包丁でカステラを切ろうとしたら、まな板まで真っ二つにしてしまった事があった

(・・・あの包丁はこの出身だったのね、・・・あ！もしかして、吸い込んだら中身の消える掃除機も、漬物石に使ってるあの10cmくらいなのに体重計に穴の開くくらい重い謎の石とか、ゴキブリが入った途端何か貪るような音がしてゴキブリの消えるゴキブリホイホイもみんなこの店で・・・!!)

・・・高倉家はカオスワールドとなりつつあるらしい

「こんにちわ、何か面白い物入ってませんか？」

すると奥から60そこそこのお爺さんがでてきた

「おお高倉の倅せがれか・・・ん？今日は彼女連れか？」

(お爺さんナイス!!)

ちなみにさっきの喫茶店ではマスターに「おや？そちらは妹さんですか？」と一発で当てられてしまった

「いや、妹です」

……わかつてはいたけど、ちょっと淡泊すぎない？

そんな妹の微妙な乙女心に気づかず一純は何か面白いものはないかと辺りを見渡す

すると奥の方に大きな人形のようなものを見つけた

それはかなり大きい物で、普通の人間と同じサイズだ

一純はそれに近づきよく見てみると、それがとても精巧にできた女性の人形だと理解した

ショートボブの髪の毛に黒い全身タイツのような特殊な服を着ている

顔に触れてみるが、かなり冷たい

もし歩いていたら間違いなく人間と違ってしまっだろう

……というか

「……死体じゃないですよね？」

一純は恐る恐る主人に尋ねた

それほどまでに人間のようだったからだ

「心配するな、3日も動いておらんし死後硬直も起きていないから人形で間違いないまい、3日前の朝に人の店の前に勝手に捨てられておったんじゃない、全く邪魔でしょうがないわい」

「ふうん」

いつの間にか小夜が一純の隣に来て人形を見ていた

「それで、これいくらなんですか？」

「この店にはこんなものを買うような趣味を持つ人間はこないからもう、引き取ってくれるんならタダでやろう、ついでに車で運んでやるぞ？」

「それならこれいただきます」

小夜はサラリとそう言った

「お、おい小夜こんな引き取ってどうするんだ？」

それはそつだ

こんなもの、ぶつちやけ秋葉原方面でしか需要は無いと思う

「防犯よ、最近物騒だから中に人がいるように見せた方がいいですよ？」

「まあ、そういわれると……」

よつするに凜対策だ

流石に不法侵入はいただけないらしい

「じゃあ高倉の倅、コイツを軽トラックの荷台に積んどくれ」

そういつと主人は車を出しに行った

「はいよ………っと………う………これは………マ、マネキンにしては………結構重いぞ………」

(………しかも妙に感触がリアルだ)

主に胸とか、胸とか、胸とか、胸が

「………兄さん顔が赤いですよ?」

ちょびつと殺気のコもった声で妹君がおっしゃった

「………気のせいだ」

一純はちょつと棒読みで返事をする

そうして入り口まで運んでくるとちょつと良く軽トラックがやって来たので、そのまま荷台に乗せる

「妹さんは前に乗りなさい、倅は荷台で人形が落ちないように押さえておけ」

「荷台に人乗せたまま運んでOKなのか?」

「荷物の運搬をするときはいいんじゃない、ほれ出るぞ」

全員乗ったのを確認すると主人は車を出発させた

しかし小夜は気づかない

この選択を後々激しく後悔する事を……………

t o b e c o n t i n u e d

第10夜：monnequin's lullaby 1番（後書き）

・・・次回からはちょっとづつさくなります

第11夜：monnequin's lullaby 2番

車に乗り数分

俺はどんな風にこの人形を安全に固定するか考えていた

考えに考えた結果、人型の物を安定させる押さえておくには、この格好が一番丁度良いという事にたどりついた

まあ、手っ取り早くいうと……

「膝枕なんだよなあ……」

そう言いながら揺れる荷台の上で、一純は人形に膝枕をしてた

(こうして見るとホント人間にしか見えないな……)

髪の毛もサラサラしてるし……

一純は無意識に人形の頭を撫でる

なでなで

そうやってしばらく無心で人形の頭を撫で続ける

「ん？」

すると、何か硬いものが手に触れた

人形の髪を掻き分けてみると、そこにはスライド式のカバーがあった

一純はカバーを開いてみる

するとそこには案の定というか何と言うかスイッチが付いていた

「うむ、スイッチか……」

人間とは弱いもの

入るなど言われれば入りたくなくなるし、触るなど言われれば触りたくなる

まして今回はそんな注意書きは一切無い

となれば取る行動は一つ

「つりゃ」

ポチツとな

「……………」

何にも起きない？

……………ワケがなかった

ヴイイイイイイイイイイーン！！

何か人形から思いつきり機械のような音がした

ウン

そして次にパソコンを立ち上げた時のような音がする

すると人形の目に光が灯った

「これは……もしかして……」

とんでもない事をしてしまったのでは？

すると、人形は上半身を起こし一純の方を向く

『……………』

「……………な、何だ？」

その無言の重圧に耐えられずに一純は口を開く

『……………才名前八』

「……………へ？」

『アナタノ才名前八？』

ロボットが機械で合成したような声で聞いてきた

「……………高倉一純だ」

『タカクライズミ……………』

するとまたウィィィィィンという機械音が聞こえた

『声紋登録完了、ユーザー名「タカクラ・イズミ」登録完了』

するとロボットはフツと目を閉じる

「……………ユーザー登録？」

何やら嫌な予感のする単語が出てきたが……………

「……………そうです」

するとロボットは目を開き、先程とは違う普通の人間の声で返事した

「……………貴方は今から私の所有者^{ユーザー}」

「……………お前を引き取ったのは妹なんだが」

「……………関係ない」

……………いや関係大有りですけど

その言おつとしたら、ロボット……………言いつらいな……………
よし仮にロボットと呼ぼう

ロボ子はポフッと一純の膝に頭を乗せた

「……………続き」

「はい？」

「……………さっきの続き」

「ようは膝枕しろって事か？……………ん？そつういえばコイツさ
っきまで停止してたんじゃないのか？」

「お前、止まってたんじゃないのか？」

ロボ子は膝枕されながら答える

「……………3日程前に頭部に強い衝撃が加わったため、自衛とし
て一時的に身体機能をシャットアウトしていた。……………再び
衝撃が加えられるか、再起動されるまで行動は出来ないがセンサー
自体は作動している」

そつうと膝枕の状態からジツと一純を見上げる

「……………な、何だ？」

「……………続き」

「……………膝枕ならしてるぞ？」

ロボ子はジツと一純の手を見る

「……………頭」

「……………ああ」

一純はよじやく気が付いた

そしてロボ子の頭に手を乗せると撫で始めた

「……………」

見た目に変化は無いが嬉しいらしい

無言で撫でられ続けている

(ああ……………なんか、こう……………父性本能を刺激されるなあ……………)

娘を持った親の気持ちがわかる気がする

そうして撫でてしているとピクツとロボ子が何かに反応する

「……………センサーに異常……………原因は……………」
車内の女」

一純はゆっくりと背後のガラス越しに車内を見る

案の定、小夜が般若の形相でこちらを睨んでいる

「兄さん……………人形にそんな勿体無い事をする事ないじゃないの……………」

「……よりよって人形相手に……」

「どうやらロボ子が動く事にはまだ気づいてないらしい」

「……マスター、ここからの移動を提案する」

「移動って……なんで？」

理由を聞く前にロボ子は行動に移った

ロボ子はスツと立ち上がると一純を肩に担ぎ上げた

「え！？に、人形が動いてる！？……ハッ！！……」

「そうか……あの機械人形、死んだ振りをしてたのね！！……
そして兄さんが隙をみせた途端本性を現したのね！！！」

「何だか色々と勘違いをしてる」

「そんな事を言ってるうちに、ロボ子は一純を担いだまま走行中の車から飛び降りる」

「うおおおおお！？ちよつと！！危ない真似はよせええええええ！！！」

「……問題無い」

「そっいいながらロボ子は民家の屋根に飛び移った」

「大有りだあああああ！！！」

「そしてそのまま一純はロボ子に連れて行かれてしまった」

「な！？ちょっと兄さんをどこに連れて行く気よ！！ご主人！！車止めて！！兄さんがあの人形に誘拐されたわ！！」

「どつやらそつらしいのう・・・、もう見えなくなりおった」

「なんて事・・・！！！」

このままでは兄さんの貞操が危ない！！

しかし、あの人形を見失ってしまった以上追う手立てはない

小夜は悔しさにうな垂れる

すると後ろからスクーターが一台、爆音を響かせ走ってきたかと思つと小夜の乗る車のそばに停車する

「ここで諦めるな妹、貴様の執念はそんなものか」

馴染みの顔が小夜に向かってそう言った

あまりの唐突な登場に小夜は目をパチクリさせる

「凜！？何で貴女がここにいるのよ！？」

小夜はスクーターに乗り突然登場した凜にそう言った

「何、簡単な事だ。一純の衣服には完全防水の盗聴器と発信機が仕込んであつてな？何やらおかしな事になったようだから一純を救出にしたのだ」

「貴女……私と兄さんのデートをずっと盗み聞きしてたのね……」

「別に貴様の事は関係無く常に聞いているぞ？……まあそんな事より一純を機械人形の手から取り戻すぞ。奴は現在商店街の方に進んでいる。3キロ以上離れられると流石に追跡出来なくなる。早く後ろに乗れ」

「……仕方ないわね、ここはあの人形を叩き潰す事が先決だしね」

小夜は凜からヘルメットを受け取るとスクーターの後ろに立ち乗りする

「スピードを出すのが振り落とされるな？」

「いいから急ぎなさい！！」

そして2人を乗せたスクーターはスクーターらしからぬ加速であつというまに行ってしまった

「若いつていうのはええのう……」

残された主人はしみじみとそう呟いたのだった……

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.

第12夜：monnequin's lullaby 3番

「これって誘拐だよな？」

俺は無駄だと分かりつつも一応尋ねた

「……………任意同行」

淡々と無表情にロボ子は答える

「有無を言わず連れ去ったくせに……………」

俺は、俺を担ぎながら民家の屋根の上を失踪する少女にぼやいた

「大体何処まで連れて行くんだよ……………」

これも当然の質問だと思う

相手も何かの目的があって俺を連れ出したに違いない

が、ロボ子の回答は

「……………さあ？」

だった

無計画かよー！

「衝動的犯行かよ……………」

俺が少し呆れていると不意にロボ子が足を止める

ロボ子は何をするでもなく微動だにせずジッと空を見上げてる

「どうした？」

と俺が尋ねても反応は無い

そして何かを察知したらしくピクリと眉を動かす

「……………来る」

何が？

小夜のヤツが救出に来るとしてもこんなに早く追いつけるはずは
無い

「……………さっきの女ではない、私を追ってきた追っ手」

何だか不穏なニュアンスのする一言が発せられた

「……………追っ手って、お前は一体」

「……………説明は後、今は何も言わず私に命令を」

「命令？」

突然何を言い出すんだこの機械人形は

「……………そう、命令を……………少し下がって……………」

ロボ子がそう言い一純降ろすとほぼ同時に、突如黒い影が3体一純達の立っている屋根の上に飛来した

本当に空の上から降ってきたのだからビックリした

その外見は真っ黒いズツクといったところ、両腕の大きな爪が印象的だ

まさかメガ粒子砲とかは撃たないだろうな……………

すると不意にズツクの一体が機械的な音声でこちらに呼びかける

『RIK-0013X、タダチニソノ民間人ヲ開放シ、コチラニ帰投セヨ、コレガ最後通告デアル、ナオコチラニハ機関部以外ノ破壊許可ガ出テイル』

何やら物騒な事をのたまう黒ズツク

「……………マスター、迎撃命令を」

「命令つて……………」

「……………今の私にはユーザーの認証が無い限り一切の戦闘行動が行えない」

なるほどそう言う事か

「俺をユーザーにしたのはそのためだったのか……」

「……それだけでも言い切れない」

ロボ子がぼそりと何か呟く

「何か言ったか？」

「……気のせい……それよりも迎撃命令を……」

一純達がそう言ってるうちに、黒ズ ック達がジリジリと間を詰めて来る

「……後で一切合切説明してもらってから」

「……了解」

一純はスウ……と息を吸うとロボ子に言った

「迎撃開始」

俺は木馬の艦長のように手をかざしロボ子に命令をだした

それを受けたロボ子はゆっくりと相手を見据える

「……戦闘行動抑制の解除の承認を確認……
RIK-005『チェイサー』の迎撃を開始する」

それを聞いた黒ズ ック達も行動を開始する

『……最後通告ノ拒否ヲ確認、胴体部以外ヲ破壊シ研究所ニ持ち帰ル』

そういつと黒ズ ック達が一直線に並びしてロボ子に向かう

『フォーメーションJSA開始』

黒ズ ック共が、略さなかったらきつと色んなコードに引つかかっちゃんいな技名を言いながらロボ子に突撃していく

しかもそりゃズ ックじゃなくて ムだろう……

こいつらの開発者も狙ってこんな技組み込んだんだらうか……

そしてロボ子の反撃も ンダムのように踏み台にしちゃうのか？
と置いていたら

「……戦闘許可された今、チェイサー如きに負けない」

そういつとロボ子は両掌を黒ズ ックに向ける

「……マスター、私の前にでないように」

思わずロボ子の気迫に押される

「……わ、わかった」

まあ、最初から出る気は皆無だが

すると黒ズ ック達はロボ子が何をしようか分かったらしく

『目標ガ音波砲ノ発射シーケンスニ突入、迅速ニ撃破サレタシ』

と言い、さらに加速する………が

「………もう遅い」

加速を開始した時点でロボ子の準備は終了していたらしかった

「………マーシャル・サウンドウェーブカノン、ファ
イア」

そう言い終える瞬間、ロボ子の掌を中心に耳を劈く音が周囲に響
き渡る

しかしロボ子の掌の射線軸上の変化はさらに凄まじかった

空間が歪み、周囲の空気が震えているのが目に見えて分かる

そしてその真っ只中にいる黒ズ ック達は見る間にその体を崩壊
させていった

破壊されボディから剥がれた装甲も、空中にコンマ数秒浮いてい
たかと思っただら見る間に塵になっただけ

そして音が止み周囲に静寂が戻ったとき、文字通り其処には塵も
残っていなかった

その光景を一純は只じつと見つめていた

「……………マーシャル音 砲も結構ヤバイネタだと思っんだが……………」

突っ込むのはソコではないと思う

目標を破壊したロボ子はゆっくりと一純に振り向く

「……………終わった」

と言いながらスタスタと一純に歩いてくると背後に回った

そして

ズガッ!!

「!?!」

強めの膝カックンを一純にお見舞いする

一純はその衝撃で正座のような体勢でその場の崩れる

「いきなり何を…………?」

「……………さっきの続き」

ロボ子はそう言いながら三度一純の太ももに頭を乗せる

「……………撫でるのも」

上目遣いでロボ子は一純にねだった

ぶっちゃんけこんなのに耐えられる男はいません

「わかったわかった」

父性を刺激されながら一純はロボ子の頭に手を伸ばす

「そこまでよおおおおおおおおお！！！！！！！！」

何だか聞き覚えのある叫び声が聞こえてきた

一純が下を向くと、物凄い速度で接近してくるスクーターが見えた

「あの黄色いベスパは……………」

そしてスクーターが爆音を響かせながら、大ジャンプを慣行し屋根の上に飛び乗ってきた

「一純！！大丈夫か！？」

「早く兄さんから離れなさい！！この雌豚が！！！！」

小夜と凜がスクーターから降りこっちに近づく

なんで凜までいるのかはさておき、小夜の方は口がやけに悪くなっている、これはかなり頭にきてる状態だという証拠だ

「……………」

ロボ子はそれを拒否つつ、俺の腰にしがみつく

「ご、ご、ご、ご、ご、ごんのロボット三等兵風情がああああああ
あああ!!!!!!私だってそんな羨ましい事したことないのにい
いいいいいい!!!!!!」

もう小夜は爆発寸前だった

しかし凜は冷静にロボ子の方を見ている

「どうした凜?」

「いや、少しそこの機械人形に見覚えがあつてな……」

「何だつて?」

その言葉に俺は驚きの声を隠せない

「確かウチのグループの類家エレクトロニクスから、試作型のエン
ジンを搭載したアンドロイドが逃走したとの情報があつてな……
……、その時見た資料の写真と同じ顔をしているのだ」

(……元凶はコイツの会社だったか)

よく考えたら、こんな作る科学力ある所なんてコイツのトコく
らいしか無いしな

「まあ、これでこの機械人形を叩き潰す大義名分が私にはできたワ
ケだ……フフフフフフフフ」

怪しい目つきをしながら凜が背中から刀を引き抜く

「真剣は捕まったりしないか？」

「安心しろ、その時は上から圧力をかける」

いっちゃん目をして凜が言う

どうやらちっとも冷静ではなかったようだ

「そんなもの無くても私は関係ないわ」

小夜が両手に拳銃を握り締めて言う

「只撃ち貫くだけ！！」

アハハハハと壊れた笑いを漏らしながらロボ子に銃口を向ける

一純は「どこから拳銃なんて手に入れたんだよ」というツツコミも忘れ、現在の小夜と凜の状態に焦る

(ヤバイ……………2人とも完全に我を失ってる……………)

幼稚園の時の惨劇の時もそうだった

あの時と違う点は、今回は2人が協力してるという事だ

勿論悪い意味で……………

するとロボ子は一純から手を離し2人に向き直る

「……………マスター、命令を……………最終安
全装置解除の命令を」

こっちもやる気満々だった

「……………先程の10倍の出力で確実に消す……………
……………そしてマスターに撫でてもらう」

最後のほうはよく聞こえなかったが……………

とりあえず、こんなトコで暴れられてはこの屋根の下の住民に多
大な被害が出てしまう……………

いや、多分それだけではすまないだろう

小夜と凜はともかく、ロボ子の場合さっきの10倍の威力の音波
砲を出した日には……………

とにかく何とか止めないと……………

とその時

ドガアアアアアアアン！！

そんな一触発の空気の中、またもや空から何かが落下してきた

今度は何やら白衣を着た男性だった

ていうか生身で落ちてきたのか……………

「その戦いちょっとお待ちください!!」

なんとも無かったように起き上がり、男性はそう告げた

「わたくし類家エレクトロニクスの研究員です……………ん？そこにいるのは会長のお嬢様じゃないですか！？何でこんなトコに!?!……………いやまあ、この際それはどうでもいい事です……………事の成り行きはチェイサーの送信したデータで知っています」

そして研究員は俺の方を向く

「貴方が0013Xのユーザーになった方ですね？」

0013Xというのはロボ子の事だろう

研究員は俺の方にツカツカと歩いてくる

そして俺の目の前に来て立ち止まる

「今回の件ですが……………」

研究員は厳しい顔をしてこちらに話しかける

おそらく登録の解除とか今回の件は忘れろとか言ってくるんだろう

……………と思つてたら

「このままこの子の面倒をお願いします」

とこちらの予想外のものだった

「この事を含めて今回の件について色々と説明しますので場所を変えましょう、人様の家の屋根で立ち話も何ですので……」

「それもそうか」

俺達はゾロゾロと人様の屋根から下りていくのだった

t o b e c o n t i n u e d

第13夜：monnequin's lullaby 4番

場所は移って喫茶店『フランベルジュ』

一番近い馴染みの店で、話を聞かれる心配の無い所だったので再びやってきたのだ

マスターには冷やかされたが、無視して席に座る

ちなみに凜と小夜が一純を挟み、残りの2人と向き合ってる形だ

「さてさて、何から話したらいいですかねえ……………」

研究員は運ばれて来たコーヒーをズズツと啜る

「そうですねえ……………まあ順序立てて話しましょう。この子の正式名称は君達も聞いたかもしれませんがRIK-0013Xといえます。この名前の通りわが社の開発している、いわゆる人型ロボット13号機の試作機です」

研究員は口ボ子を見る

「最初は介護用に開発されたんですが、何だか作ってるうちにあれやこれやと機能を追加したり、試験的に新しい技術を組み込んだりしてたらいつの間にか物凄い事になってまして……………」

研究員はアハハと笑いながら頭を掻く

「笑い事ですか……………」

そんな面白半分であんな兵器を搭載しないでもらいたい

「それで最終的には汎用人型決戦兵器みたいなのでいいんじゃない？的なノリになってきてねえ、でも流石にこんな無茶苦茶な戦闘能力を持った機体を無意味に保有する事はできなくてね？上から解体命令が出たんですよ」

「解体命令？」

「そう、こっちも結構抵抗したんですけどねえ……遂に上層部も痺れを切らしたらしくて、さっきみたいにRIKシリーズを投入してきて強制的に取り押さえにでたんです。しかも最初は妥協案として戦闘システムの制限を出しておきながら、こちらのプログラム修正が終わると同時にコレですよ」

「まったく汚いやり方をする……」

凜が苦々しげにそう呟く

身内内での出来事だから、そういう事の嫌いな凜にとっては尚更不快なのだろう

「だから私達はこの子を外に逃がしたのです。……まあ、逃がしたのがバレたらリストラされますので逃げられた事にしてあるのですが」

この人もこの人だなあ……

「そして研究所から上層部にハッキングをかけて、13Xを追撃し

てる機体のデータを盗み見して、ここに駆けつけたわけです」

それがこの研究員の話した事のいきさつだった

しかし一純はまだ分からない事があった

「じゃあ何でこいつは雑貨屋になんか居たんだ？それになんで俺をユーザー登録した？別に小夜のヤツでもよかったわけだし……」

研究員は困ったように頭を掻く

「それは私にも分かりません。本人に直接聞かない事には」

一純はロボ子の方を向く

「何でだ？」

単刀直入に尋ねる

「……あの店にいたのは、追っ手から逃げてる途中に屋根から足を滑らせて頭部を強打したためフリーズ状態になりそのまま店の中に入れられた為……そして貴方をマスターにした理由は……」

ロボ子は俺をジッとみつめる

「……優しかったから」

恥ずかしい事をサラッと言う……

「……………別に何もしちゃいないが」

少なくとも俺にはそんな記憶は無い

「……………身体機能が停止してる間も私のセンサーは活動している……………マスターだけは私の事を人形ではなく人間のように扱ってくれた……………本当に人形である私の頭を優しく撫でてくれた……………」

そんな大げさに捕らえられたらこっちも恥ずかしいじゃないか

一純は少し恥ずかしそうに頬を掻く

「いやあ〜、青春だねえ〜……………青春ついでにさっきの事なんだが……………」

研究員は一純を向く

「この子を暫く預かってはくれないかい？」

研究員はそう言つと頭を下げる

すると今まで沈黙を保っていた小夜が口を開く

「却下です」

何故お前が答える妹よ……………

「いくら機械人形でも、知らない男性と1つ屋根の下というのはい

ただけません！！預けるなら凜のところにも預けたらいいでしょう！！」

当然の事ながら小夜は絶賛反対中だ

「その境遇には同情するがウチに預けたらスグに見つかってしまう、一応私も類家グループ会長の娘だからな………だからといって一純の家に住まわせるのは私も反対だ」

こちらも、小夜よりはマシなものの反対派だ

「困りましたねえ………もしこのまま捕獲されて動力部を見られたら私逮捕されちゃいますよ」

なにやらサラッと不吉な事を言いながら研究員はアハハと笑う

「捕まるような動力つて一体………」

知らぬが仏というやつだろう

するとロボ子がポンと研究員の肩を叩く

「………大丈夫………私はこのまま逃げ続ける………マスターと一緒に」

なんですと！？

「………マスターと一緒になら平気………だから心配しないで」

「それならこの店に住んでもらって欲しいんだが」

全員が声の元を見る

そこには声の主であるマスターが立っている

そして事のいきさつを話し始める

「実はさつき3年間捜し求めていた伝説のコーヒー豆がギアナ高地にあるかもしれないっていう電話がありました。これから現地に行くうと思つてたんですが、その間店を空けるわけにもいきませんので、そちらがよければ私がない間住み込みで店で働いて欲しいのです」

店長はまるでダイジェスト版のような説明口調でそう言った

俺達は声を揃えて返答する

「「「是非ともお願いします」「」「」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え〜」

ロボ子以外はだが・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・マスターと離れるのはイヤ」

そういつて駄々をこねるロボ子と暴走する小夜と凜をなんとかなだめて、ロボ子を店に住ませようと説得するのに1時間以上かかってしまうのだった

*

午後五時

フランベルジュの店内は先程とは変わり静かに時間が流れる

店内には一純とロボ子だけ

小夜と凜は帰宅し、研究員も研究所に戻り、マスターは早くも外国に飛んでいった

一純はロボ子に店の事を教えるために店に残っているのだった

本当はマスターが教えるべきだが、すでに日本から出て行ったしまっているのではどうにもならない

それでいいのか？マスター……………

そして今はロボ子にコーヒーの淹れ方を教えてる最中だ

「ところで……」

一純はロボ子に尋ねる

「……?」

ドリップされてるコーヒーを見てたロボ子が一純の方を向く

「俺はお前を何て呼べばいい?」

心の中では便宜上ロボ子と呼び続けてたが、流石に実際に呼ぶとなるとアレなネーミングなのでちゃんとした呼び名が欲しい

「……研究所では0013Xと呼ばれてた」

ロボ子は静かにそう言う

「いやそうじゃなくて、流石に番号で呼ぶのもなんだから人間らしい名前をつけようと思ってだな……」

ロボ子は少し考えると

「……マスターに任せる」

と言った

「そういうのが一番困るんだよなあ……」

何食べたい?と聞き、なんでもいいと言われた時のお母さんの気持ちだ

「それじゃあな……………」

ううむと一純は考え込む

そして何か浮かんだらしく、顔を上げロボ子を見る

「マキネはどうだ？漢字表記で書くと麻紀音だ」

ちなみに漢字は適当に当てた

「……………何故その名前？」

ロボ子改め麻紀音が首をかしげる

「マネキンをもじった、確かマネキンは『人の形をした』って意味らしいからな」

そついつと一純は麻紀音の頭を撫でる

「お前はロボットだけど、本当の人間のように付き合おうって意味だ」

麻紀音は撫でる一純の手をスルリと抜け、一純の背に手を回し抱きつく

「……………一生大事にする」

一純を見上げる麻紀音の顔は無表情だったが、ギュッとしがみ付く腕の強さから麻紀音の嬉しさが伝わってくるようだった……………

t o b o c o n n t i n u e d

「. ってこんな甘い雰囲気で終わらせるもんですかああ
ああああああ!!!」

そう叫びながら小夜が入り口のドアを蹴破ってくる

「その通りだ、私達がお前達2人を残して普通に帰るかと思ったら
大間違いだぞ」

天井から凧が飛び降りてくる

「もうこの際、機械人形がどうか言わないわ」

そういつて前からにじり寄る小夜

「そう、そんな事よりも.」

凜も背後から迫ってくる

「私達にもハグを!!!!!!」

さっきの綺麗に終わったと思ったのは幻だったか……

「……マスター迎撃しますか？それとも……」

麻紀音は抱きつきながら視線を小夜と凜それぞれに向け言う

「……一緒に逃げる？」

そういつた麻紀音の顔は少しだけ笑っていた

「ハグをおおおお!!!!」

そういいながらにじり寄る2人に、これまでとは違う恐ろしさを
感じつつ

一純はとりあえず逃走を図るのだった

このあと見事に捕まり、2人にたっぷりとハグされたのは言うまでもない

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.

第13夜：monnequin's lullaby 4番（後書き）

お楽しみ頂けたでしょうかmonnequin's lulla
by

今回の作品はちょっとラブコメらしくラブの部分を増やしてみま
した

y
ちなみにサブタイトルのmonnequin's lullab

マヌカンス・ララバイ、つまり「人形達の子守歌」ですが

英語で書くと自分でも一瞬読めませんw

今度から英語で書くのはやめよう………

第14話：女色々長恨歌 1番

「……………なあ麻紀音？」

一純はコメカミを押さえつつ麻紀音に尋ねる

「……………何？」

麻紀音は、一純の座ってる席にメニューを運びつつ返事をする

「その格好は一体どうした？」

麻紀音は「どこか変？」といった様子で首を傾げる

「……………何か問題でも？」

「いや、問題というか何と言っか……………」

一純は言葉に詰まる

それもそうだ

麻紀音の着ている服

白と黒のコントラストが印象的なエプロンドレスに専用のキャップを頭につけたその格好はまさに……………

「……………一体どっからメイド服なんて持ってきたんだ？」

そう、一純が学校から下校しフランベルジュに寄った所、メイド服姿の麻紀音が奥からトコトコ出てきたのである

一純は入った瞬間思わず「すみません、間違えました」と外に出てしまった

幸い、一純にはそういった属性は皆無なのでトチ狂った反応は無いが、流石に何時もの日常とかけ離れたモノの出現には、一瞬パニックになる

まあ、アンドロイドが居る時点で日常とはかけ離れてるが……

「……………こここの店長から電話があった……………
・そして仕事中は、タンスの中に入っているこの制服を着用するよう指示があった」

(あのマスターの差し金か……………)

なんか笑顔でサムズアップする店長が頭をよぎる

「……………変?」

麻紀音が心なし不安そうな顔をして尋ねる

いや、変と言えば変だが……………

「安心しろ、似合ってる」

・・・・・・・・まあ、格好自体は似合ってるからいいか

それを聞いた麻紀音はホットしたような顔をした・・・・・・・・気がする

「・・・・・・・・・・ところで注文は決まった？」

「ああ・・・・・・・・・・じゃあコーヒー3つ」

麻紀音は不思議そうな顔をする

「・・・・・・・・・・マスターは普段もそんなに飲むものなの？」

それもそうか、1人で3杯もコーヒー頼めば

それに、俺だってまさかコーヒー3杯も飲む分けない、ちゃんと理由がある

「いや、もうすぐ小夜と凜も来るはずなんだよ、2人とも掃除当番らしくて遅れてくるんだ」

帰るとき2人に声をかけたら

「「スグに追いつくから先に行つてて!!」」

と、全く一緒の答えが帰ってきた

まあ、結局追いつかれずに、ここまで辿り着いたわけだが・・・・

あの2人の事だし、そのうち来るだろ……

「……………そう、あの2人も来るの……………」

麻紀音が少し沈んだ声でそう答える

「……………どうかしたか？」

「……………問題ない……………では「コーヒ」
を淹れて来る」

そういつて麻紀音は奥に下がっていった

「なんか少し機嫌が悪くなった気がするんだが……………」

何か変な事言ったか？

この主人公は、例に漏れず朴念仁のようだ

するとカランカランと店の扉が開き、2人の客が入ってくる

「兄さん、お待たせしました」

「待たせたな一純」

勿論小夜と凜だ

「いや、そんなに待つちやいない……………とりあえず座れよ」

一純はそう言つと席を勧める

普段の2人なら一純の隣を巡り、ここで一悶着ありそうなものが、何故か今回はアツサリと決着が付いた

「

「……………むう」

嬉しそうに小夜が一純の隣に座り、不満そうに凜が向かいに座る

凜は唇を尖らせ小夜を睨む

(そんなに目で睨んでも無駄よ？ちゃんと公平にじゃんけんで決めた事なんだから)

小夜はフフン笑い、凜の視線を無視する

どうやら遅くなった要因はここにあるらしい

2人が席に着くと、麻紀音がコーヒーを3つ持って奥から出てくる

「……………おまたせマスター……………と他2人」

そう言いながら麻紀音はテーブルにコーヒーを置く

「随分な言いようね……………こっちは一応客よ？」

その他扱いされたのが不服だったのか、小夜が唇を尖らせる

「落ち着け小夜、今日は機械人形と喧嘩するために来たわけではあるまい」

珍しく凜が小夜をたしなめる

「そうだぞ小夜、今日は麻紀音の淹れるコーヒーを飲みに来たんだろ？」

一純にまで言われては小夜も大人しくするしかなかった

「……………それもそうですね……………仕方ありません、今日のところは大人しくしておきましょう」

「そうそう、素直な小夜が一番可愛いぞ」

一純の言葉に小夜は頬を赤らめる

「に、兄さんったら……………」

「……………」

「……………むっ」

勿論他の二人は面白くないわけでは……………

「……………ケーキも作ってくる」

少し頬を膨らませて、麻紀音は奥に引っ込んで行く

凜も少し機嫌が下降気味らしく、口がへ字になってきている

そんな凜の様子を知ってか知らずか、一純が凜に話しかける

「そういえば最近またアレが増えたらしいな凜」

「ああ……そういえばそんな話も聞くな……」

凜は機嫌が悪くなる一歩手前で、体制を取り戻した

「アレって……一体何なの？」

小夜が頭にクエスチョンマークを浮かべ、2人にそう尋ねる

二人は同時に小夜の方を振り向くと、口を揃えてこう答えた

「「丑の刻参り」」

「う、丑の刻参り!？」

二人の口から出てきた言葉に小夜は少々驚く

「学校の裏に神社があるだろう？あそこの神社にあるデカイ樹に恨みを込めて藁人形を打ち付けると相手が死ぬっていう……まあ根も葉もない噂だ」

そういうと一純はコーヒーを啜る

「最近暖かくなってきたからな、そういった者も増えているのだ」

凜もコーヒーを啜る

「ふうん……………」

小夜も釣られてコーヒーを啜る

……………そして店内の時間が一瞬時が止まった

時が動き出した瞬間、三人の口から黒い液体が放物線を描きながら吹き出された

そして、そのまま三人の時間が、また30分程停止した

……………ていうか気絶してた

「……………」

そして、店の奥では麻紀音が鼻歌を歌いながら、第二の悲劇『赤紫ケーキ』の製作に奮闘しているのだった……………

草木も眠る丑三つ時

場所はある神社

一人の人影が神社の境内を横切る

アップで束ねた長い髪が風に吹かれ僅かに揺れる

勿論、類家凜その人だ

「………確か此処だと聞いたのだが」

そう言いながらキョロキョロと周りを見渡す

するとその視線が、注連縄のしてある巨木に目に止まった

*

大人数人でも回りきるか分からないくらいの太さだ

「見つけたぞ……これが『呪いの霊樹』だな……」

『呪いの霊樹』

それはこの町に数百年前から伝わる伝説であり、この樹に呪いを込めながら藁人形を釘で打ち付けると、呪われた相手は必ず殺されるといふ、何とも恐ろしくもありがちな伝説である

「……呪いの類は信じてはいないが……まあ、これである2人が亡き者になれば儲け物だ」

すると凜は懐から2体の藁人形を取り出す

そして少し樹から離れると、何やら目を閉じ集中し始める

「……あの2人を亡き者にし、一純と私が将来結ばれますように……」

そして、目をカツと見開くと空中に藁人形を放ると、懐から小刀を取り出し藁人形目掛け投げつける

そしてそのまま小刀は藁人形を貫き、霊樹に突き刺さる

「ふう……」

と息を吐くと凜は、樹から小刀を抜く

「これで願いが叶うなら苦勞はないがな……」

そついつと凜は暗闇に消えていった

*

30分後……………

同じ場所に、今度は別の人影が現れた

ショートボブの髪とメイド服がイヤに目立つ

どつちらこの方も、ちゃっかり話を聞いていたらしい

「……………ここが情報の場所」

無論、麻紀音だ

麻紀音は樹の前に立つと、何やら機械っぽい音を出し始める

「……………データ照合終了……………この樹で
間違いない」

そういつとこちらも藁人形を2つと釘を、メイド服のポケットから取り出す

「……………呪いとは便利なシステム……………
こうするだけで願いが叶うらしい」

そしてその釘を藁人形に打ち付け始める……………拳で

ガンガンと音を立てながら、殴って釘を打ち付ける麻紀音

「……………これで……………マスターと……………
……………2人で……………」

そして釘を打ち終わると、背中から飛行機の翼みたいなのをしゃキンと出し、夜空に飛んで行くのだった……………

……………って飛べるのかよ!!

*

そのまた30分後……

……もう分かるよね？

案の定そこには小夜の姿があつた

「……私は兄さんを我が物にするためならどんな事でもするわ」

そして案の定藁人形を、懐から取り出す

するとその藁人形を、それぞれ樹に固定する

「そして、そのための準備も常に抜かりなしよ!!」

そうやって小夜はポケットから銀色に光る弾丸を取り出す

小夜はガーターベルトから拳銃を抜くと銀弾を装填する

「魔術的な力を込めた特製銀弾……製作期間4ヶ月、いざと言う時のために取っておいた超特別性……今此処で使わせて貰うわ」

小夜はそう言いながら、藁人形に標準を定める

その目には狂気が宿っている

「……兄さんに手を出す女全員に天誅を……そして兄さんの愛を私だけのモノに!!」

そういつて小夜は引き金を引く

弾丸は、銀色の直線を描きながら、藁人形の胸を貫き、樹の幹にめり込む

弾丸を放った小夜はフウと息を吐くと、何時もの顔に戻る

「……さて、早く帰って寝ないとお肌に悪いわ」

そして小夜は拳銃を仕舞い、銀弾を樹に打ち込んだまま神社を後にするのだった……

*

小夜が帰った後

長い時を経て、数多くの呪いを打ち込まれ続けた樹に、今異変が起き始めていた

樹を中心に大気が震え、夜なのにそこはさらに深い闇を生み出していた

数百年間打ち込まれた続けた呪いが、小夜の打ち込んだ『特別製の弾丸に反応し集まりだしたのだ

それは銀弾を中心に集まると禍々しい気を発しながら、まるで心臓のように脈動を始める

そしてその心臓を中心に人の形のようなものが形成されていく

やがて大気の振動が止み、夜が静けさを取り戻した時

その闇に、確かに別の存在が生まれでた

その姿は闇に紛れて見えないが、その口が動き声を発しようとしているのは分かる

「……年月と……人の恨み辛みが、遂にワシに形を与えたか……」

影は感慨深そうにそう呟く

「……とりあえず、今ワシが成さねばならぬ事……それは先程のモノ達の願いを聞き届ける事……」

影がユラリと揺らめく

「……あ奴等の思い人を消す事……さすれば、あ奴等が思い悩む事はもう無いじゃろつて……」

クククと影が笑ったと思うと、スウッと気配ごと影は掻き消えて

いくのだった・・・

t o b e c o n t i n u e d

第15話：女色々長恨歌 2番

一純の朝は大抵早い

編集者である母親が夜勤明けで帰る事が多い為、家事の大半は一純がやる事になっているからである

ちなみに銀行員の父親は、今年になってから隣の県へ転勤になってしまい、たまに週末帰ってくる以外は家にいない

そして毎朝キツカリ5時30分に起きてから新聞を取りに行き、朝食と昼ごろに起きるであろう母親の分の昼食を作るのだ

まあ、今まではこんな感じだったのだが、小夜が帰ってきてからは交代でこの作業を分担するようになったため、一純的にもかなり楽になった

そして今日は小夜が朝食を作る日である

台所では、小夜が味噌汁を作りながら魚を焼いてる真っ最中だ

ポピュラーな朝食ながら、シリアル等に逃げないしっかりとした朝食だ

「新妻ってこんな感じかしらね」

そして本人もいたって幸せそうに、鼻歌交じりで味噌を溶いている

小夜は小夜で、一純との擬似新婚生活（小夜しか思ってないが）

をエンジョイしているらしい

そして午前7時、一純が二階から降りて来る

心なし、何時もより足取りが重い気がする

「兄さんおはようございます、今日は遅かったですね？」

小夜は一純に挨拶しながら、不思議そうに尋ねる

それもそのはず、一純は朝食当番に関係なく、5時30分に起きるといふ事が習慣として身に付いてしまっているのだ

それなのに寝坊するとなると、小夜も不思議に思う

一純はゴシゴシと目をこすりながら食卓の椅子に座る

「……………寝不足だ」

そう答える一純の目には、確かに大きなクマができてる

「珍しいですね、本でも読んでたんですか？」

出来上がった朝食を運びながら小夜が尋ねる

一純はフルフルと首を横に振る

「……………金縛りにあった」

一純は真顔でそう言った

「か、金縛りですって!？」

一純の言葉に小夜は驚く

TVなどではよく見る現象だが、実際に近くでそんなことがあると案外驚くものだ

そして小夜の場合、それが愛しの兄なのだから驚くだけでは終わらない

「す、すぐに御被いしてもらわなくちゃ!!!」

小夜は慌てて霊媒師を呼ぼうと、電話帳を開き受話器を手にする

「れ、霊媒師って誰がいるかしら?.....あ!!!細木 子!?.
.....じゃあ連絡先はTV局!？」

小夜はかなり慌ててるらしい、細 先生は霊と戦ったりはしないだろう(多分)

「.....慌てるな小夜、あの人は惜しいが違う。それに金縛りも最近科学的に検証されて、霊現象ではないとわかってるらしい。多分、最近色々あったからちよつと疲れてるだけだろ」

確かに最近はずいぶん忙しかった

小夜が帰ってきたり、麻紀音と出会ったり

.....まあ、本当は他にももう一件あるのだが、一純自身は

知る由もない

一純は少しため息を吐きながら、コップに牛乳を注ぐ

「……………兄さん、今日は大事をとって休んだらどう？」

小夜が心配そうに尋ねる

「そんなに心配するな、熱があるわけじゃ無いんだから平気だ……
……………それより、早く食わないと遅れるぞ？」

そう言うで一純は「いただきます」と言い朝食を口に運ぶ

小夜の方は兄の体を考えると休ませたかったのだが、それ以上は何も言わず、自分も朝食を口に運び始めたのだった

*

8時10分

一純と小夜は家を出て、学校へ向かっていた

そして途中で凜と合流して、一緒に登校する

最初の頃は小夜がイヤな顔をしていたが、最近ではスッキリ慣れたらしく普通に登校している

「……………というか、もともと一純と凜と一緒に登校してる中に小夜が入ってきた事になるのだが……………」

「……………というワケで、兄さんが原因不明の金縛りにあって寝不足らしいのよ」

小夜が凜に今朝の事を話す

「ふむ、それは心配だな……………では至急、腕の立つ霊媒師を……………」

「……………いや、いらんから」

一純はデジャブを感じながら断る

「用心に越した事は無いと思うが……………」

凜は心配そうに一純を見つめる

「心配しなくても、明日には元気になるから」

強がってはいるが、実を言うと睡眠不足のせいで一純の意識は既

に朦朧としている状態だった

おそらく30秒も目を瞑ったら、すぐに寝てしまったら
すると突然

ブチンッ!!

何の前触れも無く、一純の右靴の紐が千切れる

「おっとと……」

バランスを崩し、左足を前に踏み出す

ブチンッ!!

途端、左靴の紐も弾け飛ぶように切れ、そのまま転倒する

転んだ拍子に、靴が足からすっぽ抜け宙に舞う

一純は顔面からコンクリートに熱烈なベレーゼをかましていた

「だ、大丈夫!? 兄さん?」

小夜が手を差し出そうとした瞬間

「な〜」

ドサッ!

空から黒猫が一純の頭目掛けて落ちてきた

それに続いて、一純の靴も落下してくる

どうやらすっぽ抜けた靴が当たって、どこからか落ちてきたらしい

黒猫は一純から降りると「なぐ」と一声鳴き、スタスタとどこかへ去っていった

すると今度は凧が口を開く

「……………おい、2人とも空を見ている」

そう言いながら、凧が空を指差す

一純は、強打した顔面をさすりながら空を見上げる

「……………何だありや」

空の一部が黒かった

しかも何か移動してる気がする

ついでに大音量でカーカー言ってる気もする

「カラスの群れだな、しかも異常に多い」

凧は冷静に答える

「……………ヒッチコックみたいね」

小夜も冷静に感想を述べる

そんな2人に比べ、一純の心中は穏やかではない

(・・・靴紐、黒猫、カラス・・・典型的な不幸の前触れじゃないか)

そんなベタなと思ってしまふ事が実際に起きてしまつと、逆に真実味が出てしまふ

・・・ていうか怖い

「・・・まさか死亡フラグが立ってるのか無いよな？」

一純はポツリと呟いた

「・・・？何か言つたか一純」

凜が聞き返す

「・・・急がないと遅刻すると言つたんだ」

一純はそう凜に返すと、紐の切れた靴を履き直して歩き出す

小夜と凜の2人は、頭に？マークを浮かべながら一純の後を追つたのだ

*

8時30分

3人は、学校の玄関に到着する

何とかギリギリの時間だ

しかも一純は紐が切れて、殆ど引きずってる状態の靴だ

仕方なく途中から小夜と凜に、肩を貸して貰った

何だか回りからの視線が恥ずかしかった

「全く、災難だったな一純」

凜は口ではそう言っているが、心の中では

(朝からこんなに一純と密着できるとは……今日は良い日になりそうだ)

かなり浮かれモードだ

勿論、反対側の妹さんも同じ状態なワケで

「本当ね」

満面の笑顔で、これでもかというくらいに密着して

しかも玄関の前に到着しても離れる気配は無い

1年と2年の靴箱は結構離れているので、流石にここで分かれなければならぬ

「……………小夜は1年の靴箱の方に行きなさい」

このまま放っておけば、教室まで付いてくるかもしれない

「え〜」

小夜は口を尖がらせる

「え〜、じゃないだろう？ここまでくれば大丈夫だ……………凜もありがとうな、もう大丈夫だから」

「むう……………仕方ないな」

一純に言われ離れる2人

「……………名残惜しいけど、仕方ないから自分の教室に行きます」

そう言いながら、小夜は自分の靴箱に向かって行った

……………どうやら一純が言わなければ、本当に教室までくっついて来るつもりだったらしい

「俺達もとつとと行くか」

「そうだな」

一純と凜は2年の靴箱に向かって歩き始める

そして靴箱の近くまで来た時だった

「ん？」

一純がふと立ち止まる

「どうした一純？」

凜が尋ねる

「いや……あれ……」

一純は自分の靴箱の方を指差す

靴箱の前に1人の女生徒が立っていた

小柄で、長いツインテールが特徴的だ

「2年にあんな女子いたか？」

名前は知らなくても、同じ学年の生徒だったら見覚え位はあるはずだが、一純にはサッパリ覚えが無かった

一純に言われ、凜も女生徒をジッと見る

「……………2年どころか、1年にも3年にも覚えが無い」

凜は生徒会長として、一応この学校に在籍する全ての人間の顔を記憶している

その凜ですら覚えの無い人間だった……………

すると、その女生徒も2人に気づいたらしく、後ろを向きスツと去っていった

一瞬だけ顔が見えたが、小さい体格に似合わず目つきの鋭い印象があった

「……………あの生徒は後で調べる必要があるな」

凜の方も、負けずに鋭い目つきで呟く

「……………まあ、それはともかく早く靴を履き替よつか」

そう言いながら自分の靴箱に近づくと一純

そして自分の靴箱を見た瞬間、思考が停止する

「……………何だこりゃ」

「どっした？」

凜が後ろからヒョイと覗き込む

「・・・・・・・・・・・・・・・・何だこれは」

凜も思わず呟く

原因は勿論、一純の靴箱

何をどうやればこうなるのか、見事に溶接されて開かなくなった靴箱がそこにはあった

元々開くところなんて無かったと思う位キレイサツパリくっついていた

「・・・・・・・・・・新手的イジメ？」

「・・・・・・・・イジメでこんな事するアホもいまい、とりあえず壊して開けるぞ」

そういうと、凜は何処からか刀を引っ張り出すと、石川 右衛門のように見えない速度で刀を振るった

勿論斬った後にはこの台詞

「・・・・・・・・・・また詰まらぬ物を斬ってしまった」

お約束だ

凜が刀を鞘に納めると、鉄製の靴箱の蓋が綺麗に四角に切り取られ、カランと床に落ちる

「悪いな凜」

一純は礼を言うと、靴箱から内履きを取り出す

「気にするな……それよりもこんな事をした奴を即刻見つけ出さねば」

凜の目に制裁の炎が灯る

生徒会長としてもこのような事は見過ごせない、それに一純が被害者となればなおさらだ

犯人が見つかったら、徹底的に修正してやる……………

「とりあえず、さっきここに居たツインテールの女が怪しい……………」

凜の目がギラリと光る

「……………まあ落ち着け凜、さっきの人もこの靴箱を見て驚いていただけかもしれないだろう?」

一純が凜をなだめる

だが今回は凜も引かない

「……………そうだったとしても、私の知らない生徒がいると言う事は腑に落ちんだ……犯人云々の前に、あの女の事は詳しく調べ必要がある」

そこまで言われたら、一純も止めるワケにはいかない

「まあ、そこまで言うなら止めないが……くれぐれも穏便にな？」

「……善処する」

そう言うと2人は、2階にある教室に向かい歩き始めた

そして2人が去った後

靴箱の前に人影が現れた

それは文字通り影であり、顔は分からない

不意に影から声が聞こえる

「……あの女……依頼主の一人なのじゃが……放つておけば、後々邪魔になって来るかもしれんのか……」

そういうと影はユラリと揺れる

「……少し大人しくなって貰おうかのう」

影はそう言うと、静かに笑いながら、溶けるように校舎へと消えていったのだった……

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.

第16話・女色々長恨歌 3番(前書き)

……この長恨歌編は難産です

第16話：女色々長恨歌 3番

「うりゃ」

2・Cの担任、瀬尾の手からチョークが放物線を描きながら飛ぶ
ガスッ

「あう!？」

しかしそのチョークは真っ直ぐに飛ばず、最前列右端の女子の額に直撃する

「あらら、また外れたわね？」

瀬尾は不思議そうに首を傾げる

「先生、コントロールが悪いのにチョークなんか投げないで下さい」

「そうです！まともに命中した試しなんてないんですから！」

生徒達から苦情の声が湧く

「いいじゃない、教師の特権よ？」

瀬尾はサラリと、生徒達の苦情を右から左へ受け流す

「そんな事より、一純君は何で朝っぱらから眠りこけてるの？」

そう言いながら、瀬尾は一純目掛けてチヨークを投げ続ける

「痛っ！」

「あだっ！」

「うばらっ!?!」

「あうっ！」

「ぎゃああああ!?!目が!?!目がああああああ」

しかしその被害は、常に周囲に撒き散らされる

ちなみに最後の絶叫は佐倉の声だ

コントロールは皆無だが、スピードはあるので、その破壊力は計り知れない

狙われた本人以外の被害は甚大だ

「それはですね」

目にチヨークが突き刺さった状態で、佐倉が答える
軽くホラーな光景だ

「彼が眠いからですよ」

「.....」

瀬尾は佐倉の後ろの生徒に目配せする

生徒の方もコクリと頷く

そして何処から取り出した広辞苑で、佐倉の後頭部に一撃加える

「のぐふあっ!?!」

その衝撃で目に刺さったチョークがポロリと落ちる

そして佐倉の意識もブラックアウトする

気絶した佐倉の変わりに別の生徒が答える

「一純君教室に入った時から、目の下にパンダみたいなクマ作って、椅子に座った瞬間崩れるように寝ちゃいました」

当の一純も電池の切れた玩具のように、ピクリとも動く気配は無い

「……一純君も色々大変そうだしねえ」

担任として一純の身辺事情について知っている瀬尾は、眠りかけてる一純に同情の念を覚える

そして教卓の中からペンと紙を取り出し何か書き始める

「仕方ないわね…….」

そして懐から判子を取り出すと、ハアハアと息をかけてから、ポ

んと紙に押す

「これ一純君に貼り付けておいて〜」

その紙を前の席の生徒に渡し、リレー方式に一純の席に渡していく

そしてその紙は、ペタリと一純の後頭部に貼り付けられる

『安らかにしておいて by 瀬尾』

担任のお墨付きの居眠りだ

傍から見たらパツと見いじめに見えないことも無い

しかし本人はいたって真面目に、一純を気遣っての行動である

「それじゃあ、HRはここまです。後はよろしくね？」

そう言いながら、教室を出て行く瀬尾女史

そうして一純が眠ったまま授業が始まっていった……

・ ・ ・ ・ ・

「……ということがあったんだ」

「……長い回想をありがとう佐倉」

机に突っ伏したまま一純は返事する

現在1時間目の休み時間

一純は結局1時間目に来た教師によって、普通に起こされてしまったのだ

瀬尾先生の免罪符はこれっぽっちも効力を発揮しなかったらしい

「それにしても、いずみんがこんなに眠そうなのも初めてかもなあ」

そりゃこっちも、金縛りにあうまでは規則正しい生活をしていたわけで、自発的に睡眠時間を削るなんて愚かしい事は一切なかったからな

だがここで金縛りにあってるなんて言うのと、まためんどくさい事になりそうだから言わずにおこう

それよりも知りたい事もあるしな

「……まあな、ちょっと寝不足でな………それより教えて欲しい事があるんだが」

そう言って一純は顔を上げる

すると、なぜか佐倉が涙にむせび泣いていた

正直かなり不気味だ

「うう……は、初めて一純に頼りにされた……一純が俺を必要としてくれるなんて、こんなに嬉しい事はない」

なんか某ニュータイプみたいな事を言ってる

「そんな大袈裟な……」

一純は佐倉の感激ぶりに少々怯む

「……それで、聞きたい事ってなんだ？じゃんじゃん答えるぞ！」

佐倉が涙を拭いながらサムズアップする

……やっぱり御崎あたりに相談すればよかったかも

「ああ……この学校にな？小さくて釣り目のツインテールの女子っていたか？」

一純は特徴だけ簡潔に述べる

ぶっちゃけこれだけで分かると思えないが……

「ああ、いるぞ」

即答した

佐倉は意外そうな顔で答える

「いずみんなが言ってるのは多分、3年の西明寺先輩さいみょうじの事だろ、結構有名な人だぞ？」

そういわれても、調理部以外では1、3年との付き合いがない一純にとってはピンとこない

「……知らないな……そんなに有名なのか？」

「そんなに有名なんだよ、これを機会に覚えておいて損は無いぞ、よく聞いとけ？本名は西明寺さいみょうじ 九十九つくも、クラスは3-A、部活は無し、学校の裏にある神社の1人娘、そしてなにより、小さな体格に似合わぬ強気で物怖じしない性格がその知名度に大きく貢献してるな」

どうやら本当にそこそこ有名な人らしい

「それで西明寺先輩がどうかしたのか？惚れたか？」

このトンチンカンはどこを曲解してそういう結論に至ったんだろう

「アホ」

そついうと一純は再び机に突っ伏す

だが流石に、教えてもらってこの態度は、こっちとしても良い気分ではない

「……………すまん、勉強になった」

一純は、一応ポツリと佐倉に礼を言った

「……………か、か、感激じゃあああああ!!!!」

そう絶叫しながら佐倉は教室から飛び出していった

よほど一純に蔑ろないがしにされていたのだろう

(……………俺そんなに酷い扱いしてたのか?)

……………まあ、それはともかく、これで一応あの人の事が分かった

(やっぱり今朝の事は凜の気の性だな……………知らない先輩に恨みを買うような事をした覚えも無いし、凜が覚えて無いのもたまたまだろう)

総じて言えば「今朝の事は別にどうでもいっか」というところだ

(凜にも後でそう言っておこう……………)

そうして一純は再び眠りの世界に旅立っていった

*

「・・・・・・・・・・おかしい」

昼休み

凜は生徒会室でパソコンとにらめっこしていた

その顔には困惑の色が浮かんでいる

（あの女・・・・・・・・他の生徒にはかなり有名な生徒ようだが・・・・・・・・
それだけ有名なら私が知らない訳が無い・・・・・・・・それに学
校裏の神社に娘がいるなど初耳だぞ！？）

学校裏の神社といえば、先日の丑の刻参りが思い出されるが関係
はあるまい

その指がすばやくキーボードを叩く

そして画面に映し出されたのは、学校のデータベース

全生徒と職員のデータが入力されている

プライバシーが何たら言ってるよその学校とは違うのだよ

「3 - Aの・・・西明寺・・・・・・・・むう、確かにあるな・・・」

そこには顔写真付きで西明寺九十九のパーソナルデータが載っていた

凜は後ろの本棚に視線を移す

そしてその中から、前年の修学旅行のアルバムを取る

「・・・・・・・・集合写真にもちゃんと写ってるな」

そこには2 - Aの集合写真にちゃんと写る西明寺の姿があった

やはり自分の思い違いだったのだろうか・・・

(回りの人間に聞いても、一純とは欠片も接点が見つからないしな・・・・・・・・やはり今朝の事は一純の言ったとおり、たまたまあの場所に居合わせただけなのかもな・・・・・・・・)

「しかしそうになると、家にある『個人用全生徒名簿』からも情報が抜ける可能性があるな・・・」

また犯罪チックなものを所持してるお方だ

「パソコンから印刷して持って帰るとしよう」

そういうと凜は印刷の表示をクリックする

すると瞬く間に、生徒会室備え付けのプリンターから印刷された資料が出てくる

だが、操作を誤ったらしく3 - A全員の分まで印刷されてしまった

「………むう、資源を無駄に使ってしまった………仕方ない、一緒に持って帰るか」

そして凜はパソコンの電源を落とし、1クラス40人分の資料を持って生徒会室を後にした

*

その頃一純は………

「さあ、兄さん大人しく保健室に行きましょう!!」

小夜にズルズルと引きずられ、保健室へと向かっていた

昼食に誘いに来た小夜が、机に突っ伏してグッタリしてる(とい

うか寝てる）一純を文字通り引きずって来たのだ

「……………さ、小夜さん？さっきから言ってるように、ただ眠いわけであって、別に具合が悪いわけじゃ……………」

引きずられながら何とか説明する一純

「甘いです！！そんなに眠いという事からして、兄さんにとってはおかしな事！！金縛りにあう位疲労が蓄積されているのなら体に異常が起きていても不思議ではありません！！とにかく、午後の授業は大人しく保健室で休んで下さい！！」

そこまで言われたら大人しくしてるしかない

小夜も自分の体を心配して言ってくれてるんだ

「……………わかったからとりあえず普通に歩かせてくれ。引きずられるというのは肉体的にも精神的にもキツイ」

しかも、もう少しで階段に差し掛かる

あんな所を引きずられたら堪ったものではない

全身削れてしまう

「わかりました、では大人しく保健室で休んでくださいね？」

そういつと小夜は、階段に差し掛かるギリギリ手前で一純を立ち上げさせる

当然頭突きをしてきた人もそのまま落下する

全てがスローモーションに感じる

(.....こ、これはヤバイ！)

一純は頭突きの直撃で遠のく意識の中、本能的に頭突きをしてきた誰かを庇うように自分の方へ引き寄せ

そして、その人を抱きしめた状態のまま、背中から地面に叩きつけられる

肺から空気が全て吐き出される

そしてそのまま、背中に受けた激痛を感じる間も無く意識が遠くになっていく

意識が無くなる直前、小夜の叫び声が聞こえた気もしたが、薄れる意識の中ではそれも定かではなかった

t o b e c o n t i n u e d

第17夜：女色々長恨歌 4番

真つ黒い意識の海の中で一純はまどろんでいた

何故こんなところに居るのか、いつから居るのか

はつきりしない意識の中でぼんやりと考えるも、この真つ黒い海の中で思考するという行為自体全く無駄な事なようで、思考しようとしても意識はスグに真つ黒い海へと霧散してしまう

そして考えるという行為が無意味だという事を悟った一純は、静かに目を閉じ、波打つ黒い波に身を任せそのまま眠りに……

(……つて、ちょっと待て)

意識が途切れる直前、一純はハツと気づき、手放しそうになっていた意識の紐の端っこをガシツと掴む

すると、さつきまでボンヤリとしていた頭がスウッと晴れ、先程自分に降りかかった事が明瞭にコマ送りでリプレイされる

階段を下りる自分

後ろからの声に振り向く自分

階段の上から落下してきた人に頭突きを喰らい落下する自分

そして地面に叩きつけられる自分が浮かんだ所で砂嵐

・・・・・・・・・・どうやら自分はそのまま気絶したらしい

）というか、気絶した状態でさらに眠るっていうことは・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・死ぬ？

「・・・・・・・・・・やっぱり今日の一連の出来事は死亡フラグだったか」

そう言つと一純は静かに目を閉じる

（これも天命というのなら静かに受け入れるのも一考・・・・・・・・・・か）

この主人公は、年の割りに気持ちの悪いくらい老成した考えを持つてるらしい

だがそうは問屋が降ろさないのが世の常だ

こんなに早くくたばって貰っては、こちらとしても彼女達にしても都合が悪いわけです・・・・・・・・・・

（・・・・・・・・・・!?!?）

静かに死を受け入れようと目を閉じていた一純の体に激痛が走る

意識の中の自分が痛みを感じるといふ事は、現実の自分の体に異変が起きているという事だろう

そしてその事態に対処する為に、生理的な作用として意識が現へ

と引き戻される

(・・・まあこれも天命か)

まだまだゆっくりとは出来ないなと思いつつも、一純は黒い海に溶けるように意識の世界から消えうせ、現実の世界に引き戻されていくのだった

謎の激痛で一純は目を覚ます

うすく目を開けると、多少見慣れた景色と共に消毒液のツンとした香りが鼻を刺激する

どうやら学校の保健室のようだ

(そういえばさっき階段から落ちたんだっけ・・・)

いまいちハッキリとしない頭で思い出す

そして背中と頭に鈍い痛みが走る

どうやら落ちた際にしたたかに打ち付けたせいらしい

しかし、どうも目を覚ました時の痛みとは別の痛みの気がする

まあ、イマイチ体の感覚が戻らない一純に、今の自分の状態が分からないのも無理は無い

ていうか気絶したままの方が幸せだったかもしれない

そして再び体に襲い掛かる謎の激痛と、周囲の大声によって一純の意識ははつきりと覚醒する

「いい加減に兄さんから離れなさいよ！！この似非ロリ娘！！！」

相変わらずの罵声を吐きながら、小夜が一純の腕を掴み後ろに引っ張っている

「いくら先輩といえど、寝たふりをしながら何時までも男子生徒に引っ付いているというのは感心できる事ではありませんね」

凜も目上の相手に話しているらしく言葉遣いは丁寧なのだが、にじみ出る殺気は隠していない、むしろフルオープンだ

しかも、こちらは足の方を掴み後方へ引っ張っている

だが2人がかりで引っ張られても一純はビクともしない

その原因はどうやら腰付近にあるらしい

一純がチラリと視線をずらすと思わずギョツとした

「……………この女の上腕部をレーザーメスにより焼き切る事を提案」

真顔で恐ろしいことを麻紀音が言い放つ

……ていうか何故ここに？

そう言いながら麻紀音は一純の腰の辺りを引っ張っている

そのせいで三人の力が拮抗して、一純の体は逆くの字の形に引き絞られていた

激痛の理由はこれらしい

しかし3人の話してる事がイマイチ分からない

話の流れからするともう一人、しかも上級生がいるらしいが……

(……ん？そういえばさつき凜の奴が『いつまでも男子生徒に引っ付いているのは感心できない』とか何とか……)

そして微妙な違和感

麻紀音が掴んでいる辺りに妙な重量感を感じるのだ

この感触からするとどうやら腰に何かかへばりついており、麻紀音はそれを引っ張っているらしい

……何となくだが状況が読めてきた

だが状況が分かったところで小夜、凜、麻紀音によるスリープラ

トンは止まらないわけでして……

「離れなさいっ！……！」

「離れてください」

「……離れて」

御三方はより一層力を込められて一純の体を引っ張りになられた

御三方の頭には、一純の腰に張り付いてる物を引き剥がす事ではないになっており、一純の体が引き絞られた弓のように大きく撓っている事に気づいていない

こんな状態で一純がしなければならぬ事は只一つにして、とても簡単な事だ

それは……

「お、折れるから……」

と静かに、そしてハッキリと口にする事だけであった

その声に反応して三人の力が少し緩められる

しかし、掴んだ手は決して離そうとしない

「……何で俺は三人からこんな仕打ちを受けているんだ？」

何となく予想は付いているが一応問いかけてみる

「……………安心して、スグに終わらせるから」

麻紀音が答えになっっていない回答を返す

「いや、そうじゃなくて……………というか何で麻紀音がここに居るんだ？」

一純が至極当然の疑問を麻紀音にぶつける

「……………マスターの状態は常にモニターしてる……………そして先程マスターの意識レベルの低下が確認された……………だから飛んできた」

麻紀音は淡々とそう答える

……………麻紀音の事だから文字通り飛んで来たんだろうな

「……………状況は大体分かったから取り合えずみんな手を離してくれないか？このままじゃ俺の背骨が取り返しの付かない事になってしまう」

一純がそう言つと、三人は渋々掴んでる手を離した

……………さて問題はこれからだ

今まであえて極力見ないように触れないようにしてきたが、このままでは事態が収束しないので逃避はやめて現実に目を向けることにしよう

一純はハアと一つ溜息を吐くと、己の腰に視線を落とす

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・スウ」

そこには今の状況の元凶が張り付きながら可愛らしい寝息を立てている

高校生とは思えない位ちっこい体にツインテール

今朝学校の玄関見かけた生徒

佐倉情報が確かなら三年生の西明寺先輩という人らしい

状況からするとこの人が階段からフライングヘッドバットをお見舞いしてくれた張本人みたいだ

「・・・・・・・・なあ小夜、何でこの先輩は俺にひつついているんだ？」

一純は当事者である妹に事の事情を聞いた

「気絶した兄さんとその女をここに運んだ後、保険医を呼びに行つて戻ってきたら既にこの状態でした！！全く、こんな事なら仏心を出さずにあの場に捨てておけばよかつたわ！！」

質問に答えてる間も小夜は、殺意だけで人が殺せるなら東京ドームいっぱいの人間が殺せる程の殺意を一純の腰に向けてる

このエネルギーを発電等に利用できたらきつと世界は平和になるのに・・・

「過ぎた事を嘆いても仕方ない、今は早急にこの異物を一純から剥がすのが先決だ」

落ち着いた口調で凜が小夜をたしなめる

「というか凜、先輩を異物扱いするのもどうかと思うんだが・・・

「まあ、確かに何時までもこのままっていう訳にもいかないしな」

とりあえず無難に起こしてみる事にしよう

一純はユサユサと先輩の肩を揺すってみる

「・・・・・・・・・・・・・・・・スウ」

・・・・・・・・全く反応無しだ

「甘いぞ一純、先程三人がかりで徹底的に剥がしに掛かったのにピクリともしなかったのだ。そんな事では目を覚まさないだろう」

確かに凜の言う通りだな・・・

だからと言って女の子を手荒に起こすのも気が引けるぞ

「ならやっぱり私達が何とかしよう。何、手段さえ選ばなければスグに終わる」

凜がサラリと恐ろしい事を言う

「ならこんなのはどうかしら。この娘のツインテールを左右から引

っ張って真つ二つに・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・じゃあ私は万が一に備えてレーザーメスの準備を」

「・・・・・・・・その二人は少し静かにしてようか」

この三人に任せたんじゃ明日の朝刊の見出しに掲載されてしまう

やっぱり俺が何とかしなければならぬようだ

しかし方法がなあ・・・

とその時

「話は全部聞かせてもらったぜ!!」

唐突にそんな声が聞こえたかと思ったら、勢い良く保健室の扉がガラガラッ!と開く

全員が何事かと扉に視線を移す

「前から言ってみたかったんだよなあ、」話は全部きかせてもらったぜ!!」って」

こんなアホな事をほざく知り合いは一人しか居ない

「・・・・・・・・やっぱりここは粘り強いこつ」

「だからそれでは何時までたっても進展はないと言ってるだろつ」

「裂きましよう兄さん」

「……………裂きましよう」

言葉を交わさなくても通じ合ったようだ

四人は『アホはスルーしよう』という結果にコンマ数秒で確定した

「ひどいっ！！せっかく階段から落ちたっつて言うから心配して駆けつけたのに！！」

佐倉がその場に崩れ落ちた

その気遣いは大変にありがたい

いけないところがあるとすればそのアホさ加減だ

是非とも来世に期待したい

「……………マスター、あの頭に蛆が湧いてそうなのは何ですか？」

麻紀音が佐倉を指差しながら聞いてくる

「ああ、あれはね可哀想な人っていうんだよ。ああなったら人としてどこか終わってるから気をつけなきゃいけないぞ」

一純は哀れむような目線を佐倉に向けながら麻紀音に優しくそう教えた

「見ず知らずの人にまで散々な言われようだよ！？っていつかどちら様！？」

流石に部外者っていう事は分かるか

「麻紀音、一応自己紹介しておきなさい、袖触れ合うも多少の縁って言うしな」

一純が麻紀音にそう促す

「………麻紀音です、ロボットです」

早っ！！しかも適当だよ！！っていうかアンドロイドっていうのはそんな簡単に言ってもいいの！？

「あ、どうも佐倉です。それよりだな一純」

何故ここをアツサリと流すんだろう、普通一番驚いたりする場面じゃないのか？

「さつきも言ったが話は全部聞かせてもらったぜ、どうやらその腰にくつついている奴……ってこの人西明寺先輩じゃん！？……まあそれは良いとして、ともかく西明寺先輩に起きてもらって離れて欲しいワケだな？しかも平和的に！」

佐倉にしては珍しく話を的確に理解してるじゃないか

「だったら俺に良い考えがあるぞ！！古今東西眠った女性を起こすにはあれが一番だろう！！展開的にも！！」

なんとなく・・・いや、かなり嫌な予感がする

「大体予想は付いているが念のために聞いておこう・・・どんな方法だ？」

—純は頭痛を感じながら佐倉に尋ねる

「決まってるだろ！！眠り姫を起こすには王子様の熱いベーズしかあるまい！！」

なんか妙にヒートアップした佐倉が高らかにそう叫びやがった

「却下」

「いいわけないでしょ！！！！」

「常識的に考えて、実際そんなことをすれば警察沙汰だ」

「・・・・・・・・・・屑め」

四者四様に非難の声が佐倉に浴びせられる

流石にそんなことは倫理的にNG・・・っていうか凜の言ったとおり常識的に考えて駄目だろう

「・・・・・・・・なんか今回俺の扱いが妙に酷くない？」

自業自得だろう

「……やっぱり裂くしかないわね」

「まあ、仕方ないな」

「……それが得策」

(ヤバイ……こっちはこっちで猟奇的な作戦が執行されそうにな
ってる)

放っておくと明日の見出しに『女子高生裂かれる』なんて恐ろし
い事が書かれてしまう

「おいおい三人とも少し落ち着けよ」

一純は三人の凶行を止めようと声をかける

……が

「何を言ってるの兄さん、私達は十分に冷静よ」

「そうだぞ一純、私達は十分に冷静だ」

「……冷静」

……冷静にヤバイ状態になってるよ

目が座ってるもの

あまりの怒りにトランス状態になってるようだ

「裂きましよう、真っ二つに」

「裂きイカのように」

「……………裂けるチーズのように」

「…怖い……………」

目の座った三人がゾンビのようにユラユラと迫ってくる

そしてその手が西明寺先輩のツインテールに伸ばされたその時

「流石にこれ以上は無理かのう」

今まで眠ってたと思われた先輩から声がする

一純が目線を下げると、今まで閉じられていたはずの西明寺の目と視線がぶつかる

「やっぱり狸寝入りだったんですね西明寺先輩」

凜が西明寺先輩に言う

「半分はな。途中から五月蠅くて目が覚めてしまったわ」

「だったらさっさと起きて兄さんから離れなさいよ!」

間髪居れずに小夜が叫ぶ

しかし先輩はチラリと小夜を一瞥すると、小夜の言葉は意に介せ

ずに再び一純の方に視線を戻す

「一純と言ったか？先程はよくわしの体を身を挺して守ったな、礼を言っぞ」

西明寺は身を起こすと一純にそう礼を言った

随分と年寄りくさい話し方をする人だ

「まあ、成り行き上そうなっただけですから、別に礼を言われるよ
うな事じゃ……」

現にそっちから突っ込んできたんだし

それを聞いた西明寺は釣り目がちの目を細めて微笑んだ

「その謙虚な心構え、益々気に入ったぞ」

そついつと西明寺の口元がニヤリと歪む

目も先程の優しげな感じは消え、挑戦的な釣り目（どうやらこっ
ちが素の目らしい）になっている

……イヤゝな予感がビシビシするぞ

すると西明寺はいきなりベッドの上に立ち上がった

そして不敵な笑みを浮かべながら、ビシッ！っつと一純を指差
し高らかに大きな声でこう言い放った

「たった今から貴様はわしのモノじゃ！…反論は許さぬ！…！」

………マズい？

t o b e c o n t i n u e d

第18夜：女色々長恨歌 5番

よう！！みんな元気か！！

前回の話で露骨に扱いが酷かった上に、すっかり空気みたいになつちやつた佐倉正臣だ！！

今回は出番の確保と存在のアピールと待遇の改善のために、俺が前回のあらすじなんか説明しちゃうぞ！！

ちなみに場所は保険室前の廊下だ！！中には怖くて居れないぜ！！

はい！じゃあカメラさん！！VTRキューツ！！

「……全く、これだけの為に呼ばないでよね」

まあまあ、そう言うな御崎。お前の出番のUPも兼ねてるんだから細かい事にすんなって

「僕は別に気にしてないんだけどな」

少しは気にしろ！！そんなんじゃ、そのうちサブキャラからモブキャラに降格されちまうぞ！！

「はいはい」

(………実は僕メインのお話のプロットが既に完成して
るっていう事実は、そっと心の中に仕舞っておこう)

よっしゃ！！長引かせる訳にも行かないから、ここらでいい加減にあらすじにキューだ！！

～前回のあらすじ～

突如現れた謎の女將軍団によって草津温泉に誘拐されてしまった一純

彼女達の目的は、一純の皮膚に含まれる特殊成分「ガストロ酸メルチコルダナトリウム」を温泉の源泉に溶け込ませることにより完成する「超 草津温泉の素」を東京湾に投下する事で海水を草津の湯にしてしまう「地球温泉化計画」であった！！

このままでは地球全体が硫黄臭くなってしまう！！

しかも温泉の源泉に人間を投げ込んだらリアルに焼け死んでしまう！！

一純と地球を救うため、小夜達は一路、草津へと向かうのであった！！

バキヤッ！！

あぐふおっ！！

「いけしゃあしゃあと訳の分からない作り話を勝手にあらすじにしない!!!」

ぐふっ……ちよつとしたオチャツピーだったのに……

「真面目にやないと次回あたりで『俺、戦いが終わったら大学に行くよ』みたいな、お約束の死亡フラグを立てるように上に直訴しちゃおうよ?」

ひいひい!!それだけのご勘弁!!すみません真面目にやりますから!!!

と、というワケで前回のあらすじキュー!!!

「……キューは絶対言うんだね」

↳前回のあらすじ

一純は幼女に「たった今から貴様はわしのモノじゃ!!!反論は許さぬ!!!」とか突然言われた

少年は……刻の涙を見る……

「合ってるけどある意味余計わからん!!!」

グシャッ！！

ぎゃぼーっ！！

ア、アイシャルリターン……………

「ふう、全くこの人は……………やっぱり脳の中に蛆か何か湧いてるんじゃないかな？」

御崎は辞書で佐倉を叩き潰すと、やれやれといった風に溜息を吐く

ちなみに、どこから辞書を出したんだよ！とかいったツッコミは一切通用しません

そついう仕様なんです

「それはそつと、せつかくだし一純君の様子でも見て行こうかな」

アホの為だけに此処に来たというのも勿体無い

「お見舞いお見舞い」

御崎は鼻歌混じりに保健室の扉を開く

「一純君、大丈夫……………」

にこやかに扉を開けた御崎の動きが固まる

保健室の中は、部外者が見たら何かの儀式をしているように見え

たかもしれない

中には5人

1人はツインテールの幼女

確か3年生の西明寺先輩だ

その先輩が何故か、天井からロープで縛られ吊るされている

2人は見知った顔の女子

一純君の妹の小夜ちゃんと、同じクラスの類家さんだ

その2人は吊るされてる西明寺先輩に向かい、まさに機関銃の如く何か叫んでる

ちなみに先輩の方も負けない勢いで言い返している

あの間に入ったら、空気の振動だけで原子分解されそうだ

そして知らない女の人が無言で先輩を棒でベシベシと叩いている

一体誰なんだろう？少なくとも学校の生徒ではないと思う

そして最後の1人は勿論一純君

……はベッドの上で何か諦めたような顔で座っている

御崎は一瞬で悟った

関っちゃいけないと

御崎は心の中で、一純にエールを送りつつ静かに扉を閉めたのだ
った……

一純は憔悴していた

もはや自分が、先程階段から落下したばかりだという事はすっかり忘れ去っていた

当然だ

たった今言葉を交わした相手からいきなり「お前は自分のもの」
宣言されてしまったのだから

いや、それ自体は別に問題ではない

そういった発言をサラリと受け流す事には定評がある

ただし今回はTPOが少々……いやかなり悪かった

ていうか時と場所はこの際関係なく、小夜・凜・麻紀音がこの場

に居るといふ事がデンジャラスなのだ

そして思った通り事態は悪化した

.

「たつた今から貴様はわしのモノじゃ！！反論は許さぬ！！！」

目覚めるや否や、ちっちゃい先輩は一純を指差しそう言った

突然の爆弾……いや核兵器級発言に、西明寺以外の保健室内の時間が停止する

そしてその時間が動き出した時、氷河が雪解けを起こすが如く、3人の怒りが大洪水のように西明寺に向かって押し寄せる

それは正に電光石火、瞬く間に謎の技術で西明寺は簞巻きにされ天井にぶら下げられてしまった

逆さ吊りじゃないのが唯一の救いか

というか一体どこから出したロープなんだ？

そして、いきなりの吊るし上げという仕打ちに西明寺先輩が激高する

「なっ！？いきなり何をするかこの小娘共！！上級生をいきなり吊るし上げるとは、一体どういっ了見じゃ！！！」

まあ、いきなり吊るし上げられたら怒るのも当然だろう

西明寺先輩は足を盛大にバタつかせ反撃しようと思われている

・・・スカートを穿いてるのだから、もう少しジツとしてもらえ
るとありがたい

先輩が暴れるたびに目のやり場に非常に困る

しかしそんな事で怯む小夜ではなかった

「文字通り小さいあんた何かに小娘呼ばわりされたくないわ!!・・・
・そんな事よりも、兄さんに抱きついた拳句、モノ呼ばわりする
なんて一体どういう見なのよ!!」

小夜は、心臓をも射抜く死の眼光で先輩を睨み付けながら怒鳴る
が、先輩はいたって涼しい顔をしている

小夜の眼光に耐えられる人間が凜以外にも存在するなんて・・・

「ほう、モノでは気に入らんか?なら犬、下僕、奴隷というのもあるぞ?どの道わしのモノなのは変わらないがのう」

先輩は薄ら笑いを浮かべながらサラリと言い放つ

犬って・・・

初対面の人に犬呼ばわりって・・・

結構シヨックだな・・・

と一純がシヨックに打ちひしがれていると、不意に背筋に悪寒が走った

この感覚は何度か感じたときあるものだ

そう彼女達がキレた時にこんな感覚が・・・

一純は恐る恐る小夜達の顔を見る

麻紀音はいつも通りの無表情だが、小夜と凜はにこやかに微笑んでいる

だがその背景は殺気で黒く澱み、気のせいかな般若が浮かび上がっている気がする・・・

「ねえ凜？」

小夜が隣の凜に声を掛ける

「何だ小夜？」

凜が返事をする

二人とも異様ににこやかだ

「私こんなに頭に来たのって、幼稚園の時貴女と喧嘩したとき以来かもしれないわ」

そう言いながら小夜は拳銃を取り出す

「そうか？私はおそらくあの時よりも頭に来ているな」

凜もそう言いながら刀を取り出す

・・・つまり

今までの人生で一番怒ってるっていう事ですか？

一純は一途の望みを掛け麻紀音の方を見る

・・・例え結果が見えていても10000分の1の奇跡に賭けてみたいじゃないか

しかし麻紀音はフリーズしたかのように不動だった

目に光も無い

(まさか怒りのあまりCPUが焼けてしまったんじゃないか・・・)

一純の頭にそんな不安がよぎるが、どうやら取り越し苦労だったようだ

ヴン、という起動音と共に麻紀音の目に光が戻る

「・・・戦闘システム抑制プログラムの一時停止を確認・・・
・・・これが本当の殺意？」

怒りはプログラムをも超越するらしいです・・・

そんなのありか？

三人ともボルテージMAXだ

このままじゃ先輩が真つ二つ所の話じゃない

（麻紀音の時と違って、傍観してたんじゃ間違いなく事態は良くならない・・・ここは何とか俺が3人を止めるしかない・・・）

モノとか犬とか言われたのはショックだったが、流石に一般人を見捨てるわけにも行かない

・・・そんな一純の心を知ってか知らずか

「一純、こやつらの戯言は放っておいて早くわしを降ろせ。こやつらの相手も飽きたぞ」

西明寺先輩は、火に油どころかニトログリセリンを投下するのだ
った

・・・これも試練ですか神様

（仕方ない、使いたくは無いが奥の手を使うか・・・）

スウット一純が目を閉じると、只でさえ低かった温度が更に下降した

その気配をいち早く反応した小夜と凜がビクッと震える

麻紀音は目を丸くして一純に振り向く

「3人共、言いたい事は十二分にわかるが暴力はいただけないぞ。先輩からは後で言うとおくから今回は大目にみてくれないか？」

普段からは想像出来ないような殺気を放ちながら一純がそう告げる
なんか背景にゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……とか出ていそうだ

小夜は恐怖のため顔面蒼白になっている

「ご、ごめんなさいごめんなさい！もうしませんから！おこらないでおにいちゃん！さよ、もうけんかなんかしらないから！！！」

どうやら小夜のトラウマに触れたらしく、幼児退行を起こしている

そこまでになる位恐ろしい事があつたらしい

凜はすっかり萎縮して小さくなっている

こんな凜は滅多に見れないだろう

麻紀音も、いつもと違う周囲の状態に困惑している

(……ちょっとやりすぎたかもな)

あまりの流されっぷりにお忘れの方も多いと思われませんが、1話を見る限り一純の戦闘力も、およそ一般人とは違った領域なのですよ

すっかり小さくなってしまった3人を見て一純は少し罪悪感を覚える

「・・・悪い、少し言い過ぎたかもな。お詫びに帰りにどこかで甘いものでも奢ってやるから勘弁してくれないか？」

一純はそう言いながら小さくなって震えてる小夜の頭を撫でる

小夜は一瞬ビクンと震えるが、何時もの一純に戻ったのに気づくと、安心したように笑顔になる

凜と麻紀音もホツとしたように安心したような顔をする

「・・・・・・・・私の店に来る？」

一純の甘いものを奢るとい言葉に反応して麻紀音が言う

先日の経験から、それは是非とも遠慮したい提案だ

「・・・・・・・・昨日新しく仕込んだケーキが丁度沢山あるから・・・」

キンコーンカーンコーン！！

タイミングよく救いの予鈴が鳴る

「む、チャイムが鳴ったな・・・一純、授業には出られそうか？」

凜が一純に尋ねる

「ああ、少し痛むが大丈夫だろう」

と、一純が立ち上がるうとすると

ガシツと麻紀音に掴まれる

「……大事を取って私が教室まで運んでいく」

何ですと？

「……まあ、今回は仕方ないわね。変な事するんじゃないわよ？」

珍しく小夜が食って掛かってこない

「……わかった」

言つや否や麻紀音が一純を担ぎ上げる

「別に1人でも大丈夫なんだけど……」

そう言つと、ポンと肩を凧に叩かれる

「そう言わずに、人の好意はありがたく受けておけ」

いや、そうは言われても、担がれて教室に入るのは……それに麻紀音の説明もしなきゃいけないし……

「不用意に脅しを使った報いだな」

凧はそう言つとクスクスと笑みを浮かべる

「……脅しつて気づいてたか」

「まあな、だが久しぶりだったから思わず足が竦んでしまったぞ」

そんな事を言っていると、小夜が「早く行かないと遅れるわよ」と急かしてきた

「……それじゃあ出発」

一純が何か言う間も無く、麻紀音は保健室から飛び出す

その後を小夜と凜が追いかけるように保健室から出て行く

やがて本鈴がなり、保健室には吊り下げられたままの西明寺だけが残った

「ふむ、あの修羅場をしのぐとは、流石はわしの見込んだ男じゃのう。……まあ、わしを忘れていくのはいただけないがな」

い
どうやら性質の悪い事に、ああなる事を分かってやっていたらしい

すると、西明寺の体が一瞬黒い靄のようになったと思ったら、縛られていた縄から抜けてベットの上に座った状態になっていた

「目的を果たす為にはあの凜という奴が邪魔になりそうじゃが……」

西明寺はそう言いながらベットから降りると窓に向かって歩き出す

「個人的に残りの2人も邪魔じゃのう」

ニヤリと不適な笑みを浮かべて、西明寺は向かいに見える教室棟の一室を見る

そこには麻紀音に担がれながら、身振り手振りで何か言う一純が見える

「先程の殺気といい、益々わしだけのモノにすたくなつたぞ」

そう言うと西明寺は、クスクスと笑い声を残したまま黒い煙のように霧散して消えていった

向かいの教室棟で、麻紀音に担がれたまま他の生徒にもみくちやにされている一純には、そんな事を知る由も無いのだった……

t o b e c o n t i n u e d

第19夜：女色々長恨歌 6番

空は漆黒に染まり、見上げれば、黄金色に輝く満月が煌々と地上を照らす

その月明かりに照らされ、地に3つの影が浮かぶ

不思議な事に、その内の1人の足は地に着いておらず、数メートル宙に浮いている

「一純の妹に機械人形、あの小娘の有り様をもっても引かぬとは、勇猛なのか愚かなのか・・・」

浮いている影が呆れたように溜息を吐く

地に立つ2つの影の内の1人、小夜がキツとその影を睨み付ける

「敵討ちって言うのは柄じゃないんだけどね、凜にあんな風に言われちゃったら、こっちも黙ってる訳にはいかないじゃない」

小夜はそう言うつと懐から銃を取り出す

その銃は、いつも持っている通常の拳銃とは違い、闇のように黒く鈍重な外見の巨大な物だ

こんな大きな銃を撃つたら、小夜のような体軀では腕が外れてしまっただろう

「相手が人間じゃないんなら、こっちも徹底的にやらせてもらっわ」

小夜はそのまま、銃口を宙に浮かぶ影に向ける

「……………待て妹、……………対象の背後に別の熱源反応……………これは……………!!」

2人の内のもう片方、麻紀音が何時もの淡々とした言葉に驚愕の色を浮かべながら、小夜を静止させる

その様子を見た影がニヤリと笑みを浮かべる

「本当ならこの後、2人でゆっくり酒でも飲もうかと思うてたんじやが、先におぬし等を黙らせておくもの、また丁度良いものだ」

影はそう言うとパチンと指を鳴らす

そうすると背後の空間がユラリと揺らいだかと思ったら、別の影が現れる

「な……………!!!!」

その現れた影の正体を知った小夜は驚愕する

「兄さん!?!」

そこに現れたのは簀巻きにされた一純その人だった

・ ・ ・

さかのぼる事、二時間程前

凜は、小夜と共に一純からケーキを奢ってもらい（当然、麻紀音の店ではない）浮かれ気分で帰宅していた

口の中には、先程食べた紅芋のモンブランの余韻がまだ残っている

小夜も公共の場では理性的なので、いざこざも無く、久しぶりにとても穏やかな時間を過ごしたような気分だ

まったく、小夜の奴も常にあんな状態でいてくれたらありがたいものだ

そして早々に兄離れしてもらいたいものだ

そんな事を考えていると、やがて凜は自宅の前に到着する

そこは、類家グループの一人娘が住んでいるとは思えないような質素な家だった

しいて言えば、一階建ての純和風の庭付きだという事くらいか

しかもこの家に住んでいるのは凜ただ一人だけである

両親はまた別の家で暮らしている

そこには別段後ろめたい理由があるわけではない

凜が高校に上がる際に、何を思ったか社会勉強を兼ねて一人暮らしをしようと希望した為、両親が高校に近いこの家を急遽、土地ごと買い取ったのだ

両親は質素な生活を尊ぶべしとこの物件を選んだようだが、土地ごと買い占めている時点で質素とはいえないような気がする

それでもこの家は凜の気質に合っているらしく、悠々自適に毎日の生活を送っている

凜はポケットから鍵を取り出すと、少々立て付けの悪い玄関の錠を開く

「只今」

凜は誰もいない自宅に帰宅の旨を告げる

少しだけ寂しく感じるものの、日々の習慣として挨拶は欠かすことが無い

こんな時に、家に待っていてくれて「お帰り」と言ってくれる存

在が恋しい

それが一純であってくれれば僥倖だ

(私が仕事から帰ってくると、エプロンをした一純が夕飯の支度をしてくれて『お帰り凜、夕飯にするか？それとも風呂？』なんて言っ
て迎えてくれる……ふふふふ……いず
れは叶えてみせよう、必ず)

凜は妄想に浸りながら、顎に手を当て一人にやける

どうやら一純が主夫になるのは、凜の中では決定事項になっているらしい

ていうか普通逆だろう

まあ、凜としても互いの立場や特技を考えた上での結論なのだろう

(……ま、とりあえずは自分で夕飯の支度をしなければな)

妄想だけでは夕飯は出てこない

凜は靴を脱ぐと、夕飯の準備をするべく台所へ足を向けようとす

だが、ふと自分の鞆を見て足を止める

(そうだ、忘れる前にこの資料をリストに加えておこうか)

そんなに手間になる作業でもない

夕飯の支度をするまえにサツサと作業を終わらせてしまおう

そう思い立った凧は身を翻し、その足で自室へと向かうと入り口の襖を開く

そして部屋に入ると、本棚から一冊のファイルを取り出す

タイトルには「お前らの事は全てお見通しだ」と書かれている

なんだか高校以外の人間のデータまで入っている気がする

そのファイルを机の上に置き、自分の鞆から学校で印刷した資料を取り出す

間違つて西明寺のクラス全員分の資料を印刷してしまったため、結構な量だ

やはり紙の無駄だったと、今更ながら後悔する

そしてその資料の中から、西明寺の資料を探すため紙をめくる

「サツサと終わらせて夕飯の準備をしなければな……………」
「…む？」

資料をめくる凧の手が止まる

どつやら、お目当ての資料が見つかったというわけでもないようだ

凧の目に映るのは、一枚の白紙のA4用紙

だが、その紙が白紙であるというのは、少々奇妙な事なのだ

クラスの名簿順に印刷されたはずの紙にある白紙

しかも、そこに書かれているはずである人間が問題だった

「・・・何故奴の・・・西明寺九十九の資料だけ無くなっていくのだ!!」

不可解な出来事に、凜の声が荒がる

学校を出る前に確認した時には確かに存在した

それに白紙の紙なんて一枚も無かったはずだ

しかし其処には、どう見ても白紙にしか見えない紙が確かに存在する

他の生徒の資料には異常はない

西明寺の資料だけがスッポリと抜け落ちているのだ

凜の中に、昼まで存在していた西明寺への不信感が再び湧き上がる

「・・・どうやら夕飯の時間は少し遅くなりそうだ」

そう言うと凜は携帯を取り出すと、どこかへ電話をかけた始める

「・・・ああ、小夜か?・・・まあ、そう言うな・・・
うむ、今回は少々真面目な話だ・・・今から30分後私からの

連絡が無かった場合、学校の裏にある神社に麻紀音と一緒に来てくれないか？・・・うむ、もしかしたら取り越し苦労なのかもしれないが、一純の身に関する事だからな・・・ああ、時間が無いから詳しい説明は後でな？・・・すまない、それじゃあ頼んだ」

言い終えると凜は携帯を切る

そして凜は壁に掛けてあった一振り大きな太刀に手をかける

「・・・本当に、杞憂であれば良いのだが」

凜はポツリとそう呟くと、足早に家を後にした

・・・

その頃、一純はと言つと

「・・・先輩？先輩は知らないだろうけど、俺こつやって拉致られるのって二回目なんですよ？」

簀巻きにされ、小さな少女に担がれた状態で一純は言う

「知るかそんな事・・・それにしてもお主はこの状況で、よくもまあ冷静に居れるもんじゃなあ」

一純を担いでる張本人である西明寺が呆れたように呟く

しかも西明寺は、その細い腕で一純を担ぎ上げるに留まらず、結構なスピードで屋根伝いに疾走している

「普通、わしの正体は何なのか問い詰めたり、この状況に慌てふためくものじゃろくに」

まあ普通の人だったらそう言うだろう

だが、高倉一純という人間は、普通の人間の精神力じゃあやつてられないような面々に囲まれてるので

「まあ、世の中色々なことがありますからね。先輩が何であってもそんなに驚きませんよ」

と、サラリと真顔で答えてしまう

「・・・でも確かに先輩の正体とかは兎も角、一体なんで俺が拉致られてるのは気になるんですけど」

そう言われ、西明寺はううむと唸る

.....

.....

.....

.....

「.....そういえば深く考えておらんかった」

.....今回も衝動的犯行ですか？

西明寺は殆ど飛ぶように走りながらも頭を捻らせる

どうやら、今後の一純に対する処遇を考えているらしい

真面目な顔をしてるかと思ったら、今度はニヤリと怪しげな笑みを浮かべたりと、一人で百面相している

すると突然、顔が火でも点いたように赤くなった

「.....いや.....流石にそれはまだ早い.....じゃがしかし.....ううむ.....」

しかも、なにか小声で呟いている

「先輩？」

一純は自分の世界に行ってしまった西明寺をサルベージしようと声をかけてみる

不意打ちのように掛けられた声に、西明寺の肩がビクンと驚いたように跳ねる

「！な、なんじゃ！！い、いきなり声をかけるな馬鹿者！！！」

真つ赤な顔をしながら西明寺が、担いでいる一純の頬をお仕置きとばかりに引つ張る

だが手加減してあるのか、頬は伸びるだけで痛くは無い

「ひゅいまひえんひえんぱい」

すいません先輩と言ってるのだが、頬を引つ張られていては正しく発音できるはずも無い

「ふ、ふん！下僕は下僕らしく、黙ってわしについて来ればよいのだ！！余計な詮索は無用じゃ！！！」

そう言いながら西明寺は一純の頬から手を離す

まあ、ついてくるって言つか拉致られてるんだけど

「……それじゃあ、やっぱり先輩の正体だけでも教えてくれませんか？」

詮索無用とは言ってるけど一応聞いておこう

そう言われた西明寺は、目を輝かせたかと思うと走るのを止め一純を地面に降ろす

「ふん！聞いて驚くでないぞ！！わしこそは、この町に1000年以上前からそびえる霊樹から生まれし九十九神なのじゃ！！！」

先輩は偉そうにそう言うと、無い胸を張り踏ん返り返る

・・・詮索無用じゃなかったのだろうか？

ていうか神様だったんだ・・・

・・・まあ確かに威厳があるといえはあるような気がしないでもない

「そのわしの下僕となれる事を喜ぶが良い！！宝くじで1億当てるより凄いことじゃぞ！！」

・・・なら普通に1億欲しいです

それに神様なら下僕とかじゃなく眷属とかでしょう・・・多分

「むづ、そつなのか？ならお主はわしの眷属じゃ！！」

西明寺はアッサリと下僕から眷属へのクラスチェンジを了承する

・・・って、よくよく考えたら呼び方が変わったところで別に何にも無いんだけど

すると、西明寺は何か閃いたようにポンと相槌を打つ

「そつじゃ！お主を眷属にするのなら、やはり契約の儀みたいな事をせねばのうー！！」

明るい声で先輩はそう言い放つ

「・・・儀つて、やっぱり儀式の事ですよね」

不安そうな声で一純は返す

「何、儀式といっても互いに杯を酌み交わすだけじゃ。用は酒盛りじゃな」

・・・俺、未成年なんだけどなあ

しかし神様に人間の世界の法律なんてどうでもいいだろうしな・・・

結局無視されて無理やり飲ませられるのだろう

なんて考えていたら、再び西明寺に担ぎ上げられる

その顔には、何か企む時のような妖しい笑みが浮かんでいる

実際に何か企んでる顔を見た事は無いが、そう思える位妖しい笑みだ

「そうと決まったら善は急げじゃ、早く神社へ戻らねばな」

そう言い走り出しかけた西明寺の足がピタリと止まる

すると後ろの方から大きな排気音が聞こえてくる

この音には聞き覚えがある

しかも今と同じようなシチュエーションで

そして排気音が自分達の下で止まった時、先輩がゆっくりと口を開いた

「……………思ったよりも対応が早いの小娘」

そしてその視線を屋根の下の地面に向ける

そこには黄色いベスパにまたがり、その体には不釣り合いな程大きな太刀を携える少女が一人、真っ直ぐにこちらを見上げてるのだった

t o b e c o n t i n u e d

第19夜：女色々長恨歌 6番（後書き）

本当はこの回で長恨歌編は終わらせる予定だったんですが、思っていた以上に長くなりそうです

その都合で、切りの良いところで終わらすため前回よりも少し短くなりました

あと短くて1話、長くてもう3話で長恨歌編は終わります

この長恨歌編は難産なので、次回の更新まで気長にお待ち下さい

W

第20夜：女色々長恨歌 7番

「ここで会ったが百年目、大人しく一純を放してもらおうか!」

太刀の切っ先を西明寺に向けながら、凜が凜々しくそう叫ぶ

「放せと言われ、はいそうですかと放す馬鹿が何処におる。これからワシらは、めくるめく官能の世界へと旅立つところなのじゃ。邪魔をすると因達羅神に蹴られてあの世行きじゃぞ」

誤解の生じるような言い回しは勘弁してもらいたい

「こちらら官能の世界へ旅立つ気など毛頭無い

最悪、急性アルコール中毒であっちの世界にこんにちはするくらいだ

「……………あ、こっちのほうがちが悪いか

「戯言を聞く気は無い! 貴様がうちの学校の人間でない事は何となく分かっているのだ!! 大人しく正体を現せ!!」

凜は西明寺を睨みつけてまくし立てる

一方で西明寺の方は、少々だるそうな顔をする

「前の回で説明した事をもう一回言つのも面倒じゃから、そこらへんはかくかくしかじかで」

思いつきり省略した説明で乗り切るつもりらしい
ていうか説明ですらない

「なるほど、そういう訳か・・・」

どうやら伝わってしまったらしい

意味を理解したのか、凜は納得したように頷く

これで伝わってしまうほうが意味問題のような気もする

「だが、そもそも何故一純に付きまとう必要があるというのだ!!」

(それももつともだな・・・)

凜の言葉に、一純も疑問を抱く

先輩が九十九神っていうのはわかった

だが西明寺が自分にちよっかいを出す意図がサッパリわからない

凜の問いを受け、西明寺は少し考える素振りをみせる

すると不意に自分の懐から一枚の札を取り出すと、何か呟きだす

「二枚目の札よ、わしの代わりに一純を神社まで連れて行ってはくれまいか?」

そう言うと、その札を一純の額にペタリと貼り付ける

「これでもおぬしの事を考えての事なんじゃぞ？おぬしが知りたい事を話すには、少しばかり、あ奴おるのは都合が悪いと思つてのう」
そういつて西明寺は屋根から飛び降りる

「……どういう意味だ」

そう返して見るものの、凜は薄々だが西明寺の言いたいことが分かり始めていた

西明寺の現れたのは、自分が例の神社で刻参りをした次の日

しかも西明寺は、先程自分であるの靈樹の九十九神と言つていた

という事はつまり……

凜の額に一筋の汗が流れる

凜の考えを悟り、西明寺が口を開く

「おそらくおぬしの考えは8割程あつてるじゃろつ。じゃが、おぬしだけが責任を感じることは無いぞ？」

凜の顔に？が浮かぶ

「なぜならあの日、おぬしの他にも、一純の妹と機械人形も同じ事を願つて行つたのじゃからのう。しかもワシがこの体を得る直接の原因は一純の妹にあるしのう」

3人ともあの話を聞いてスグに行動に移すとは……

自分達の思考がここまで類似したものになるとは考え物だ、とうか嫌だ

しかも直接の原因を作ったのが小夜の奴だとしても、自分も同じ様なことをしているので何も言えない

凜は自分達の考えの浅はかさに頭痛を覚える

「・・・確かにこんな事一純の前では言えないな。・・・しかしそれが、一純に付きまとうのには関係ないはずだ」

そう言われ西明寺はニヤリと唇の端を吊り上げる

「そこからは、おぬしの思いつかぬ残り2割の話じゃ」

そういうと西明寺は、その場でくるりと回ったかと思うと、黒い煙のようになり、塀の上まで移動し元に戻る

「おぬし等3人が霊樹に願った事は、言い方は三者三様じゃったが内容は『一純を自分だけの物にしたい』というものじゃった。流石に三人の願いを同時に叶えるのはワシでも不可能じゃ、だからワシは考えた、ならば3人も願いを諦めさせるしかないとな。そしてそれは、一純とかいう奴がいなければ簡単に目的を達成できるとな」

その言葉を聞いた凜は、瞬く間に西明寺の立っている塀に飛び乗り、その喉元に切っ先を突き立てる

「せつかちな奴じゃのう」

喉元に刀が突き立てられているのに、西明寺は涼しい顔で口元に笑みを浮かべている

「一純に危害を加えるのなら容赦はしない、このまま喉元をかき切つてやるぞ」

凜の目には躊躇は無かった

その言葉通り、ためらい無くその刃を引くだろう

「話は最後まで聞け、それに一純の命を取るだけならとつくの昔にやってるわ」

「……確かにな」

その言葉に納得したのか、凜は刀を喉元から離す

「うむ、物分りが良いのはいいことじゃ。……まあ、確かに初めは一純の命を奪うつもりじゃった、だがいざ部屋に侵入して奴の顔を見たら……」

そう言う西明寺の顔が見る間に赤くなっていく

「……何故かわしには一純を殺す事は出来なかった……呪い殺そうにも集中できんし、首をしめて殺そうと奴に触れると力が入らぬ……このままでは目的を果たす事が出来ぬ……そこでわしは思いついたのじゃ!!」

西明寺はそう叫ぶと、力強く握りこぶしを振り上げる

凜は次に出てくる言葉に大体の予想がついていた

ていうか分からない奴がいたとしたら、おそらく一純くらいのもんだろう

「三人を諦めさせるには、一純を第三者、つまりわしのものにするしかないと!!」

ビュン!!

凜によって思いつきり刀が振り下ろされる

西明寺はそれを紙一重で避ける

そしてガツンと刀が塀に叩きつけられる

刀を振り下ろした凜の目は、さっきよりもさらに殺気立っていた

「やはり貴様はここで叩き切る!!」

危ない目をして凜が刀を振り回す

人がいたら必ず通報されてしまう光景だが、幸か不幸か周囲に人気は無い

「まあ落ち着け小娘、おぬしではワシが逆立ちしていたとしても絶対に勝てん」

一応神様だし

「しかし、だからと言ってこのまま力で人間をを負かしても神として心象が悪い……そこでだが」

ザク

そう言ってる西明寺の脳天に刀が刺さる

どうやら凜は話を聞かずに刀を振り回していたらしい

しかし西明寺は死ぬ気配は無く、むしろ話を聞かれてなかった事に憤慨していた

そして一瞬黒い煙のようになり刀から離れる

「……話はちゃんと聞け。じゃがこれで分かったじゃろう？おぬしではわしは殺せぬわ」

ブス

今度は西明寺の腹部に刀が刺さる

いい加減頭に来たのか、西明寺の眉間に血管が浮かぶ

「い・い・か・げ・ん・に・せんかあああああああ!!!」

そう叫んだ西明寺の掌に五芒星が浮かんだ瞬間、凜の足元から大爆発が起きて、そのままきりもみして吹っ飛ぶ

そして結構な滞空時間の後、ベチャッと凜が地面に落下する

しかしこつちも何事も無かったかのようにムクリと起き上がる

「む？私は今何をしていたのだ？」

凜は黒焦げになりながらも頭に？を浮かべる

どつやらさつきは完璧に暴走してたらしい

西明寺は呆れながらも話を続ける

「早い話、平等な条件で決着をつけようというわけじゃ

西明寺は、我に返った凜にそう告げる

「……具体的に何で決着をつけるつもりだ？」

一瞬で状況を理解した凜は西明寺に尋ねる

そう言われた西明寺の口元がニヤリと上がる

「それは………コイツでじゃー!!」

そう言っつて西明寺は、何処からとも無くあるものを取り出した

そのあるものとは………

「一升瓶？ということとは………」

凜の顔に珍しく不安の色が浮かぶ

「うむ、察しの通り、飲み比べで勝負じゃ!!」

一升瓶を抱え西明寺は高らかに叫ぶ

「あ、ちなみに未成年じゃからというのは無しじゃぞ、わしに人間の法律なぞ関係ないしのう、それに互いに飲酒は初めてじゃろうからこれが一番平等じゃ……一純との酒盛りの予行練習にもなるしのう」

どうやら最後に出たのが本当の目的らしい

一方、凜は言おうと思ってたことを先に潰されてしまったので反論出来ずにいた

(……生徒の見本であるべき生徒会長が飲酒など……しかし、ここで逃げては一純を奪われてしまう……えい!!仕方がない!!)

こちらの方も覚悟が出来たらしい

「……わかった受けて立とう」

「うむ、その意気やよし。では同時に一杯ずつ杯を交わしていき、先に酔いつぶれた方が負けじゃ、負けた方は大人しく引き下がる……どうじゃ?」

そういつて西明寺は凜に杯を手渡す

「異議は無い」

凜も腹をくくったらしく決意の眼差しで杯を受け取る

そして最初の一杯が互いに注がれる

「では同時に飲むぞ?」

凜はコクリ頷くと、一瞬躊躇したあと意を決して杯にその口をつけた

・
・
・

「急ぎなさい麻紀音!!早くしないと兄さんが危ないわよ!!!!」

そう携帯電話に叫びながら小夜が夜の街を疾走する

その顔には焦りと不安と怒りが混じっている

「あたしとした事が、こんな札に騙されるなんて……ああ！
腹立たしい！！！！！」

「そう怒るなよ小夜」

小夜の言葉に札が反応して答えを返す

「五月蠅い！！！！！」

小夜の逆鱗に触れ、そのまま札はビリビリと破かれてしまう

夕飯の後、凜に言われたとおり出かけようと、部屋に戻った兄さんに声を掛けに行ったら、返事は返ってくるものの何か様子がおかしい

案の定天井裏から覗いてみると、この札一枚残して兄さんは消えていた

そうして今に至るわけである

「誰の仕業か知らないけれど、こんなふざけた事をしてくれた御礼はたっぷりたっぷりぷりとしてもらっわ、そりゃもうこの世に生まれた事を後悔するくらいに」

「……その意見には賛成」

いつの間にか麻紀音が上空を飛びながら小夜に追走している

「……あなた、一言くらい言ってから来なさいよ、ビックリする

じゃない」

「……………さつきからマスターの反応がはっきりしない、消えたり現れたりフランスに現れたり一気に2178369箇所から反応が現れたり」

小夜の言葉を華麗にスルーしながら麻紀音が話す

「無視するんじゃないわよ……………まあ、こつちも同じようなものよ、とにかく兄さんが危ないわ！！手がかりは今のところ凜の言ってた神社だけだし……………もう、とにかく急ぐわよ！！」

そう言っ走り出しそうとする小夜の肩を、飛んでいる麻紀音がガシツといきなり掴む

「ちょ、ちょっと何するのよ!？」

「……………前方に見知った反応がある」

そう言われて目を凝らしてみると、確かに前の方に誰かが居る

しかもうつ伏せ大の字の状態でぶっ倒れている

麻紀音は小夜をぶら下げた状態で倒れてる人に近づいていく

少し近づくと、それが誰なのかハッキリと確認できる

しかも傍らにでっかい刀が落ちてるので間違いない

「何こんな所で寝てるのよ凜、とっと起きて兄さんを取り返すわ

「よ」

そう言いながら小夜は足で凧をひっくり返す

すると

「うわ……………」

「……………無残」

二人同時にあっけに取られる

ひっくり返された凧は酷い状態だった

白目を剥いて顔を真っ赤にしながら気絶してた

しかも滅茶苦茶酒臭い

よく見れば近くの電柱の下に大量の酒の瓶やらが入った袋がある

「……………日本酒、ビール、チューハイ、焼酎、ジン、ウ
オッカ、老酒、ワイン、医療用アルコール……………
・通常の人間なら致死量に相当」

飲んではいけない物まで混ぜてるんですけど

「このくらいで死ぬんだつたら苦労しないわよ……………ほら！！
とつとと起きなさい！！！」

そついいながら凧の頬にバシバシと往復ビンタを喰らわせる小夜

普段の凜からは考えられない苦しみようだ

「……………通常のハバネロの3倍の辛さのレッドサビナ種のハバネロの成分を抽出した特性の気付け薬……………効果は良好」

「あたしも前喰らったけど、これで目が覚めないのは死人くらいのものよ」

下手すればこれを喰らって死人になるが

「あ……………うう……………?……………小夜に……………麻紀音か……………?」

意識を取り戻すも、酒＋ハバネロのショックでグロッキーの凜

「私はここで限界みたいだ……………元凶は……………学校裏の神社にいる……………すまないが……………一純を……………」

そういつて凜は再び意識を失った

その類には一すじの涙が伝っていた

結局何も出来なかった自分の不甲斐なさを悔やみつつ流した涙だった

「……………急ぐわよ麻紀音」

「……………了解」

凜の意志を受け取り、2人は一純の待つ神社へと急ぐのだった

・
・
・

そして時間は現在に戻る

場所は学校裏の神社

空は漆黒に染まり、見上げれば、黄金色に輝く満月が煌々と地上を照らす

その月明かりに照らされ、地に3つの影が浮かぶ

不思議な事に、その内の1人の足は地に着いておらず、数メートル宙に浮いている

「一純の妹に機械人形、あの小娘の有り様をもっても引かぬとは、勇猛なのか愚かなのか……」

浮いている影が呆れたように溜息を吐く

地に立つ2つの影の内の1人、小夜がキツとその影を睨み付ける
「敵討ちって言うのは柄じゃないんだけどね、凜にあんな風に言われちゃったら、こっちも黙ってる訳にはいかないじゃない」

小夜はそう言うと懐から銃を取り出す

その銃は、いつも持っている通常の拳銃とは違い、闇のように黒く鈍重な外見の巨大な物だ

こんな大きな銃を撃つたら、小夜のような体軀では腕が外れてしまっただろう

「相手が人間じゃないんなら、こっちも徹底的にやらせてもらっわ」

小夜はそのまま、銃口を宙に浮かぶ影に向ける

「……………待て妹、……………対象の背後に別の熱源反応……………これは……………!!」

2人の内のもう片方、麻紀音が何時もの淡々とした言葉に驚愕の色を浮かべながら、小夜を静止させる

その様子を見た影がニヤリと笑みを浮かべる

「本当ならこの後、2人でゆっくり酒でも飲もうかと思ってたんじやが、先におぬし等を黙らせておくもの、また丁度良いものだ」

影はそう言うとパチンと指を鳴らす

そうすると背後の空間がユラリと揺らいだかと思っただら、別の影が現れる

「な・・・・・・・・!!!!!!」

その現れた影の正体を知った小夜は驚愕する

「兄さん!?!」

そこに現れたのは簀巻きにされた一純その人だった

t o b e c o n t i n u e d

第20夜：女色々長恨歌 7番（後書き）

長かった長恨歌編、次回でラストです

あとここで緊急告知です

このレストロ アルモニコをここまで読んでくださってるかつ絵を描ける人をお願いします

あなたがこの小説を読んできて抱いた、キャラクターのイメージを描いてもらえませんか？

本来はイラスト依頼で書くべき事なのですが、私がこのキャラはこんな感じだと指定して描いていただくのではなく、本編を読み続けていただいたなかで、どのようなキャラクター像を思い浮かべながら読んでいるのかをそのまま描いて欲しいのです

私の中の小夜はこうだ！！凜はこうだ！！麻紀音はこうじゃ！！！！といった風に挿絵がないとキャラの外観は千差万別になると思っています

こんな依頼を受けてくださる仏のような方がいらっしやれば、メッセージを下さい

受けてくださる方が出現したらイラスト依頼に正式に出そうと考えています

それではよろしくお願いします

かしこ

第21夜：女色々長恨歌 8番（前書き）

長恨歌編のラストです

第21夜：女色々長恨歌 8番

「兄さんっ!!」

小夜は、西明寺の背後に浮かぶ、簀巻きにされた一純に大声で呼びかける

しかし、一純は四肢をだらりとさせたままピクリとも反応しない

「あんた!!兄さんに一体何したの!!!」

小夜はこみ上げる怒りを抑えようともせず叫びながら、西明寺に銃口を向ける

その様子に、西明寺は困ったように頬をポリポリ掻きながら答える

「あゝ……それは何と言うか……よくわからんのだが、ワシがここに来たら、先に送り届けたはずの一純が、目を回して気絶しておった」

そりゃあ、簀巻きにされて身動きできない状態で、空高く吹っ飛ばされたんじゃないじゃあ、受身も取れずに地面に激突するしかないだろう

逆に、死ななかつただけラッキーだ

「まあしかし、どっち道邪魔じゃから下がっててもらうがのう」

そう言って西明寺が再び指を鳴らすと、一純も再び闇の中に消えていく

「おぬし達は、あの小娘と違って血の気が多そうじゃしのう」

西明寺は唇を吊り上げ、邪悪な笑みを浮かべながら、空中から小夜達を見下ろす

「……………私に血は流れてない」

わざとか天然か、麻紀音が残念そうな顔でそう呟く

「……………あえて突っ込まないでおくわ」

そんな麻紀音に、小夜は微妙にやる気を削がれる

しかし、一純の貞操の危機に反応して、小夜のやる気と殺意は無限の回復力を発揮するのだ

「兎に角！！兄さんは返してもらおうよ！！！！」

そう言いながら小夜は、西明寺に向けた銃の引き金を引く

サイレンサーが付いているのか、弾丸を撃つたにしては乾いた音が数発、神社の境内に響いた

しかしそれだけだった

弾丸が肉を貫く音も、撃ちぬかれた者が地に倒れる音も、死に行く者の断末魔の叫びもなかった

「……………人外相手なのは承知の上だったけど、いくらなんで

もこれは反則じゃない？昏間とはエライ違いじゃない」

小夜が額に汗を伝わせながら呟く

その視線の行先には、撃たれた箇所が全て黒い煙になりながら、平然としている西明寺の姿があつた

「こつみえても、この神社にある「呪いの霊樹」の九十九神じゃからのう……まあ、昏間はあまり力が出ない上に、情報操作のための結界に力を使っておるから、誤解するのも無理は無い…….じゃが、制約の無くなったわしに敵はおらぬ!!」

そう言いながら、西明寺がグワツシ!!と腕を振り上げると、撃たれた箇所が、黒い煙から元の肉体へと戻っていく

「弱い物をいたぶる趣味は無いのじゃが、おぬしらには少し痛い目を見てもらうかのう」

そう言いながら、西明寺の顔は心底楽しそうな笑みに歪む

生物相手なら兎も角、なまもの相手が幽体みたいなものなんだからどうしようもない

「……流石に、神様相手じゃ分が悪いわね」

小夜の顔に明らかな焦りが浮かぶ

「…….心配するな妹」

そんな小夜の肩を、麻紀音がポンと叩く

「……麻紀音？」

思わぬ励ましに、小夜は少し驚いたように麻紀音に振り向く

「……反則には反則……まだ手はある」

そう言いながら麻紀音が音も無く前に出る

小夜に続いて出てきた麻紀音に、西明寺は余裕の表情を浮かべる

「ほう、今度は機械人形が相手か？まあ先程の様子を見てたのなら結果は一目瞭然じゃがな」

西明寺は、そう言いながらカラカラと笑い声を上げる

それに麻紀音は一純の許可無しでは、一切攻撃は行えないはずだ

……例外はあつたけどね

「……類家の科学力は世界……外道照身霊波光線……照射」

そう言うと麻紀音の目から、まるで太陽でも出たんじゃないか？と思われるほどの強い光が、西明寺に向かって照射される

その強烈な光を浴びて怯んだ西明寺は、そのまま地面に着地する

しかし、光を浴びた西明寺にはなんら変化は見られない

強いていえば、眩しかったという事くらいだ

「……ぬう、小癩な真似をしておつてからに……。それがどうしたというのじゃ！！只単に眩しいだけじゃ！！」

小夜から見ても、今のは只眩しいだけの光にしか感じられなかった

「……。まさかそれだけなんていつたら、あんたから撃ち壊すわよ」

そう言いながらジト〜とした目をしながら麻紀音に標準をあわせる小夜

そんな周囲の反応に、麻紀音が懐からICレコーダーを取り出す

そしてポチッと再生ボタンを押した

ジ〜

『説明しよう！！外道照身靈波光線とは、空気中の靈子を凝縮・固定させることによつて、幽霊などの幽体に物理的な干渉を行う事が可能になるといふ、まあ噛み砕いて言えば、幽霊を極めて人間に近い状態に変えてしまふ摩訶不思議な光線なのだ！！……え？原理？何を言ってるんだ！！一流の科学者たるもの、そんなもの勘で作れなくてどうする！！出来ちゃったもんはしょ〜がないじゃない！！大体君はいつも……』

カチッ

麻紀音が停止ボタンを押す

「……………今の声、前に会った研究員の人だったわね」

今のICレコーダーのやり取りを聞いて、小夜は脱力感に襲われる

そして、遅れてハッと気づく

「っていう事は、攻撃が効くって事!？」

小夜は西明寺の方に振り向く

西明寺はというと、苦虫を噛み潰したような顔をしている

どうやら本当に、人間に近い状態になってしまってるらしい

煙にもなれなければ、術も使えなくなってしまっていた

「……………そんなご都合的なもの反則じゃろう!！」

そう怒りながら西明寺は、麻紀音を指差し、もう片手をブンブン振り回す

「……………ご都合主義万歳」

麻紀音はそう言いながら、無表情で万歳する

そしてその横では、小夜がパキポキと指を鳴らしながら笑っている

「形勢逆転ね」

そういつと小夜は銃を構えなおすと麻紀音に尋ねる

「麻紀音、さっきのヤツどれくらい効いてるの？」

「………最低でも30分は有効らしい」

情報ソースが不十分なので、ハッキリとしたことは言えないが大
体その程度だろう

「じゃあ、早めに終わらせないとね」

小夜が、先程の西明寺のような邪悪な笑みを浮かべる

こうなると、ぶっちゃけどっちが悪役か分からない

穏やかでないのは西明寺の方だ

突然の反則級の攻撃に、殆ど力を無力化されてしまっている

まさか、あのようなありえない光線が存在するなんて、想像もし
なかつただろう

しかも、勘だけで作り出された、なんともインチキ臭い代物だ

だが現実には、西明寺は普通の人間と同じようになってしまっている

(こうなったら最後の手段、三枚目の札を使うしかない……!!)

西明寺は懐から一枚の札を取り出す

見たことのある札に、小夜が反応する

「その札・・・兄さんの声で喋っていた変な札ね!!」

この札に騙されていた小夜にとっては、憎憎しい札だ

「そう、三枚ある札の最後の一枚じゃ」

苦々しい顔をしながら西明寺が答える

まるで、最後の札を使う事にためらいを持っているようだ

(くっ・・・・・・・・!!力さえ失っておらねば、迷わず使えるのじゃが
・・・・・・・・)

その隙を見て小夜が叫ぶ

「麻紀音!!今のうちに札を奪い取るわよ!!」

「・・・・・・・・応」

そして二人同時に西明寺目掛け突撃する

麻紀音の方は背中からブースターを出している

「迷ってる時間は無いか・・・・・・・・」

もう眼前まで二人が接近している

西明寺に選択肢は残されていないようだ

「・・・・・・・・・・来、大雷瀑布、数多あまたを包め」

そう言いながら西明寺は空に向かって札を投げる

「・・・・・・・・・・妹」

「分かってるわよ！！」

小夜が札目掛けて弾丸を発射する

しかし札は、弾丸が命中する直前に霧散して消える

弾丸もまた、命中するべき物の消失により、空へと消えてゆく

すると辺りに、火花が散るようなバチバチという音が響き渡る

「今のワシじゃ、自分も痛いから本当は使いたくはないんじゃぞ！」

西明寺が涙目になりながらそう叫ぶ

その間も、火花の音は更に激しさを増す

小夜もその危険な雰囲気きんぎゆうきに怯む

「・・・・・・・・・・なんかバイ感じなんだけど・・・・・・・・・・って、あれ？麻

紀音」

さつきまで隣にいた麻紀音がない

そして、目の前の西明寺がポカンとした顔をして上を見ている
嫌な予感がして、小夜は上を見上げる

すると、背中のブースターで空高く上昇する麻紀音の姿がそこに
あった

「何、一人で逃げてるのよおおおおつ！！！」

その声も、眩しいほどの稲光と、響く轟音にかき消されるのだった

・
・
・

未だ火花の散る境内に、麻紀音は降り立つ

そこには真っ黒こげになり倒れている、小夜と西明寺の姿があった

自分も、回避行動が遅れていれば、このような目にあっていたの
だろう

まあ実際は、ボディは絶縁処理が施されているので電撃は効かないのだけど、服が汚れるのがイヤなので逃げただけなんだけど

なにはともあれ、さっさと一純を確保せねば

そう思い、視覚センサーをサーモグラフィに切り替え、一純を探す

すると不意に

「あの、もう終わりましたでしょうか？」

知らない声に後ろから呼び止められる

麻紀音が振り向くと、そこには女性が一人立っていた

薄い緑がかった長い髪の毛、妙齡の綺麗な女性だ

「……………どちら様？」

突然現れたこの女性に、麻紀音は警戒しながら歩み寄る

「はい、私、そこに倒れてる者の母親で八尋と申します」

麻紀音は「これの？」といったニュアンスをコメながら、小夜を指差す

「いえいえ、もう片方の」

麻紀音は目を丸くして、西明寺の方を見る

母親と言われても、西明寺は九十九神なんじゃ・・・

そう疑問を抱く麻紀音に、八尋はにこやかに微笑む

「そうですね、それではせっかくですので、お二人を起こしてから説明いたしましょうか」

そう言うと、八尋はクイツと人差し指で円を描くようにして、宙をなぞる

すると、倒れていた二人が目を開ける

「あつつ・・・・・・酷い目にあったわ・・・・・・ん？貴女どちら様？」

電撃を浴びた痛みに呻きながら、目覚めた小夜は、早々に八尋を見つける

一方で、目覚めたものの、八尋を見た西明寺は硬直している

「それではまず、自己紹介からいたしましょうか、私の名前は西明寺 八尋、この神社にある霊樹の正体であり、この町に根ざす土地神でございます」

そうやって八尋はペコリとお辞儀をする

しかし、周囲からの反応は無い

皆、八尋の発言にあっけにとられている

そんな中で、小夜はかろうじて声を絞り出し言う

「れ、霊樹の正体って……じゃあ、こっちは一体何なんです
か！？こっちも同じ事を言ってたわよ!？」

小夜は西明寺を指差す

「そうですね、それではご説明いたしましょう」

私ごと、この神社の霊樹が「呪いの霊樹」と呼ばれるのはご存知
でしょう

そもそも、その噂は全くの出鱈目です

数百年前に、たまたま霊樹で刻参りをしたところ、偶然にも相手
が病気で死んでしまい、それで広まってしまったのです

そして今日に至るまで、そのような偶然が度々起こったため、「
呪いの霊樹」は伝説として残ってしまったのです

そして、あの夜

その伝説を聞きつけたあなた達が、ここにやって来たのです

ええ、そりゃもう

貴女方の込める、恨みの濃い事深いこと

……しかし、それもたいした問題ではないのです

問題は、小夜さんが打ち込んだ「銀の弾丸」でした

霊的处理の施された弾丸は、小夜さんの念を通じて、霊樹に宿っていた数百年分の恨みを吸収し、九十九を生み出したのです

この子が、一純という方に執着を持つのも、小夜さんの込めた念に影響されたからでしょう

……これが今回起こった事の全てです

麻紀音はジト〜つとした視線を小夜に送る

小夜は冷や汗をたらたら掻きながら、麻紀音からの視線を避ける

元凶は小夜だった

「私もこの子が生まれた時に、力を吸われてしまってまして……
・ 対処が遅れた事に、お詫び申し上げます」

そういつと八尋は深々と頭を下げる

「……………頭を上げて……………悪いのは全部妹だから」

麻紀音が、わざと小夜の心に突き刺さるように言う

ついでに、自分も恨みを込めた事も、ちゃっかり責任転嫁してる

小夜はズ〜ンと暗くなってる

「そう言っていたいただけると助かります、それでは、この子がもう悪さ出来ないように、元の弾丸に戻しましょう」

「ちょ、ちよつと！それはやりすぎなんじゃないの！？こうなつた原因は私であつて、九十九に罪はないわ！！……………まあ、兄さんをさらつた事は許せないけど……………でも消す事はないんじゃないの！？」

話を聞く前だったなら、容赦なく消す事に快諾したのだろうか、西明寺が生まれた事に自分が関与していたとなると、罪悪感が湧く

しかしその言葉を止めたのは、八尋ではなく、西明寺自身だった

「よいのじゃ・・・元からこうなる事はわかっておった・・・それに、生まれた原因がおぬしであっても、やってきた事の責任はわたしにある・・・自業自得じゃな」

そう言つと西明寺は静かに立ち上がる

「母上と呼ぶのはくすぐつたいが・・・母上、最後の願いを聞いては下さらんか？」

西明寺が八尋を見つめながら尋ねる

「・・・わかってます」

八尋は人差し指でクルつと宙に円を書く

すると、西明寺の目の前が光り輝く

その輝きが消え、辺りに闇が戻った時、そこには静かに横たわる一純がいた

一純の口から漏れる、規則正しい寝息が、静かな境内の中に響く
唯一の音のように感じられる

西明寺は横たわる一純の傍らにしゃがみ込む

「一純、おぬしとの酒盛り、どうやら中止のようじゃ」

そう言いながら西明寺は、一純の頬を優しく撫でる

「本当は、もっとおぬしと一緒に過ごしたかったのじゃが……
・どうやら時間切れのようじゃ……まあ、もっとも、この
事も分かっていた事なんじゃがな」

西明寺は静かに微笑む

だが、その顔は少しずつ俯いていく

「わかっていた事……なんじゃ……」

そして、ポツリと

一滴の水滴が、境内の石畳に落ちる

その一滴に続き、数滴の水滴が落ちる

そして西明寺は、ギュツと一純の服の袖を掴む

「……じゃが……別れとは、悲しい……のう……
・……おぬしに……二度と……会えぬと思つと……
・……苦しい……のう……」

西明寺は

口からこぼれそうになる嗚咽を、必死で抑えながらも

その瞳からこぼれる涙だけは、どうしても止める事は出来なかった

そして、小夜も麻紀音も、ただ唇をかみ締めて、その光景を見つめることしか出来なかった

「……話は全部聞かせてもらってたぜ」

「……へ？」

突然の声に、その場にいた全員があっけにと取られる

「……まさか、自分で言う事になるとはな」

その声の主は、そう言うとゆっくりと体を起こした

「……い、一純、おぬし何時から!？」

いきなりの出来事に混乱する西明寺

「まあ、何時からと言われたら、最初からですけど……なんか霧
困氣的に寝た振りしてたほうが良いと思って」

そう言うと、一純は八尋の方を振り向く

「ども、初めまして、高倉一純といいます。……で早速
でありますが、こういふ案はどうでしょう?」

そう言うと、一純は八尋にそつと耳打ちした

.
.
.

キーンコーンカーンコーン

昼休みを知らせる鐘が鳴る

クラスの半分位は、それを合図に、購買と食堂へと走り出す

どの学校も、この時間が一番熾烈だと思っ

勿論、一純の場合、昼食は自分で用意して来ているので、そんな競争率の高いデッドレースに参加する理由なんて皆目無い

そして、いざ自分の弁当を開こうとした時

「おーい、いずみん！お客さんだぞーい！！」

大声で佐倉に呼ばれる

無駄にでかい声で、そのあだ名を呼ぶのは止めてもらいたい

「一体誰だよ・・・小夜か？凜か？」

一純は渋々立ち上がると佐倉に尋ねる

すると、佐倉はウフフフと意味ありげな笑みを浮かべる

正直気持が悪い

「残念だけど外れだぜ、正解は・・・」

勿体つけずにさっさと見え

「なんと！！あの西明寺先輩だああああ！！」

「五月蠅いぞ馬鹿者、早くどけ！！」

叫ぶと同時に、背後からの蹴りで吹っ飛ぶ佐倉

それをサラリと避けながら、一純は西明寺に話しかける

「・・・で、一体どうしたんですか西明寺先輩？」

ガス

一純の頭に、西明寺のチョップが炸裂する

「名前で呼べと、何度言ったら分かるのじゃ！！」

西明寺・・・もとい九十九は、プンスカと怒りながら一純に向かって叫ぶ

「はいはい・・・んで？九十九先輩は一体何しに？」

「おぬしはアホか？この時間に昼飯を食う以外何をするとこのだ！！わしがわざわざ、一緒に食べようと誘いにきたのじゃ、ありがたく思え」

そう言つと九十九は、フンと偉そうに無い胸を張る

「待ちなさい！！兄さんは私とお昼を一緒にするのです！！」

そう叫びながら、小夜が猛スピードでこっちに来る

「大人気ないぞ小夜、全員で食べればよい話であるぞ」

いつの間にか、一純の背後に立っていた凜がそう言う

「そうだな、それが一番被害が少ないな」

このまま、放っておけば、周囲に被害が飛び火するだろう、間違
いなく

「………仕方ないのう」

「………兄さんが言うのなら」

二人も渋々承諾する

「それじゃあ、中庭にでも行くか」

一純の鵜の一声で、この嵐のような集団はゾロゾロと、中庭へ移
動するのだった

あの夜の出来事を覚えてる人間はいない

いや、正確には西明寺親子以外は覚えていない

あの日、一純が八尋に提案した事

それは「無かった事にしてくれませんか？」だった

九十九が消滅するのを止めてもらうための処置だ

これまでの出来事の記憶をなかった事にすれば、九十九が消える理由はなくならずだ

そんな突拍子も無い無茶苦茶な案を

「あなた方の許可さえあれば、結構ですよ」

と八尋は案外あっさりとは許してくれた

「ついでに、町全体にこの子の記憶を割り込ませておきましょう、もちろん学校の記録とかにもね」

そう言うと八尋は、九十九に優しく微笑みかける

「ただし、学校に行ってる間は、不要な力は封じておきますからね

「？」

その言葉に、九十九の涙腺が再び緩む

「ありがとう……!!母上!!」

そう言って八尋の胸に飛び込む九十九

親子の愛情を感じさせるワンシーンだ

「それじゃあ、あなた方の記憶の方は、私達の正体を除いて、適当に修正しておきますので。朝起きたら今日の事は忘れてます」

八尋が一純達にそう告げる

「はい、わかりました。…………それじゃあ今日はもう帰ります」

「ま、待て一純!!」

帰ろうとした一純を、九十九が呼び止める

「その……なんだ……あ、ありがとう……お前の
お陰で、消えずにすんだ……こ、これはその礼じゃ!!」

そう言うくと、九十九は一純の首をグイッと引っ張ると

チユ

頬に口をつけた

一純は固まった

小夜は固まった

麻紀音は固まった

九十九は頬を真っ赤にしている

八尋は「あらあら」と笑っている

「ど、どうせ今日の記憶は忘れるんじゃないのう………」

九十九は、顔を真っ赤にしてうつむいている

「あらあら、それじゃあこの事は残しておきましようか」

八尋がいたずらっぽい表情でそう言う

「即刻消しなさい！！いや、やっぱりこの小娘自体早急に消すべきよー！！！」

「……………これはちょっと許せない」

この方々は当然の如く怒り心頭だ

ああ、こんな最後には、やっぱりこうなる運命なのか…………

一純がうな垂れていると

「あらあら、仕方ないですね」

八尋がクルツと指で円を描く

すると、糸が切れた人形のように、小夜と麻紀音がその場に崩れ落ちる

「一足お先に、記憶を修正しておきました」

そう言って、八尋はにこやかに微笑む

……………この人最強じゃないか

そうして、麻紀音は八尋に送ってもらい、小夜は一純がおぶって帰るのだった

・
・
・

「・・・何ニヤケてるんですか先輩？」

中庭で一純が、九十九に尋ねる

「・・・・・・・・秘密じゃ」

九十九はぶっきらぼうに返す

ちなみに、小夜と凜は用事があると言って、惜しみつつも戻って
行った

「・・・いつかまた・・・・・・・・な」

九十九は聞こえないように呟く

「何か言いましたか？」

「空耳じゃ！！聞き流せ！！それより眠くなつたから膝を貸せ！！！」

そう言つや否や、九十九は一純の膝枕に乱暴に頭を乗せる

「空耳は聞き流せないんですけどね……」

一純はハア……と溜息を吐きながら、なすがままになってる

「つべこべ言つな……おぬしは……わしの………下僕……」

そう言いながら、九十九は目を閉じて眠りの世界に行ってしまう

寝る直前まで下僕とか言わないで欲しい……

そう思いながら、九十九の寝顔を見つめる

「………寝顔は天使なだけどなあ」

そう呟きながらも、結局時間ギリギリまで、天使の寝顔を拝んでいたのだ………

t o b e c o n t i n u e d

第21夜：女色々長恨歌 8番（後書き）

はい、どうも烏丸です

いや〜、やっと終わりましたよ長恨歌編

何でこんなに長くなっただらう？

しかも今回の話は、いつもの倍近くの量あるしね

………実は

まだ

終わってなかったり………

修正により、21夜と、なぜなに アルモニコの順番を入れ替えました

第22夜：女色々長恨歌 バックスステージ（前書き）

お待たせしました

長恨歌編、真の最終回でございます

九十九目線で書かれておりますが、本編で書かれた内容は省略させていただきますのであしからず

第22夜：女色々長恨歌 バックスステージ

どろどろと蠢く漆黒の闇の中、母親の胎内の暖かさは無い、ただただ暗く冷たい闇の中で、わしは生まれ落ちた

勿論、自分が何者かという事は理解しておく

今まで凝り固まっていた恨みの念が、どこぞの小娘の念がこもった、銀の弾丸を媒介に生まれた存在じゃ

どうもその前にも、二人ほど同じようなのが来たようじゃが

しかし、所詮わしは、生まれるはずの無かった異端な存在

この霊樹の神……今はわしのせいで力を失ってるようじゃが、その力が戻れば、わしは再び闇に還るじやろう

それならわしも、消える前に成すべきことを成そう

そう、あの三人の願い

じゃが、三人の願いを同時に叶える事は不可能

……それならば

「叶わぬように、諦めさせればよいのじゃ」

わしに与えられた存在意義

それを果たし、わしの存在した証を残そう

誰にも知られぬ、わしの存在した証を……

・　　・　　・

「……さて、確か一純とか言っただかう」

真っ暗な部屋の中で、九十九は呟く

目的の人物の居場所を謎の力を駆使して探し出し、見事潜入を果たした九十九は、眠っている一純の上にまたがり仁王立ちしている

「とりあえず、途中で目覚めて抵抗されぬように……」

九十九は、一純の額に人差し指を置く

すると、一瞬だけ一純の体が光を放つ

「金縛り完了……っと……さて、どのように始末するかの

うっ？」

金縛りを受け、苦しげに呻く一純を見下ろしながら、西明寺はうつむくと唸る

「……………とりあえず、このまま呪い殺してみるか」

そう言って、九十九は印を組みながら集中し始める

が

その視線はチラチラと一純の顔を覗き見ている

なにやら、一純の事が気になってる様子だ

そのせいか、印を結ぶ事に集中出来ずに、なかなか術が使えないでいる

「……………ええいつ！！どうしたことじゃ！！全く集中出来んではないか！！！」

苛立たしそくに九十九は叫ぶ

何故そうなるのか、九十九自身も分からない様子で、それが彼女の苛立たしさを一層掻きたてる

「……………それならば、力づくで」

そう言うと九十九は、その細い腕を一純の首に伸ばす

そして、ゆっくりとその指は、一純の指に回される

「・・・・・・・・・・・・」

しかし、その手に力が込められる事はなかった

一方で、九十九の顔は、まるでトマトのように真っ赤になってしまっている

「・・・・・・・・これは・・・やはり、人の命を奪うという行為に対する、わしの良心の最後の抵抗というヤツか？」

本人はそう言って誤魔化そうとしているが、忘れないで欲しい

あの3人が込めた願いは、一純への思いがそのウエイトを占めているという事を

勿論、本人が知らずとも、その事が九十九に多大な影響を与えているという事を

そうして、九十九は諦めたようにベットから飛び降りる

「仕方が無い・・・しばらく様子を見ながら、機会を窺うとするか」
顔を赤らめながらそう言うと、九十九は闇に溶けるように消えていった

・・・・・・・・一純にかけた金縛りを解かないまま

そして朝

金縛りのせいで、具合が悪くなった一純が起床した頃

九十九は一人、人気の無い高校の校舎裏にいた

グラウンドからは、朝練の野球部らしき声が聞こえる

その格好は、どこから調達したのか、この高校の制服に身を包んでいた

「……………ここで最後じゃ」

そう言うと九十九は校舎の壁面に、チョークでなにやら文字を書き始めた

その字は、下手糞なのか、そういう字なのか分からないが、普通の人には読めそうに無いような字だった

「……………これで、校舎の東西南北に記憶操作の結界を張れた

はずじゃ
「

どうやら、この人外は高校に潜入する気らしい

「・・・さてと、それでは少しばかり、この学校の事について聞くかのつ」

すると、九十九は校舎に向かって手を伸ばす

すると、校舎の壁が、水面のように波打つと、九十九の腕がその中に入っていく

肘まで入った所で、九十九は目を閉じ、静かに集中し始める

辺りには、再び静寂だけが広がる

しばらくすると、九十九はスウッと目を開ける

「ふむ・・・どうやら、あの子娘達もここに通つてるようじゃな・・・それならば、なるべく気取られぬように三年に潜り込むとするか・・・」

そう言うと、先程書いた結界が一瞬光る

どうやら九十九が、新たな情報を書き込んでいるらしい

そうこうしていると、辺りから学生の声が聞こえ始める

いつの間にか、登校時間になっていたようだ

結界のお陰で、九十九がいても怪しまれる事はないが、流石にこのような事をしていければ話は別だろう

おまけに、結界を張り続けるのに、力の大部分を消費しているので、大掛かりな術も今は使えない

他の人間に騒がれては面倒な事になる

そう思い、九十九は壁面から腕を引き抜く

壁面は何事も無かったように、元通り、只の壁に戻る

「・・・さて、少し疲れたしもう、しばらくここで休んでいくか」

九十九はそのまま壁に寄りかかると、ボンヤリと空を見上げるのだった

・
・
・

そして少しした頃、九十九はトコトコと玄関前にいた

登校ラッシュのピークも過ぎ、時間もギリギリのせいか、生徒の

数はまばらで、片手で数えるほどの人数しかない

九十九は、開いている靴箱に適当に靴を放り込むと、来客用のスリッパを履いた

「さてと、わしが行くのは3・Aじゃったな・・・・・・む？」

九十九はふと足を止める

視線の先には、靴箱の前に立ち止まっている一人の少女

低めの身長に、クリクリと大きな目、頭にはお団子にまとめた髪を包むシニヨンが2個くっついていて可愛らしい少女だ

その顔には、緊張の二文字がハッキリと張り付いており、心なし呼吸も乱れている

すると、意を決したように、懐から何か取り出すと、目の前の靴箱を開き、そこに突っ込んだ

そこで、帰ろうと振り返る少女と視線が合う

数秒だけ時間が静止した

すると、少女の顔が、一瞬青ざめたかと思ったら、マグマに温度計を入れたかのように、一瞬で顔が赤くなる

「じいじいじいじいじい、じいめんなさいいいいい！！！！！！！！！！」

少女はそう叫ぶと、凄いスピードで逃げていった

九十九は、突然の出来事に唾然とするだけだった

「・・・なんじゃ？あの小娘は？」

自分の小ささは棚に上げた発言だ

「それにしても、一体何をしていたのじゃろう・・・」

九十九は先程まで少女がいた靴箱の前に移動する

そしておもむろに靴箱を開けると、中に入れられた封筒を取り出す

封筒をひっくり返すと、裏には

『一純先輩へ』

と可愛い文字で書かれていた

「・・・一純だと？」

一純の名前が出てきて、九十九の興味は更に引かれる

九十九は、問答無用で封を開けると、中に入っていた手紙に目を
通す

「・・・・・・・・」

そこに書いてあったのは、当然愛の告白だった

「…………やはり、今の状態では力が」

脱力しながら、開かなくなってしまうた靴箱を眺めていると、不意にこちらに視線を感じた

振り向くと、そこには一純と凜が、不思議そうな目でこちらを見ている

(…………ぬう、見られては困る連中に見られてしまった……仕方ない、ここは一旦引くか)

そうして九十九はその場から、一旦立ち去るのだった

・
・
・

そして昼休み

九十九は屋上で、大の字になつて寝転んでいた

ちなみに、立ち入り禁止の札がぶら下がっており、鍵も掛かっていたのだが、壁をすり抜けて侵入した

「…………あー、何で人間どもは、あのような退屈な事を飽きもせず続けられるのじゃろう？」

よほど退屈な時間だったのか、不平しか出てこない

得る知識は、確かに新鮮で興味深いものがあったが、どうも机上に張り付いてばかりでは眠くなってしまう

「………ふう、何時までもこうしてるのも何じゃし、一純の様子でも見に行くとするか」

一応、当初の目的は、一純の様子を窺って、命を奪う隙を探すはずだったのだが、何故だか段々とその気がなくなってきたしまったいた

九十九はスツと立ち上がると、屋上の入り口をすり抜け、そのまま下に降りて行く

・
・
・

階段を降りていくと、二階に一瞬見知った顔が二つ見える

引きずられる男と、その男を引きずる髪の長い女

間違はなく高倉兄妹だ

二人はそのまま、一階へと続く階段を降りて行く

九十九も、見失ってはいけないと急いで階段を降りる

そして二階に降り、そのまま一階への階段へと足を出そうとした
その時

「大変だー！！科学部が作ったミサイルが暴発したー！！！」

廊下に、男子学生の声が響いた

何故科学部がミサイルを作っているのかはスルー

「は？みさいる？」

単語の意味を理解していない九十九は、頭に？マークを浮かべながら立ち止まる

すると

ドゴツー！！

「はぐつー！？」

九十九の背中に何か硬い物が直撃する

そうして感じる痛みと、浮遊感

「な！？」

ミサイルの直撃に階段を踏み外す九十九

流石に、火薬は入れられてなかったのか爆発する気配は無い

だが、それでもかなりの衝撃だ

とっさの出来事に術を使う時間も無い

まあ、落ちたとしても、最悪死ぬ事はない

だが、落下する九十九の視線の先には、激突されると危険な人がいた

そう、一純その人だった

「の、^の退けえええええええつ！！！！！！！！」

九十九の叫び声に、一純が振り返る

が、時すでに遅し

ガコオオオオン！！！！！！

一純の頭に、九十九の頭突きが炸裂する

背中に続いて、頭部への衝撃に、流石に九十九へのダメージが大きく、軽く意識が薄くなる

(・・・これに続いて、今度は地面に叩きつけられるのか……)
そう思っていると、不意に体が引き寄せられ、強く抱きしめられる
(えっ……!?)

一瞬状況が分からなかった

そしてそのまま、地面へと落下する

しかし、九十九にはダメージは無い

そこで九十九は自分の状況を理解した

(一純が……庇ってくれた……?)

自分の下敷きになり気絶している一純

自らの事を顧みずにわしの事を庇ってくれた……

九十九は一純に抱きしめられながら、自分の中に熱い物が生まれるのを確かに感じるのだった

(……せっかくじゃから、このまま気絶した振りしておこう)

なんか後ろから叫び声が聞こえた気がしたが、九十九はそのまま目を閉じるのだった

この後で第18夜のやり取りがありました

そして夜

一純が夕食を終え、自室に戻ると

「よっ」

九十九がベットの上で寝っ転がって漫画を読んでいた

「……先輩、一体人の部屋で何やってるんですか、ていうか何時の間に？」

一純が呆れたような顔で、九十九に尋ねる

「ふむ……まあ、とりあえず……」

九十九がパチンと指を鳴らす

すると、どこからともなく縄が現れて、瞬時に一純を簞巻きにする

そして、倒れる直前の一純を、九十九が受け止めて担ぎ上げる

こんな状況に慣れてしまった一純は、別段騒ぐ事も無くなすがま

まだ

抵抗しても無駄だと理解してるからである

「あゝ、先輩？連れ去るのは良いんですが、下手すると小夜のやつが暴れるので・・・」

でも、一応申し出てみる

「心配するでない、それなりに対策はある」

そう言つと九十九は、懐から札を一枚取り出す

「第一の札よ、しばらく一純の身代わりをしてくれまいか？」

そう言つと、札を入り口のドアに貼り付ける

「おう、まかされたぞ」

すると、札が一純の声で返事を返す

これには流石に一純本人も驚く

「何だか分からないですけど、これは凄いですね・・・」

「そうじゃろう、そうじゃろう！！」

九十九が得意げに言う

「というわけで、早速行くとするかのう」

そう言いながら、九十九は一純を担ぎながら、窓から飛び出したのだった

この後で第20、21夜のような事があり、九十九は新たな生活を始めるのでした

しかし第21夜の一純達が帰った後で、こんなやり取りがあった
そうな

「ねえ？九十九ちゃん」

「なんじゃ？母上」

「純ちゃんって良い子ね」

「ああ、そうじゃな・・・本当に良いヤツじゃ」

「ねえ？九十九ちゃん」

「なんじゃ？母上」

「お父さん欲しくない？」

「ブツ！！！！い、いきなり何を言い出すのじゃ母上！！！！」

「だって、未婚の母っていうのも、世間の目が厳しいっていうじゃないの」

「母上は土地神であろう！！！！」

「あらあら、神様だって結婚するわよ？・・・・・・しかも人間とだって」

「！！！！は、母上ええええつ！！！！！！！！！！」

「あらあら、冗談ですよ」

（・・・・・・・・・・冗談には聞こえなかったんじゃないが）

九十九に、心配の種が一つ出来た瞬間だった。……

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.
.

第22夜：女色々長恨歌 バックスステージ（後書き）

うが、やっぱり終わったあああ……

ほんと、何度も言っけど、何でこんなに長くなっただらろう？

それにしても、伏線みたいなのが出てきてしまいましたね

まあ、出るのは結構先になると思いますが……

今後しばらくは一話完結で行こうと思います

第23夜：決戦のマーチは12時の鐘と共に

今日は、朝から学校中の雰囲気を変だ

4時間目の、現代文の授業で、黒板の文字をノートに写しながら、小夜はそう思った

校内で見かける生徒の大半が、異様にピリピリと張り詰めているというか、異様な緊張感を発している

それは、小夜のいる1ーAの生徒達も例外ではない

クラスの約3分の2が、体育の授業でもないのにジャージに着替えており、ウォーミングアップをしたり、静かに何かに集中していたり、中には祈祷のような事をしている集団もいた

流石に授業中には、そんな事はしてないが、授業が始まって、辺りに充満する異様な空気は変わらないでいた

それは生徒に限らず、教員も同様だった

授業に来る教師、全員ジャージに着替えており、授業のペースもいつもの三割増しで早い

一体何事かと、小夜はクラスメイト達に聞こうとするが、そのクラスメイト達の鬼気迫る表情と雰囲気から気圧されて、とてもじゃないが話しかける事が出来ないでいた

(い、一体今日何があるっていうのかしら………)

小夜は、この異常な雰囲気は寒気すら感じてきた

そして現在 11時45分

その張り詰めたような雰囲気は、最大レベルまで高まっていた

ただの授業だというのに、息が詰まるような感覚だ

そして、何故か授業終了15分前だというのに、現国の教師が授業の終了を告げた

この先生は、時間オーバーする事で有名な先生なのに・・・

そして、おもむろに現国の教師が口を開く

「・・・分かっているとと思うが、授業が早く終わっても、鐘が鳴るまで教室から出る事は許されん。勿論、席から立つのもだ。全ては鐘が鳴ってからだ」

現国教師の言葉に、クラスメイト達が無言で頷く

だが、一人だけ現状を理解していない小夜は、一体何の事だかさっぱり理解できないでいた

そして堪らず、その手を上げる

「先生、今日は朝から学校の様子が妙なんですけど、今日は何かあるのですか？」

それを聞いた現国教師は、一瞬驚いた顔をしたかと思うと、小夜の顔を見て、ああ、と納得したように頷いた

「高倉は、まだ編入してきたばかりだからな・・・覚えておいた方がいい」

そう言いながら、先生はチラリと時計に目をやる

現在 11時50分

「この学校は、半月に一度、12時キツカリに・・・・・・戦場になる」

先生のその言葉に、クラスメイト達が一斉に頷く

「戦場・・・・ですか？」

その言葉の意味を理解できない小夜の頭には、？マークが3つ程浮かんでいる

「そうそう、なんせこの日の為だけに、陸上部に入って体を鍛えてるヤツもいるからな」

クラスメイトの男子の1人がそう言う

その声に、周囲の生徒達も「そうそう」と同意の声を漏らしている

すると、別の男子生徒が話しかけてくる

「でも、いくら体を鍛えても、運がなくちゃ駄目っていう、かなり

の難関なんだよ」

その生徒の顔は心なしに沈んでいる

「・・・それで、結局何かあるんですか？」

ハッキリとした回答が帰ってこないのが、小夜には未だに状況が掴めない

現在11時54分

「それじゃあ、折角だから一から説明してやろう」

現国教師はそう言うのと、黒板の前に立つ

「この学校にはな？半月に一度『食堂クジ』というのが発行される」

「食堂クジ？」

謎のワードの出現に、再び小夜の頭に？が浮かぶ

「そう、食堂クジだ。このクジはな？食券を買った先着1000人にくじ引き券が配布され、食券を渡す時に一回だけ、専用のガラガラを回すんだ。そのガラガラには99個のハズレと1個の当たりが入っている。ハズレの場合は、普通に買った食券のメニューを渡される・・・そして当たりを引いた場合は・・・」

「ひ、引いた場合は？」

小夜は、緊張からゴクリと唾を飲み込む

「別部屋に案内され、買った食券のメニューの代わりに超豪華・特製メニューを味わう事ができるのだあああああつ!!!!」

教師は高らかに絶叫する

「たった500円前後で、普通じゃ食べれない料理を食べれるかもしれないとあって、この食堂クジの日には、食堂の利用者数が普段の数倍に跳ね上がるんだ」

確かに、それなら参加しないよりも、した方が絶対にいい

「ちなみに、前回当たりを引いたのは2年の佐倉っていう先輩だったらしいんだけど、あまりの嬉しさに気絶しちゃったから、結局その先輩の後ろに並んでた御崎っていう先輩に権利が移っちゃったんだって」

小夜の後ろの席の女生徒が、そう教えてくれる

「ちなみに前回のメニューは満漢全席だったらしいぞ、くうくう!!羨ましい!!!!!!」

先生が教卓をドンドン叩きながら、悔しそうに嘆く

小夜は、知ってる人間の運命の悪戯に、少々哀れみを感じる

そして時間は11時59分

この学校が戦場になるまで、あと一分

「……さて、おしゃべりはここまでだ。チャイムが鳴った瞬間、自分以外の人間は全て敵になる」

先生のその言葉に、教室内に再び緊張が走る

正直、毎日一純の美味しい料理を食べている小夜には、たいして興味のあるイベントではない

それに、興味本意だけで余計な体力を使うのもくだらない

そんな気配を察したのか、先生が小夜に顔を向ける

「高倉、良い事を教えてやるぞ?」

先生の言葉に、小夜の頭に三度目の?が浮かぶ

「……食堂クジのメニューを作っているのは、お前の兄貴だぞ?」

先生がそう言った瞬間、四時間目終了を伝える、12時の鐘の音と、学校中から聞こえてくる雄たけびが、小夜の耳に響いたのだった

そこは、まさに戦場だった

男も女も、先輩も後輩も、教師と生徒も、そこでは何も意味を成さなかった

廊下は、夢破れた者達の亡骸で溢れており、それはまさに死屍累々、戦場の如くだった

そんな中で、物凄い勢いで、人の波を掻き分けて進む者がいた

そう、小夜である

「おりゃああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

文字通り、目の前の人達を薙ぎ倒して進む小夜に、他の生徒達は戦慄を覚えた

そんな小夜の突撃を止めるべく、野球部、空手部、柔道部、相撲部の体育会連合が、一斉に小夜の前に立ち塞がる

『ここでお前を止めなけりゃ、俺達に明日(超豪華メニュー)は無
い……』

連合の皆さんが、声をそろえて叫び、小夜目掛けて突進する

超重量級の面々が、一斉に襲い掛かってくる光景は、一般の生徒から見れば、まさに恐怖だ

しかし小夜の場合は、勿論違う

「邪魔よ!」

小夜は襲い掛かってくる連中の喉元、鳩尾、股間と、的確に急所だけを狙って、問答無用の一撃を浴びせていく

そんな恐怖の一撃に、うめき声も上げずに気絶していく、連合の皆様方

しかし、攻撃を繰り返していく小夜の背後に忍び寄る影があった

メガネと白衣の集団が、大きなコンテナのようなを運びながら近づいてきていた

「ふふふ・・・運動部達は困り過ぎません、勝者は我々科学部です!ミサイル一斉発射!まとめて吹き飛ばしてしまいなさい!」

部長らしき人が号令をかける

だが、コンテナからミサイルは何時までたっても発射される気配が無い

「どうしたのですか!?早くスイッチを・・・」

部長が振り返ると、コンテナの上で仁王立ちする、小柄なツインテールの少女の姿があった

「・・・先日、わしの背中に、みさいるとやらを撃ち込んだのは貴

様らか」

ツインテール少女……勿論、九十九だ

九十九は、額に血管を浮かべ、科学部の方々を見下ろす

まさに怒り心頭と言ったところだ

既にスイッチを持っていた部員は、地に沈んでいる

「ま、待て！！話せばわか」

メキヨ

言葉を全部言い終わる間も無く、顔面に九十九の蹴りがめり込む
部長

「一純の料理も魅力的じゃが……とりあえず、貴様らを血
祭りに上げてからじゃ！！」

科学部の皆さんに、死刑宣告が下される

戦場は、更に混沌を極めるのだった

その頃食堂では、一純と食堂スタッフの皆さんが、お客さんの到着を待っていた

「………来ないですね、人」

一純が、スタッフのおばちゃんに呟く

「来ないわねえ、人」

おばちゃんも、同じように呟く

何時もなら、すでに食堂は人で埋め尽くされている時間だ

だが、お客さんの数は、まだほんの少しだけだった

クジの当たりもまだない

ちなみに、一純が何故、こんな時間から食堂に入れているかという

それは半月に一度、調理実習の授業を利用しているからである

ぶつちやけ、料理のスキルレベルが高すぎる一純では、手を出してしまえば、逆に他の生徒の実習にならないので、授業ではやる事が無いのだ

そこに目をつけた凜が、この時間を無駄にしない為と、食堂の売り上げ向上のために、食堂クジを発売したのである

凜の目論見は、見事に成功し、食堂クジの日の食堂の売り上げは、飛躍的に伸びたのだった

だが、今日に限って人がサツパリ来ない

「こんな日もあるんですかね」

「そうだねえ、こんな日もあるのかもしれないねえ」

アハハハと二人で笑っていると、不意に食堂の入り口のドアが開く

「よしよし、まだ人は来ていないな？」

入ってきたのは、どうやら教師のようだった

確か、1年の現国の先生だったと思う

その先生を先頭に、30人ばかりの人が入ってくる

「まだクジは余ってるか？」

先生が一純に話しかける

「はい、今日はなかなか人が来ないんで、まだまだ余ってますよ・・・
・・・ところで、今日は何かあったんですかね？」

すると先生はニヤリと意味ありげに笑う

「まあ、作戦勝ちというヤツだ」

「？よくわかりませんが、とりあえずクジをどうぞ」

そうやって先生にガラガラを回させる一純

「よっしや！！今日こそは！！」

意気揚々とガラガラを回す先生

コローン

『はずれ』

「……………」

固まる先生

「ハズレですね、ではまた今度」

「ノオオオオオオオオオオツ！！！！！！！！！！」

結局、入ってきた30人には当たりはなかったという

「・・・食堂から、客足が異様に少ないと連絡があつて来て見れば・
・・・」

凜は、暴れまわる小夜と九十九を見ながら、頭を抱える

「・・・仕方が無い、野洲貝やすがい!!」

凜が叫ぶと、黒子が一人、音も無く現れる

「生き残ってる生徒・職員達を、奴等とぶつからないルートで誘導してやれ」

「御意」

凜から指令を受けると、野洲貝は一瞬で消える

凜はそれを見届けると、視線を再び二人に戻す

このまま行くと、いずれ他の集団ともぶつかってしまふ

そんな事になれば、食堂の運営費が赤字になってしまふ恐れがある
「どうしたものか・・・」

いつもなら、力づくで取り押さえるのだが、今回は2対1、少々
分が悪い

「仕方ないな・・・おい!!そこの二人!!」

凜は、生徒達を薙ぎ倒す、小夜と九十九に向かって呼びかける

すると、その手を止め振り向く二人

「何よ凜、邪魔しないでよ!!」

「そうじゃぞ、わしの復讐を邪魔するでない!!」

何だか、九十九の方は、こちらの考える理由で暴れてるワケでは
ないようだが

「良い事を教えてやる!!お前達が暴れてる間に、クジは完売間近
だ!!そんな事をしていたら売切れてしまっぞ!!」

「なんですって!?!」

「なんじゃと!?!」

勿論、嘘である

「近道を教えるから、ついて来い」

こうなったら、他の生徒とぶつからないように二人を誘導するしかない

そんな凜を先頭に、倒れる生徒を踏みつけながら、三人は廊下を走って行くのだった

・ ・ ・

一方食堂

「ようやく客足が出て来ましたね」

先程の30人を皮切りに、続々と客が入り始め、現在70枚ほどのクジが出たが、未だに当たりのクジは出ていない

もしかすると、今日はこのまま当たりは出ないかもしれない

「もし、当たりがでないまま、ラストオーダーまで時間が来たらどうしましょう?」

一純がおばちゃんに尋ねる

「そんなときは、あたしたちスタッフで処理するさ!」

そういつて豪快に笑うおばちゃん

まあ、作った一純としては、美味しく食べてもらえれば良いのだが
すると

バタアアアアアアン!!!

大きな音と共に、食堂の入り口が開く

何事かと、一純が入り口を見ると、小夜・凜・九十九の三人が、
息を切らせて立っていた

「兄さん! 何で今日のコレの事を教えてくれなかったんですか!
! 一言いつてくれれば、もっと早く来たのに!」

「いや、だってお前弁当じゃないか………言っておくが、食
券を買うなら弁当を食ってからじゃないと許さないからな」

一純の言葉に、小夜は雷に撃たれた様にショックを受け、その場
に倒れこむ

「一純の作った弁当を食べる分、良いじゃろうが。おい、一純!! わしにもクジを引かせる!!」

九十九はそう言うと、定食の食券を買い、一純に渡す

「はい、確かに。じゃあクジをどうぞ」

そう言って九十九にガラガラを引かせる

九十九はレバーを掴むと、思いっきり回しだす

カラン

『は・ず・れ』

「……………またどうぞ」

「ぬがあああああああ!……!……!」

そのまま地に伏せる九十九

「凜も引くか？」

一純は、凜にも尋ねる

「いや、私が引いて当たりが出てしまったら、それこそ今日は赤字

だろっ？名残惜しいが、今日はやめておこっ」

そう言って、凜は辞退する

本当に学校運営の事を考えてる、立派な発言だ

そうになると、このままでは当たりがでないまま営業が終わってしまっ

「なら、わしがもう一回引く」

「その定食を食べ終わったら良いですよ」

小夜と九十九は、泣きながら、弁当と定食を口に運んでいる

食べ物に関しては厳しい一純だった

そう言っていると、また入り口のドアが開く

「あゝ、お腹すいたゝ。そろそろクジのお客もいなくなっただかしらね」

そう言って入ってきたのは、一純の担任の瀬尾 南だった

どうやら、クジ目当てではなく、普通に昼食を取りに来たらしい

「瀬尾先生は、クジに興味は無いのですか？」

入ってきた瀬尾に、凜が尋ねる

「あはは、まあね。どうせ当たらないから、人の減った時間帯を狙って来てるのよ」

そう笑いながら、瀬尾は味噌ラーメンの食券を買う

すると一純は、食券を受け取ると、引き換えにくじ引き券を渡す

「今日は珍しくクジが余ってるんですよ。よかったらどうぞ」

予想外の出来事に瀬尾の目が丸くなる

しかし、その顔もすぐに笑顔になる

「まあ、当たらないでしょうけど、いつちよやってみますか」

そう言って腕まくりをする瀬尾の前に、一純はガラガラを置く

「うりゃー!!!」

瀬尾はレバーを握ると、思いっきり回しだす

その勢いは、レバーをも引き抜かんばかりの勢いだ

と、思ってたら

バキン

「……あれ？」

引き抜けなかったけれど、へし折れてしまった

「一体どれだけの力で回したのだろうか」

しかしガラガラは慣性の法則で、まだ回り続けている

「ありやく、ごめんね一純君。ガラガラ壊しちゃった」

瀬尾は申し訳なさそうに一純に言う

「結局、今回は当たりなしですか……」

残念そうに、凜が溜息を吐く

何より、今回の売り上げの少なさを気にしているらしい

だが、一純のほうは、視線をガラガラの方に向けている

そして、フツと顔に笑みを浮かべると、二人の顔をに視線を移す

「気にするな凜、少なくとも料理を無駄にせず済んだらしいぞ」

そう言って、ガラガラを指差す一純

一純の指差したガラガラの下には、玉が一つ転がっていた

一純はそれを、ヒョイと拾い上げる

「おめでとつございます先生、どうやら『当たり』らしいです」

一純は、『当たり』と書かれた玉を瀬尾の目の前に持ってくる

「・・・・・・・・・・へ？」

瀬尾の目が、先程以上に丸く見開かれる

回りを見ると、食事をしていたほかの生徒や教員も、こちらを見て目を丸くしている

勿論、小夜と九十九もだ

「先生、おめでとうございます」

一純は再び、瀬尾にお祝いを述べる

「今回のメニューは一純特製・フランス料理フルコースになります」

冷静に言葉を続ける一純に対して、瀬尾の方は、今だ信じられないようで、凜に向かって「え？これってドツキリ？」と尋ねている

「ドツキリじゃありませんからご安心を。生徒会が保障いたします」

凜はそう言うと、瀬尾を一純に引き渡す

「それじゃあ一純、先生を料理のある別室に」

「了解・・・・・・・・それはそうと先生、昼休みも結構少ないですけど平気ですか？」

その声で、ハッと我に返る瀬尾

「大丈夫！！！自習にするから！！！」

興奮ぎみに、そう言う瀬尾

それっていいのだろうか、教師として

「……………はあ、それじゃあ案内します」

一純は、呆れ気味にそう呟くと、瀬尾をエスコートしながら別室へと連れて行くのだった

二人がいなくなつて数秒

食堂では、凜と食堂スタッフ以外の全員が、力尽きたようにガックリと倒れていた

まさに「無欲の勝利」というやつを目の当たりにした瞬間だった。
・
・
・
・

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.
.

第23夜：決戦のマーチは12時の鐘と共に（後書き）

ここでお葉書の募集～

ただいま、レストロ アルモニコでは

『なぜなに アルモニコ』で読み上げるお葉書を募集しております～
キャラクターへの質問などを、評価ではなく、感想として記入し
て送ってください～

例)

一純の好物は何？

八尋は普段何をしてるの？

みたいな感じです

それではお待ちしています～

第24夜：トロイメライを聞きながら・・・ 1番

教師・・・

それは教えを請いに来る、迷える子羊達を導く求道者

それは慈愛の心に満ちた聖職者

・・・というワケではない、決して

教師だって人間である

確かに、迷える生徒達を導くという使命はあるが、決してそれだけではない

教師にだって迷いがあれば、煩惱だってある

教師という存在は、聖人君主ではない

特に、現代社会における教師というのは、それが顕著になりつつある

己が欲に囚われ、教職者として有るまじき行動を取る者が増えつ

つあるのだ、悲しい事に

まあ、それがどのような行動なのかは、あえてこの場では語るまい

だがしかし、そのような行動に走った者がいるからといって、全ての教職員がそのカテゴリーに分類されるかというと、断じて否である

むしろ、約8割程の教職者は、真面目に、それでいてノホホンと日々を暮らしているはずだ

幸いな事に、一純達の通う、この宮古前高校の教職員も、その約八割の中に食い込んでるようで、日々をノホホンと過ごしている

しかし、そんなノホホンとした教職員達の中に、生徒達から尊敬と畏怖の念を込め、こう呼ばれる者がいた

『暗黒生物室の主』と

昼休みも半分を過ぎた頃

2-Cの教室にて、佐倉はまるで百物語の九十九話目を話す老婆のような顔で、目の前の一純に詰め寄っていた

「いずみん、考え直すんだ。何も自分から、あの魔窟に行く事はないじゃないか！！あそこに行ったが最後、バツタ人間や、脳みその見えるサイボーグみたいなのに改造されちまうぞ！？」

そう言いながら、一純の両肩をガシツと掴む佐倉。その目つきは真剣そのものだ

「心配するな、あの先生はお前が思ってるような人じゃない」

その佐倉の様子に、一純は少々気圧される

「嘘だつ！！」

恐ろしい形相で、即座に佐倉が言い返す

何か一瞬、手に鉋が見えた気がする

「あの先生が巢食ってる生物室の前を通った奴が、扉のガラス越しに、蠢く巨大な触手を見てるんだぜ！？他にも、被ったら吸血鬼になりそうな石仮面を生徒に被せようとしてたし、たまに生物室から青い煙でてるし・・・」

石仮面を被った生徒のその後が気になるものだ

そう思いながら一純は、肩を掴まれたまま、席から立つ

「そうだとしても、呼び出しを無視するワケにはいかないだろうが。いいから、手を離せ」

しかし、佐倉に手を弱める気配は無い。逆に強くなってる気がする

「そうはいかないぜ！！友人を見す見す改造人間にするわけにはいかない！！おい！！他のみんなも手伝え！！いずみんを教室から出すな！！！！」

拳句の果てに、他の連中にまで協力を要請し始めたぞ、この野郎は

そして、その要請に応じて、ワラワラと集まってくるクラスメイ卜達

なんだか、バーゲン品に群がる奥様達と、人間に群がるゾンビの群れの2つが脳裏に浮かんだ

おそらく、佐倉のやつは真面目に心配しての行動だろうが、他の連中は十中八九、面白半分だろう

だが、もう半分は一応心配してるのだから、無下にする事は出来ない

仕方が無い、プランBで行こう

一純はどこからともなく、スウッとメガホンを取り出す

「りりりりりりりん！！！！ちょっと用事があるから来てくれない

かあああああああつ!?!」

一純はメガホンを口に当てて、大声で凜の名を叫んだ

ガラガラッ!!

「呼んだか?一純」

コンマ1秒で凜が2・Cの教室にやってくる

イトマンもビックリのスピードだ

「ちよつと先生に呼ばれてるんだが、他の連中がが邪魔して行けないんだ・・・」

一純は入ってきた凜に、困ったようにそう告げる(半分演技だが)

それを聞いた凜の目つきが、生徒会長モードに入る

この状態の凜には、もう何を言っても無駄だ

「それはいけない、先生の呼び出しに遅れては、双方に不利益を被る」

そう言いながら、背後から木刀を取り出す凜

「ちよ!?!ちよつと待て会長!?!お前いずみんなが誰に呼び出されるのか分かって・・・」

殺気を感じた佐倉が、凜に物申す

だが、既に凜は聞く耳持たず

「問答無用！！道を開ける！！」

そう言つと同時に、一純に群がる生徒達を蹴散らしていく

この光景はどこかで見た事がある

・・・ああ、そうだ

ピ　ミン達が巨大生物に蹴散らされる風景って、こんな感じだったなあ・・・

あと、俺はもう脱出したんだから、もう暴れなくても良いんじゃない・・・

暴れる凜を横目に、いつの間にか脱出した一純はそう思った

・・・まあ、面倒くさいから放っておくが

まるで、某大乱闘のゲームにて、300%の状態でホームランされたかのように吹っ飛んでいくクラスメイト達を尻目に、純は一人、自分呼び出した教師の待つ生物室に向かうのであった

特別教室というものは、授業や部活動以外では、そうそう立ち寄る機会はないだろう

ましてや昼休み

こんな時間に特別教室を使用するのは、放送室を使う放送部くらのもので、他の生徒は大抵、教室か部室棟にいる

授業で使うとしても、生徒が集まりだすのは開始5分前だ

……まあ、何を言いたいのかというと、現在生物室付近にはネズミ一匹いないという事だ

だが、この付近に人がいないのは、今言った事が原因ではないだろう

そうでなくても、この場所に近づく人間はあまりいない

理由は、先程佐倉が言った通りだ

この生物室で一人の生物教師が、怪しげな実験を行ってるからである

何故、一純がそんな物騒な所に来る羽目になったかというところ

先程も言っていたように、この生物室の主から呼び出しを喰らったからである

勿論、理由は分からない

まあ、一応この主とは顔見知りなので、そんなに構える必要はないのだが

一純は生物室の扉の前に立つと、軽くノックをする

「小早川先生、高倉一純です。入っても良いですか？」

「どうぞ〜」

すると、すぐに中から返事が返ってくる

その声を聞き、一純はガラガラと扉を開ける

中に入ると、薬品独特の香りが鼻についた

返事の主は、教師用の実験台の上で、アルコールランプを使いお湯を沸かしていた

白衣にメガネと、いかにも実験します、といった格好をしている短めの髪と中性的な顔つきで、男か女が一瞬分らないが、口元に引いてる赤いルージユが女性を主張している

しかし、ここで騙されてはいけない

「丁度良かったわ、お湯沸かしたから紅茶淹れてくれな〜い？」

その声は、女性の声にしては少々低い

「・・・もしかして、それだけの為に呼んだんじゃないでしょうね、小早川先生？」

疲れたような声で一純が尋ねる

もしそれだけの為に呼ばれたんじゃないあ悲しすぎる

「や〜ね〜、まさかそれだけの為に呼ぶわけないじゃないの。あと名字じゃなくて、名前で呼びなさいって言ってるでしょ？」

ケラケラと笑いながら、小早川はそう言った

「……………はいはい、それで？何の用事で呼んだんですかロン先生」

一純は仕方なく、ロンの言つとおり名前で呼ぶ

小早川 ロン

この生物室の主にしている男性教師である

・・・・・・・・・・・・・・・・まあ、いわゆるオカマといつかなんといつか

つまりそういう人である

二人が顔見知りになったのは今年の入学式の3日後

なんとなくフラフラしてた一純が、生物室の前に来た時、謎の触手に捕獲され泣いていたお団子頭の女生徒に遭遇し、そのまま触手を引きちぎって生徒を救出

元凶を確かめるべく、生物室に乗り込んだ事が馴れ初めだった

どうやらその時ロンは、暇つぶしで適当に作ってた触手が暴走して、非常に困ってたらしく、一純が現れなかったら、口には出せない危険な液体で処理するところだったらしい

それ以来ロンに、触手を素手で引き千切った手腕を気に入られ、ちよくちよく呼び出されているのだが、その度に他の連中が大騒ぎして、先程のような事が繰り返される

いい加減にして欲しいものだ

一純に用事を聞かれ、ロンは思い出したかのように、懐から一枚の封筒を取り出した

「そうそう。ハイこれ、弟からあなたにとって」

一純はロンから封筒を受け取る

「何で先生の弟さんから？」

一純は、受け取った封筒を眺めながら疑問に思う

少なくとも、ロンから身内を紹介された記憶はない

「さあ？弟にあなたの事を話したら、笑いながらこの手紙を書き出したわよ？」

ロンも不思議そうに首を傾げる

何はともあれ、中身を見ない事には始まらない

一純は、封筒を開け、中に入っていた手紙に目を通す

「折角だから朗読してちょうだいよ」

何か、面白い物を発見した子供のように、ロンが言った

「はいはい……え〜っど?」久しぶりだね一純君。今、私は世間の狭さというのを実感しているよ。まあ、そう言われても君には私が誰だかわからないだろう。あの時は名前も言わなかったからね。まず自己紹介をしよう、私の名前は小早川 文一郎、ぶんいちろうこの手紙を届けてくれた論の弟だ。あ、ちなみに兄の本名はロンじゃなくて、論文の論と書いてサトシと『」

「そこはスルーするのが男の甲斐性よ?もし言いふらしたら……
・分かつてるわね?」

サト……じゃなくてロンは紫の液が入ったフラスコを持って一純を睨みつける

「……当然です、ハイ……じゃあ続きを……」まあ、名前だけ聞いても分からないだろう。だけど、私と君は一度だけ会った事があるし、私の方は今でも君にお世話になってるんだよ?もう分かったかな?……それじゃ最後に言おう、麻紀音をよろしくお願ひします『……ああ、もしかして……』

手紙を読み終えた一純の頭に、一人の人物が浮かび上がる

「もしかして、先生の弟さんって、類家エレクトロニクスの研究員ですか?」

そう、麻紀音を作ったという、あの研究者の人だ

「そうよ。……それにしても、一体どこで弟と知り合ったのよ?あの子ったらロクに研究室から出てこないのに」

ロンが興味深深に聞いてくる

「……まあ、色々ありまして」

一純は説明が面倒くさいので、適当にはぐらかす

でも、まさかロン先生とあの人が、兄弟だったなんてなあ……

「それじゃあ、次の授業の準備がありますから、これで失礼します」

そして、一純が帰ろうとしたその時

「待ちなさいよ、まだあたしの用件は済んでないわよ？」

ロンに呼び止められた

「……まだあるんですか？」

「なに言ってるのよ。まだも何も、今のはオマケよ？コレからが本命。……まあ、とりあえず紅茶でも淹れてくれない？」

そう言って、一純にお湯の入ったビーカーを渡すロン

「……ビーカーに入ってるお湯は飲みたくないなあ

渋い顔をしながらビーカーを受け取る一純

「……茶葉は準備室でしたよね？」

仕方なく、一純は紅茶を淹れるべく、準備室に足を向ける

そして後ろを向いた瞬間

プチ

頭にチクリとした痛みが走った

「ちよ〜つと御髪おぐしを拝借するわよ？」

「……抜く前に言ってくださいよ」

抜いた髪を持って笑うロンに、文句を言いながら、一純は準備室へ消えていった

そしてしばらくして、紅茶の入ったカップを持って、一純が戻ってくる

「淹れてきましたよ」

「どつも〜」

そういつてカップを受け取るロン

「……ところで、用事って一体なんですか？まさか本当にこれだ

けじゃ……」

「ああ、さつき髪抜いたでしょ？あれよ」

ズズッと紅茶を啜ってロンが答える

「はあ………何でまた？」

当然の疑問だろう

何のために自分の髪を抜かれたのか、普通は気になるものだ

「今はナイシヨよ。………そうね、一週間位したらまた呼ぶから、その時に教えるわ」

怪しい……

一週間あったら大抵の事は出来るからなあ……

「……俺の髪で、何か変な物作る気じゃないでしょうね？」

不安そうな顔で一純が尋ねる

「アツハツハツハ！まあ、そんなところよ。よく分かったわね」

一純の不安は、不幸な事に的中してしまった

「でも、決して変な物なんかじゃないわよ？」

ケラケラと笑いながらロンは紅茶を啜る

そんな、ロンの笑い声に一純は、一週間後に確実に起きてしまう厄介な出来事に、頭痛を隠す事を出来ずにいるのだった……

t o b e c o n t i n u e d

第24夜：トロイメライを聞きながら・・・ 1番（後書き）

始まりましたよ新シリーズ

この話は、久しぶりに一純メインに書きました

・・・一応主人公だし

女性陣も、凜がチヨコツと出ただけの、珍しい話になってしまいました

たまには良いよね？

その分、次回から新しいメインキャラ出るし・・・

え？ロン先生？

あの人はサブキャラだしw

ちなみに、女性のメインキャラは、次回登場のキャラを含めて、あと3人います

・・・男のキャラが欲しい

第25夜：トロイメライを聞きながら・・・ 2番（前書き）

復活しました

それとごめんなさい

新キャラは、尺の都合上また次回になりました

第25夜：トロイメライを聞きながら・・・ 2番

幸せな時間は過ぎるのが早い。だが、それを待つ時間というもの
は、果てしなく長く感じられる

その逆もしかり

嫌な時間というのは一瞬でやって来るくせに、それはまさに永遠
とすら思える位の責め苦を与えてくれる

今、一純はまさにそんな状態だった

ロンから髪の毛を採取されてからの一週間は、まさに光陰矢の如
し、あっという間に過ぎ去った

こういう時に限って、回りは平和そのもの

小夜は暴れないし、凜も暴れないし、麻紀音も暴れないし、九十
九も暴れなかった

近年稀に見る、極めて平和な一週間と言えよう

この一週間で永遠にループしないものかと、真剣に八尋に相談し
そうになってしまほど平和だった

しつこいと思われるかもしれないが、それ位平和な一週間だった
のだ

だが、その平和の影で一純は、常に心のどこかに不安を抱えていた

これは、来るべき日のための執行猶予なのではないかと

神が用意した、最後の晚餐なのではないかと

そうして、約束の日の放課後

他の生徒もまばらになり、日も傾き始めた頃、一純は一人、生物室へと足を進めていた

勿論、ロンとの約束を果たすためだ

だが、約束を果たすといっても、肝心の内容はサツパリ知らされておらず、分かっているのは、自分の髪で怪しげな実験を行っているという事のみだ

下手をすれば、自分のクローンを作り出されるなんて事も考えられる

いや、あの人の事だから、そんな事で終わるはずがない

遊び半分で、謎の触手生物を作り出してしまっような人だ

きっと自分には想像できないような、恐ろしい実験をしているのだらう

一純はそんな想像を張り巡らせ、戦々恐々しつつも階段を昇る

ついでに説明しておく、この高校は教室棟・教員棟・部室棟の三棟と、第一・第二体育館から構成されており、生物室は教室棟の向かいの、教員棟の三階にある

ちなみに教員棟とは、職員室とその他特別教室が入ってる棟の事を指す

そんな教員棟の最上部、最深層に生物室はあるのだ

そこに巢食って、怪しげな実験を繰り返しているロンは、まさに暗黒生物室のヌシと言える存在だろう

よく学校側もほったらかしにできるものだ

そうして、あっという間に生物室の前に到着する。本当に、こういう時間は短く感じるものだ

今日ここに、一純が来るといふ事は誰にも話してはいない

勿論、小夜達にも

理由は当然、無駄な騒ぎを起こさないためだ

具体的にどうなるか、というのは分からないが、とりあえず騒ぎになるのは間違いない

ただでさえ何が起こるか分からないのに、小夜達まで呼んでしまったら、それこそ何が起こることが

燃え盛っている炎に、わざわざガソリンを注ぐ事はないのだ

一純は扉の前に立つと、そのまま軽くノックをする

「どぞぞぞ!!」

すぐに返事が返ってくる

言つまでも無くロンの声だ

正直、不在である事を期待していたのだが、そうは問屋が降ろさなかつたようだ

一純は、ハアと一つ溜息を吐くと、ガラガラと扉を開き、重い足を引きずるように生物室へと入っていくのだった

一純が生物室に消えて数秒後

廊下の角から、顔を覗かせる影があった

「……甘いですよ兄さん。兄さんの行動は全部お見通しです」

そういいながら小夜は、廊下の角から顔だけ出す

しかも、なぜか四つん這いで

「お見通しも何も、私の盗聴記録を聞いたから知ってるのだろうか」

その上から、凜が顔を出す

小夜の頭に手を乗せて、中腰の状態になってる

「……………それ以前に……………この一週間マスターの挙動は明らかに不審……………疑問に思わない方が不思議」

更に、凜の頭の上から麻紀音が顔を出す

このまま串でも突き刺したら、見事な団子三兄弟の完成だ

ちなみに、麻紀音も凜の背中に手を乗せ、体重をかけているので、一番下の小夜はかなり重い

「……………なんで生徒会は、こつも簡単に部外者の侵入を許すのかしら」

自身に掛かる加重に耐えながら、小夜は遠まわしに二人を皮肉る

「……………追い払おうとはしたんだが、『……………入れてくれないなら……………学食に私の作った料理を混入する』と脅された」

苦虫を噛み潰したような顔で凜が答える

ある意味、自分の料理の酷さに開き直った、恐ろしい脅迫だ

その恐怖を知っている凜に抵抗できるはずも無かった

同じく小夜も、その事で凜を責めることは出来なかった

「……ごめんなさい、苦渋の決断だったのね」

それが現実になってしまった時の、阿鼻叫喚の光景を想像すると、
そうするしかないだろう

「すまない……流石にバイオテロまで防ぎきれぬ自信がなかったのだ……不甲斐ない」

三兄弟の次男と三男に、ズーンと重い空気が押し掛かる

よほど、麻紀音の料理にトラウマを持っているのだろう

「……そんな事より……マスターが対象と接触した模様」

知ってか知らずか、元凶の長男が涼しげな顔で二人に告げる

どうやら、視覚を赤外線モニターに切り替えてるらしく、中の様子までわかるようだ

「……それと……室内に異様な熱源を感知」

麻紀音の目であるカメラセンサーが、キューインと音を立てる

「何かの実験器具じゃないの？」

小夜が麻紀音に聞き返す

まあ、パツと思いつくものなど、アルコールランプ程度の物だが

「……民間施設で扱える実験機器の出せるエネルギー量ではない……少なくとも私のデータ内に、そのような機器は存在しない」

いつも通りの涼しげな表情で、サラリとんでも無い事をいう麻紀音

どうやら生物室内は、予想以上にカオスな状況になっているらしい

「まあ、あの先生にする事だ。普通の実験ではないだろうな」

同じく涼しげな顔で凜が言った

その言葉の中に、何が起ころっても不思議ではない、といったニュアンスが漂う

「しかし、無闇に手をだせば、逆に危険かも知れんしな……」

触らぬ神に祟りなしという言葉もある

「……それはそうだけど、事故が起ころってからじゃ遅いのよ？」

小夜もその事は理解しているのだが、やはりそれ以上に兄の事が心配なのだ

「……………だからこうして監視している……………異常が確認されたら直ちに突入する」

目のカメラから、機械音を響かせながら、麻紀音が言う

「……………それもそうね……………それはそうと、今気づいたんだけど」

「？何だ藪から棒に」

「あのちっちゃい先輩はドコに消えたのかしら？」

そういえば、冒頭から姿が見えない

部外者である麻紀音がいて、あの九十九がないわけが無い

「……………あの先輩の考える事は、私には分からん」

どつやら、凜にも分からないらしく、放置に徹しているらしい

「まあ、それは放っておくとして……………あんた達」

小夜の声が、不意に1オクターブ下がる

これは、小夜が少し怒った時に発せられる、特有の音階である

「・・・何か聞こえませんでしたか？今」

実妹の絶叫とは露知らず、一純はロンに尋ねる

「空耳でしょ空耳。そんな事より、早く来なさいよ」

そう言いながら、ロンが準備室の中から手招きをする

その姿がまるで、あの世から手招きする死神のように見えたのは
気のせいだろうか

そのような事を考えていても、現状は一切変わる事はないので、
一純は仕方が無く、その手招きに応じる

生物室ではなく、準備室を実験の場として使ってるのは、一応教師としての尊厳というか、そういうものの表れなのだろうか

そんな事を考えつつ準備室へと入った一純の目に、予想外の光景
が二つ飛び込んだ

一つは、室内の半分を占めているのではないか、と思うほど巨大な機械だ

先週、紅茶を淹れにきた時は、こんなデッカイ物無かつたはずだ
中央のカプセル状の部分に、色々な部品と大量のケーブルがくっ
ついているその機械は、既に起動しているらしく不気味な重低音を
響かせている

どつやら全てはこの中に詰まっているらしい

そしてもう一つの予想外のものというのは……

「………なんで先輩がここにいるんですか」

一純の目の前には、椅子に座りながら煎餅をかじってる九十九の
姿があった

「あら、あなたのコレっていうから特別に入れてあげたのよ」

そついいながら小指を立てるロン

「よくわからんが、一純との関係を聞かれたもんじゃから、わしの
所有物と答えておいたぞ！」

満面の笑みでそう答える九十九

同じくケラケラと笑いながら煎餅をかじるロン

おそらくロンの方は、からかい半分で作ってるのだろう

「……………それにしたつて、なんで先輩がここに？」

こみ上げる頭痛を抑えながら、一純は九十九に尋ねる

すると、九十九は真面目な顔になり、一純の方を向く

「……………数時間前からなのじゃが、ここから出ておった妙な力に変化を感じてのう、気になって調べに来たのじゃ」

そう言つて、目の前の巨大な機械に目を移す九十九

「それじゃあ先輩は、最初からこの機械の事知ってたんですか？」

九十九の発言に目を丸くしながら、一純が尋ねる

「いや、一週間ほど前から、おかしな気配を感じていた位じゃ、このカラクリの事までは分からなかった」

そう言つて首を振る九十九

九十九のいう事が真実ならば、既にあの時から実験は始まつていた事になる

……………というか、そんな気配を感じながらも一週間放置してたのか、この先輩は

真面目モードを解いて、再び煎餅をかじりだす先輩をジト目で見る一純

「その子のいう事が本当なら、実験終了まであと少しってトコかしらね」

「うおっ!?!」

いつの間にか背後にいたロンに、思わず飛び退いて驚く一純

「何よ、そんなに驚く事ないじゃない」

口を尖らせて不満そうにするロン

音も無く背後に立たれたら、誰だって驚くと思う

「実際のところ、その子を入れてあげたのも、実験の開始時期やらを明確に知ってたからだしね、それにエネルギーの変化も実際に起こってるし」

煎餅をかじりながら手元の資料を眺めるロン

何故九十九がそういう事に気づいたのか、という事はスルーらしい

まあ、こちらとしても面倒が少なくて助かるが

・・・さて、それは兎も角、いい加減に本来の面倒事について、聞いておかねばならぬだろう

「……先生、貴方は一体、なんの実験をしてるんですか？」

真剣な眼差しをロンに向ける一純

少しの沈黙の後、ロンは自分のメガネを軽く上げると、口を開く

「……逆に、貴方はなんだと思う？」

逆に聞き返され、一純は考え込む

自分の髪が使われてるという事は、クローンを作る事くらいしか
思い浮かばない

正直、一純にはそれ位しか思い浮かばなかった

「俺のクローン……とか？」

正解ではないだろうが、正直にそう口にするしかなかった

思ったとおり、それを聞いたロンの意地悪そうな笑みから、それ
が正解では無い事がすぐにわかる

「……30点つてどこかしら？生物っていうところは正解ね」

そう言いながら目の前にホワイトボードを引っ張ってくるロン

そして、黒いマーカーを手に取ると、キュキュキュッと文字を書
いていく

「私が……生み出そうとしてるのは……これよ」

ホワイトボードに『解答』を書いたロンはマーカーにキャップを
して、テーブルに置く

その『解答』を見て、一純はただ啞然とするしかなかった

それは、あまりに非現実的で、あまりに無茶苦茶なものだった

「あら、貴方が思ってるほど無茶苦茶な事じゃないわよ？」

あんぐりと口を開け呆然としている一純を見て、クスクスと笑い
ながらロンが言う

「で、ですけどこれって……」

一純が指差すホワイトボード

そこには大きな文字で『キメラ』の三文字が書かれているのだっ
た……

t o b e c o n t i n u e d

第25夜：トロイメライを聞きながら・・・ 2番（後書き）

突然ですが

『キャラのモデル暴露』のお時間です

キャラの外見などのイメージが分かりにくい方のために（多分大半の方々）、レストロ アルモニコのキャラのモデルを紹介していきますと思います

殆ど見た目のイメージですので、中身は別物です（例外があります
が・・・）

原作を知らない方はスルーして下さい

それでは行きます

キャラ名：モデル名（作品名）

高倉一純：無し

・・・いきなりこれですか

まあ、この主人公は特徴が無いのが特徴ですから

イメージは皆様にお任せします

高倉小夜：遠野秋葉（月姫）

ツンが無くなってデレしか残ってない秋葉のイメージです

類家凜：後期の青山素子（ラブひな）

・・・のイメージで書いてたつもりなのになあ

何か違う方向に走り始めました

麻紀音：R・ドロシー・ウェインライト（ビック・オー）

中身は全然違いますけどね

佐倉正臣：矢張政志（逆転裁判）

一緒なのは、外見とアホなところ

事件の裏に居たりはしません

西明寺九十九：アル・アジフ＋霸道瑠璃（デモンベイン）

外見も中身も、この二人を足して二で割った感じです

モデルがあるのはこのくらいです

他のキャラは、その場で適当に考えました

まあイメージっていうのはあくまでイメージ

一度生まれたキャラは、モデルとなったキャラとは全く別物

他に二人と居ない、只一つの存在として、この小説の中を暴れまわるのですね

第26夜：トロイメライを聞きながら・・・ 3番（前書き）

今までで、最長です

第26夜：トロイメライを聞きながら・・・ 3番

巨大な機械が低い唸り声を上げ続ける生物準備室内にて

一純は、ロンの予想だにできなかった解答により、思考が停止する色々と突っ込むべきところが多すぎて、頭の思考回路はショート寸前、今すぐ会いたいよ状態だ

そうやってしばらく固まっていると、突然、大腿部に鋭い痛みが走る

何事かと振り向いてみると、九十九が一純の大腿部を、思いつきり^{つね}抓り上げていた

・・・先輩、抓るって攻撃は、どんな格闘家も耐えられない唯一の攻撃だって知ってましたか？

「やかましい。さっきから電源が切れたようにポケットとしておるから、目を覚ましてやったんじゃ。ありがたく思え」

そう言って、ようやく手を離す九十九

できれば、もうちょっとソフトに目覚めさせてくれたら嬉しかったんですが

「・・・そんな事よりも一純、”きめら”とは一体なんじゃ？猫か何かか？」

そう言いながら、真顔で首を傾げる九十九

少なくとも、こんな巨大な機械を使わずとも猫は生まれます

「俺の知ってる限りじゃ、確かギリシヤ神話に出てきた、ライオンの頭と山羊の胴体、蛇の尻尾を持つ怪物だったと思うんですが・・・」

そう言って、ロンへ視線を移す一純

「こんなもんでどうでしょう？」とアイコンタクトで尋ねてみる

「まあ60点ってとこね。でも、あなたの想像してるのは多分、キメラじゃなくてキマイラのほうね」

そう言ってアハハと笑うロン

「まあ確かに、キメラとも言うけど、普通、私達研究者が言うキメラとは違うわね」

「・・・これ以外のキメラなんて、ドラクエに出てくる奴しか知りませんけど」

「ああ、あれもまあ正解って言えば正解ね、アツハツハツハツハ！！」

一人だけ理解し、一人だけ笑うロン

ぶっちゃけ一純には、サッパリ分からない

勿論、一純の隣で、目を点にしてる九十九にも、何が何だかだ

「先生、一人だけ納得してないで、いい加減ちゃんと説明してください」

「そうじゃぞ！！わしにも理解できるように簡潔に説明しろ！！」

劣等生二人が、先生に説明を求め

「最近知ったことだが、先輩は、歴史や、術以外の事に関しては、ちよつと頭が弱いらしい」

まあ、実質、最近生まれたばかりだし、仕方が無いと言えば、仕方が無いが

それにしたって、教えを請う側なのに偉そうなのは、いかなものだろう

ロンは、そんな九十九を気にする様子も無く、教鞭をとる

「はいはい、それじゃあキメラについての特別授業よ。まずキメラっていうのは、生物学において、同一個体内に異なつた遺伝情報を持つ細胞が混じっているってことなのよ。名称の由来は、さつきー純ちゃんが言った通り、ギリシャ神話に登場する伝説の生物、キマイラから来てるわね。近年は『キメラ分子』『キメラ型タンパク質』のように『由来が異なる複数の部分から構成されている』っていう意味で使われることもあるわ。ドラクエのキメラも、鳥と蛇の混ざつたような外見から、キメラという名前がついたのよ」

話しながらも、ホワイトボードに書き込んでいくロン

「どうやら、教師としての能力は問題ないようだ」

すると、不意に九十九から、制服の裾を引っ張られる

「どうしました？先輩」

九十九は難しそうな顔で首を捻る

「……あやつは、一体どの言葉で話しておるのじゃ？鳥と蛇しか分かる単語が無かったぞ」

「……だそうです先生。この先輩にも理解できるように、目的だけ掻い摘んでお願いします」

正直、自分も半分位しか理解できなかった

「ま、そんな事だろうと思ってたわ。……まあ簡単に言えば、いろんな動物の遺伝子を組み合わせ、新しい生物を生み出すって事かしらね」

……そんなとんでもない事に、俺の髪の毛を使ったのか

軽い調子で言ってますけど、そんな事が出来るとしたら、ただ事ではない気がするんですが……

「まあ、成功したらの話だけだね」

そう言って、もう何枚目かわからない煎餅を齧るロン

「その口ぶりじゃと、まだ成功はしてないようじゃのう」

九十九が指摘する

うん、と唸りながら、租借していた煎餅を飲み込むロン

「までも何も、これが一回目なんだから。どうなるかなんてサツパリね」

何とも無責任な発言だ

「ぶっちゃけこの実験はね？弟の依頼で、この馬鹿デカイ機械の試験運用のためのものなのよ。ほら、弟は機械には強いんだけど、生物を扱う分野が苦手じゃない？だから、あたしに監修を頼んで、機械運用を任せたのね。全く、ナモノ扱うの苦手なくせに、キメラ製造マシンなんて物作るなんて、あたしはどうかと思うんだけどね!!」

なんか最後の方は愚痴になって来ていたのだが・・・

「それで、俺の髪の毛以外に、どんなモノを放り込んだんですか？」

聞きたくは無いが、心の準備も兼ねて、聞かねばなるまい

「そうね。確か、ライオン、羊、蛇、ワニ、大鷲・・・その他もろもろ?」

聞けば聞くほど、不安になるラインナップだ

特に、その他もろもろの辺りが、特に怖い

「おお！分かったぞ！！つまり、様々な動物と合体した一純が生まれるのじゃな！！！」

九十九が、納得したように、恐ろしい想像を働かせる

しかも、なんか瞳がキラキラしてる

こんなところで、無邪気さを見せられても、微塵も嬉しくないぞ
ていうか、何でそんなに楽しそうなんですか？

九十九の発言を聞いて、ロンもケラケラと笑い声を上げる

・・・先生も、笑わないでください

「アッハッハッハ・・・まあまあ、そう言わないの・・・
でもね、ぶつちやけこの実験、成功する確率かなり低い
わよ」

そう言いながら、手元の資料に目を移すロン

「そうなのか？」

残念そうにシユンとする九十九

「そうね・・・機械の仕組みは知らないけど、生物学的にそんな
無茶苦茶な事は無理なもの」

謎の触手生物を作り出した人が言う台詞ですか

「それとコレとは話が別。それに、遺伝子いじくるのって良い事だとは思わないしね。生き物は自然のまま生まれてくるものじゃない？それを、人間の勝手になにかしようなんて、おこがましいじゃないの」

真剣な顔をしてロンが語りかける

確かにその通りだと思う

同じ生物である人間が、他の生物をいじくるなんて、神をも恐れぬ所業だと思う

本来、それは人の踏み込んではいけない領域なのだろう

しかし人間は、その留まる事ない欲求を、抑えるという事を知らない

「まあ、どちらにしても、結果は神のみぞ知るってヤツね」

そうして、ロンが機械の方に目をやった瞬間

ビイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイツッ!!!!!!

けたたましいサイレンの音が準備室内に響き渡る

ロンが瞬時に、機械のコンソールに飛びつく

一純と九十九は、いきなりの事にポカンとしている

「な、何事じゃ？一体、このやかましいのは何じゃ？」

普通に考えたら、機械に異常が起こったと考えるのが妥当ですね

「……全くその通りね」

コンソールのキーボードを、高速で叩きながらロンが言う

「体の構成を固定する最終段階になって、出力が低下して来てるわね。それで出力を上げようと、機械本体にかなりの負荷がかかってるわ……このままじゃヤバイわよ」

キーボードを叩くロンの顔に、焦りが見える

本格的に危ないらしい

「……具体的にはどうなるんですか？」

一純は恐る恐る、ロンに尋ねてみる

「そうね……少なくとも、この部屋が消し飛ぶのは保障するわ」

そんな保障されても、ちっとも嬉しくない

警報の方も、更にその音の激しさを増していく

(・・・先輩、何とか食い止められないですか?)

ロンに聞こえないように、九十九に耳打ちする

(・・・制約がなかったら楽勝じゃが、今の状態では難しいのう・
・時間が足らん)

ちなみに九十九は、八尋の手によって、学校にいる間は力に制約が掛けられているのだ

(札の力で、脱出する事くらいならスグに出来るぞ?)

そう言っただけから札を取り出す九十九

現段階では、それがベストな答えだろう

「先生、すぐに脱出を」

そう言いながら、ロンのそばに駆け寄る一純

しかし、ロンは静かに首を振った

「一純ちゃん・・・遺伝子いじくって、人間の勝手に作られる生物でもね、今生まれようとしてる大切な命だっけ事に変わりはないわ・
・・・・ましてや、私らの勝手に生まれようとして、そして今消えようとしてる・・・・そんなのって悲しすぎるじゃないの・
・・・・なのに、そのあたしが簡単に諦めるわけにはいかないわ」

そう言って再びキーボードに向かうロン

どつやら、ロンの意志は固いらしい

一純はそれを聞くと、フウと溜息を吐く

「仕方ありませんね、でも本当に危なくなったら、先生を担いででも連れて逃げますからね」

そしてそのまま、そばにあつたパイプ椅子にドカッと腰をかける
一純

その一純の行動に、ロンは驚いて思わず、自分の手の動きを止める

「な！なに言ってるの！！あなたはサツサと退避しなさい！！」

確かに、一歩間違えれば、大怪我では済みそうにない。

だが

「俺の遺伝子を持つてるって事は、俺の子供みたいなもんでしょう？親が子供残して逃げるわけ無いじゃないですか」

一純は冗談めいたように、そう答える

それに、さつき先生が言ったように、どんな形であれ、命が生まれてくるのを諦めたくはない

「勿論わしも残るぞ。下僕一人残して、主が逃げるわけにいかないからな」

一純の後ろで、煎餅を齧りながら九十九が言う

背後にあった、準備室の扉が吹っ飛ばされる

何事かと三人が振り向くと、怒涛の勢いで、小夜・凜・麻紀音が突入してきた

何故か、小夜と凜は涙目になってる

「うう……兄さん、私、感動しました!!」

「実験は成功させて見せます!!麻紀音!!」

「………了解」

色々と突っ込みたい事はあるのだが、三人は有無を言わさぬ勢いで畳み掛けてきた

「………問題は出力だけ？」

ロンの近くに麻紀音が近づいていく

「……そうね、やっぱり校内の電源だけじゃあ間に合わなかったわね」

「………そう」

ロンの言葉を聞いて麻紀音が、機械本体に接続してあるコードを、一本引っこ抜く

「ちよっ！！何やってるのよあなた！！そんな事したら・・・」

言いかけた言葉をロンが止める

麻紀音が、自分の体から伸びる一本のコードを、機械本体に差し込んだのを見たからだ

その光景に、ロンは目を丸くして驚いている

「心配無用ですよ。麻紀音は、先生の弟さんの娘ですから」

ロンに、一純が教える

「そう、あの子がね・・・」

話くらいは聞いた事があるのか、納得したように頷くロン

そして、ハツとした様に、モニターに目を移す

「良かった、出力が安定してきたわ。これでこの子も、無事に生まれる事ができるわ」

ホッと胸を撫で下ろすロン

流石、バレたら逮捕されるような技術を、使ってるだけある

しかし、一純はまだ不安な顔をしたままだ

「・・・どうしました兄さん？顔色が悪いですよ」

思わず小夜が尋ねる

それもそうだ

だって……

「……まだ警報が鳴ってるままなんだが」

……

「……そういえば」

「耳が慣れてしまっただけで忘れていたが、警報の方は、いまだにピーピー鳴り続けている」

慌ててモニターに目を戻すロン

そして、顎が外れたように、ガクンと口が開くロン

心なしか、目も点になってる

そして、ギギギと軋んだ音を立てながら、こちらに振り向く

「……………出力が上がりすぎて、臨界点を突破しそうになってるんだけど」

青い顔してロンが答える

モニターには、メーターが振り切れてしまっている様子が映し出されている

やりすぎです、麻紀音さん

「……………抜く？」

振り向きながら尋ねてくる麻紀音

「……………どうやら手遅れみたいよ。アーメン」

「・・・・・・・・・・ってあれ？何ともないぞ」

物凄い煙は上がっているものの、怪我も、どこかが壊れた様子も
無い

一瞬、衝撃みたいな物はあつたのだが・・・

一純が不思議がつっていると、煙の中から、ケホケホと咳き込みながら、ちっちゃいツインテールが顔を見せる

「ケホツケホツ！感謝するが良い。あやつらが時間を稼いでる間に、札と、わしの力を総動員した防御陣を張って、爆発の威力を殺してやったわ。念には念を入れておいて良かったぞ」

さっきの出来事の影で、そんなことをしてたなんて・・・

「ありがとうございます先輩。グッジョブです」

これは本当にグッジョブだ

先輩がいなかったら、今頃お陀仏だったかもしれない

「ふふん！礼なら、今晚の夕食で手を打ってやるっ」

得意げにふんぞり返る九十九

それ位なら安いもんです

「……おっと、そういえば他のみんなはどうなったんだ？」

「純は、キョロキョロと辺りを見回してみる」

「こつちですよ兄さん」

声のした方を振り向くと、小夜以下、他の全員、みんなそこにいた麻紀音のほうは、未だにコードにつながったままだが

「あなた、見かけによらず凄いのねえ。今度、是非今のヤツの仕組みを知りたいものだわ」

ロンはそう言いながら、九十九に向かって、怪しげな笑みを浮かべる

その笑みに危機感を感じたのか、九十九が背中に隠れる

「それはそうと、実験はどうなったのでしょうか？」

凜がロンに尋ねる

「………機械を開けてみるまで、何とも言えないわ」

そう言って目を伏せるロン

やはり、途中で暴走してしまったという事は、かなり絶望的なのだらう

「一純ちゃん、開けて見て」

ええ〜……………こっちに振ってくるの？

正直、一純としても、失敗してしまった場合の、かなりバイオレンスな事になっているであろう生物を見るのは怖い

しかし、回りからの空気は、早く開けて見る、的な期待に包まれている

一純は、ハア、と溜息を吐くと、機械を開くハンドルに手を伸ばす

そしてゆっくりと、そのハンドルを回していく

そのハンドルが、妙に重く感じるのは気のせいだろうか

やがて、ガキンという音と共に、ハンドルが止まる

一純はチラリと、背後を見る

五人の視線が「早く開けろ!!」と訴えてる

胃がギリギリするのを感じながら、一純は意を決して、機械本体カプセルの扉を開いた

.....

.....

.....

開けたところで、一純は中にいたものと目が合った

どつ言ったらいいのだろうか

想像していたのとは全然違っていた

一純としては、本当に怪物のキマイラ的なものを想像していた

しかし、目の前には

赤い癖毛の髪

大きな瞳

褐色の肌をした、身長120cmほどの女の子が、チョココンと座っていた

こちらの方を、ジーツと見つめている

もちろん全裸だ

一瞬、最初からこういうドッキリだったんじゃないかと思つ位、人間の女の子に見えた

．．．．．ある一点を除いては

耳の上辺りにある、羊のような大きな巻き角を除いては．．．

先生

どつやら実験は、大成功してしまったようです……

t o b e c o n t i n u e d

第26夜：トロイメライを聞きながら・・・ 3番（後書き）

え？新キャラこれだけ？と思った方

コレだけですとも！！！

・・・まあ、今回はこの子メインです

・・・ていうか、ぶっちゃけ名前まだ決めてない

第27夜：トロイメライを聞きながら・・・ 4番（前書き）

久しぶりの更新でございます

第27夜：トロイメライを聞きながら・・・ 4番

人間というものは、予想以外の出来事に遭遇してしまうと、混乱を通り越して、硬直して動けなくなってしまうものだ

一純も、一応普通の人間なので、目の前に映る予想だにしなければ光景に、おもわず思考が停止し、硬直してしまっている

それもその筈だ

一純がカプセルの中にいるであろうと想像していたキメラという生物は、ライオンに色々とくつついた、伝承通りのキメラだ

しかし現実には、一純の予想を、360°見事に裏切ってくれた

実験カプセルの中にいた生物

そらは、頭部にある羊のような大きな角を除いて、まさしくその姿は人間の少女そのものだった

しかも、外見は10歳そこそこ

当然、服など着ているはずもない

文字通り、生まれたままの姿という奴だ

幸運な事に、一純にはペドフェリアのような特殊性癖は無いのだが、見た目が子供とはいえ、目の前に全裸の少女がいては、流石に目のやり場に困る

そんな一純の心境を知ってか知らずか、目の前の少女は、チヨコ
ンと座ったまま、一純をジッと見上げている

今しがた生まれたばかりの無垢な瞳が、一純を見つめる

図らずも、二人で見詰め合う状態になってしまう

「なあにポケっとしてんのよ、結果はどうなったの？」

一純のアクションのなさに業を煮やしたのか、背後からロンがヒ
ヨイと覗き込む

そして、バツチリと二人の視線は交差する

「あああら、案外上手くいってるじゃないの。爆発しちゃった時は、
姿を留めてるかどうかも不安だったんだけど。6割位は成功ってと
こねえ。あそこで出力が安定してれば完璧だったわ」

ロンは、目の前にいる『キメラ』の少女の姿に、さほど驚いた様
子も無く、実験の結果について考察してる

「俺が言うのも何ですけど・・・全然イメージと違いますね、キメ
ラとは」

一純は、自分が感じたことをそのまま、ロンに伝える

「それもそうねえ。キメラって言えば、ゲームとかにでてくる怪
物のイメージがあるもんね。でもね、今回の実験では、人間のD
NAをメインに据えて行ったから、こういう結果は、当然といえば

当然だったのよねえ。あ、さっき九十九ちゃんが言った、貴方の体に色んな動物がくっついてるっていうヤツ？アレって意外に正解だったのよねえ」

そう言ってケラケラと笑うロン

・ ・ ・色々と初耳な上に、笑い事ではないと思うんですが

「それに本当なら、こんなに幼い状態じゃなくて、ちゃんとした成体の状態で生まれる予定だったのよ？それに、知性と知識もちゃんと脳にインプットさせて、すぐにでも自立できるようにプログラムしてあったはずなんだけど・・・」

そういつて、少女の方を向くロン

そして、一純を外に出し、入れ替わりにカプセルに入り、少女の前にしゃがみこむ

「初めましてお嬢ちゃん、あたしの言葉、理解できるかしら？解るなら首を縦に振ってくれない？」

目の前にしゃがむ、男とも女とも分からない奇妙な生物を前に、ジッと見つめ返す少女

そして、数秒の時間を要して、その首はコクリと、確かに縦に振られた

どうやら、言葉は理解できるようだ

「まあ、生まれたての子供だしね。後は教育しだいてトコロか

しら………というワケで」

そう言ってロンは、少女を抱き上げると、クルリと反転してカプセルから出る

「頑張つてね、一純君」

そして、笑顔で少女を一純に押し付けた

「……………」
え？」

突然の出来事に、再び硬直する一純

「だって、さっき言ったじゃない。俺の遺伝子を持つてるなら、俺の子供みたいなもんだ、とか何とか」

「いや、確かに言いましたけど、あれは言葉のあやとつかですね……………」

「誤魔化すでない一純、わしも確かに聞いたぞ」

後ろから九十九が言う

そういえば、忘れていたが、小夜・凜・麻紀音・九十九の四人も居たのだった

「そうよ、あなたはいわば、この子のお父さんなんだから」

ロンの口から、衝撃的な一言が発せられる

「お、お父さん？」

ロンの発言に、一純の顔が引きつる

まだ、17歳なのに、お父さんですか！？

そして視線を、自分の腕の中に納まっている少女に向ける

少女は、抵抗する事も無く、一純の腕の中でジツとしている

すると、不意に顔を上げ、一純の顔を見つめる

そして

「……………オトコサン？」

片言でそう言つと、その顔が笑顔で綻ぶ

どうやら、「お父さん」という単語のもつ意味を理解できるらしい

そして、そのまま一純の胸に、嬉しそうに頬を摺り寄せてくる少女

どうやら名実共に、一純は少女から、お父さんと認定されたようだ

「この子、鳥の遺伝子も持ってるから、刷り込みの習性もあったのかもね」。随分貴方に心許してるじゃないの」

そう言つと、ニヤニヤしながら一純の肩を叩いてくるロン

刷り込みつていうと、初めて見た物を親と思ひ込むアレか・・・

ていうか、この人は完璧に今の状況を楽しんでるだろ

一純は頭痛を感じながらも、溜息を吐く

この頭痛も、最近になって頻繁に起こるようになった気がする

慢性化しない事を、切に願いたいものだ

そんな事を考えながら一純は、自分の腕の中で丸くなる少女の頭を、クシヤリと撫で付ける

どうやら、麻紀音の時といい、一純には、撫で癖のようなものがあるようだ

そして、一純はふと気づく

背後に居るであろう四人の、異様な静けさに

そして、背後に漂う妙な雰囲気

何と云うのだろうか、いつもの空気がピリピリと肌が痛くなるような感覚だとしたら、今回の空気は、生温いような、肌にまとわりつくような空気だ

怖いというか何と云うか・・・不気味だ

以前、小夜・凜・麻紀音がブチ切れた時よりも、ある意味怖い

怖すぎて、背後を振り向く事ができない

目の前には、腕の中で丸まる異形の少女と、ニヤニヤと笑い続けるオカマ

こんな、ありえないシチュエーションは、近年稀に見る・・・というか、稀にだろうと何だろうと、普通の人生を送っていたら来るはずない

日本から、ロリコンが消滅する位ありえないだろう

ポン

「!?!」

ちょっとばかり現実逃避していたら、背後から肩を叩かれた

突然の奇襲に、口から心臓が飛び出しそうになる

一純の脳は、未知の恐怖に対応すべく、再び現実逃避という手段に打って出ようとした

「一純」

しかしその目論見は、凜の呼び声により阻止される

「な、何でしょっ?」

少し声が裏返りながら、一純は返事を返す

そして、恐る恐る後ろを振り返る

今までの経験上、この振り向いた先に存在するのは、修羅か鬼神かどちらかだ

一純は振り返りながら、腕の中の少女の目を手で覆う

幼子が見たら、間違いなくトラウマになるであろう光景を、見せぬようにである

大人が見ても、失禁してしまいそうになる程の迫力だ

そんなものを、この子に見せるわけにはいかない

一純の、無意識に働いた、親心というヤツだろうか

だがしかし、そんな一純の配慮も、徒勞に終わる

「一純・・・忘れてるわけではないだろうが、何時までも裸の娘を抱き上げてるといふのは、少々いただけないと思うぞ?」

コホンと咳払いをして、凜が言う

凜のその様子に、怒りは感じられず、普通に一純をたしなめてい
るだけのようだ

「ちょうど、わしのジャージがあるから、コレでも着せてやるっ」

九十九はそう言って、隅においてあった鞆の中から、自分の物とおぼしきジャージの上下を取り出す

「というワケで兄さん。流石に兄さんといえど、女性の着替えの席に同伴させる事は出来ません。しばらく、その辺でブラブラして来て下さい」

そう言いながら、一純の腕の中で丸まっていた少女を受け取る小夜

少女の方も、少々名残惜しそうだったが、抵抗も無く小夜の腕に移っていく

今まで全裸だったのに今更だとか、ジャージを着るだけなのにそんなに時間は掛からないだろうといった考えは、どうせ抵抗したって無駄なので、大人しく飲み込んでおこう

「・・・まあ、終わったら呼んでくれ」

無抵抗主義を常日頃から心掛けている一純は、妹の言葉を素直に聞き入れて、その妹によって吹っ飛ばされ、跡形も無い準備室の扉をくぐって外へと出て行ったのだった

t o b e c o n t i n u e d

第28夜：トロイメライを聞きながら・・・ 5番（前書き）

この28夜と27夜は、元々一緒の話だったので、長くなってしまったので、2話にぶつた切りました

第28夜：トロイメライを聞きながら・・・ 5番

一純が追い出された生物準備室

凜によつて、テキパキとジャージを着せられた少女を中心に、小夜・凜・麻紀音・九十九のいつもの面子にロンを加えたメンバーが、爆発から生き延びたパイプ椅子に腰掛けて、困むように座っていた

中心にいる少女は、九十九の多少大きめなジャージがくすぐったいのか、モゾモゾと忙しなく、貧乏ゆすりのように体を動かしている

「・・・ところで先生、さっきのは本気なんですか？」

小夜が、ロンに向けてそう切り出す

「さっきのって？」

「勿論、この子の面倒を兄さんに任せるっていう事です。こう言うのもなんです、この子はいわば研究の成果であつて、それを手放すのは研究者としては本意ではないはずですよ」

小夜は、ロンに向けて齒に衣着せずに尋ねる

確かに、綺麗事だけではどうにもならない事もある

どんな経由であれ、目の前にいるこの子は、あくまで実験動物ではないのだ

「……けつこういい勘してるじゃないの」

小夜の言葉を受けて、ロンの表情が真面目なものに変わる

「実はね、弟から頼まれたのよ。この実験、成功しても失敗しても、失敗した事にしておいてくれって」

「どういう事でしょうか？」

怪訝そうな顔でロンに尋ねる凜

「どうも、上の連中がキナ臭い動きをしてるらしいわ。もし成功したのがばれたら、その子が追いかけられた時と同じ事が起きるかもしれないって、そう言ってたわ」

麻紀音を指差しながら、ロンは静かにそう告げた

「そういえば、結局お前はあれから大丈夫なのか？」

凜は、思い出したように麻紀音に尋ねる

「……………研究所には、ダミーが提出された……………多分平気」

表情を変えずに、淡々と麻紀音が答える

「……………もしかして、成功した時の押し付ける先の確保のために、一純を被験者にしたんじゃないな」

九十九はジト目でロンに視線を送る

「アハハハハ、そんなわけ無いじゃないの」

「先生、後ろではなくこっちを見て言ってください」

壁を見つめながら笑うロンに、小夜がピシヤリと言う

どつやら凶星らしい

「仕方ないじゃない。あたしんトコに置いといたらすぐにバレちゃうじゃない」

開き直ったようにロンが言う

小夜が呆れたように溜息を吐く。そして、視線を少女の方に移す

難しい話に飽きたのか、少女はウトウトし始めていた

「……まあ、仕方ないですね」

フウ、と息を吐き、少女の頭を優しく撫でる小夜

「なんじゃ妹、今日は気持ち悪いくらい優しいではないか」

九十九はそう言って、パイプ椅子に座ったまま、ガタガタと少女の後ろに移動する

「気持ち悪いは余計よ……まあ、この子に罪は無いし、私がどうこう言う理由もないわ」

流石の小夜も、相手がこんなに小さくては、理不尽に怒るわけにもいかない

もし、先程兄に抱きついてたのが、同じくらいの年の女だったら、問答無用で因果の彼方まで旅立っていただいたところだ

「……流石に、こんなに小さい子供に、兄さんが父性以外のものを抱くはずもないし」の間違いでは？」

「うぐ……」

麻紀音の言葉が、ダイレクトに痛いところへ突き刺さる

確かに、そんな思いも無きにしてもあらず

「……というか、そんな事が分かって事は、あんたも同じ事考えてたんじゃないの？」

「……考えすぎ」

是非とも、こちらの顔を見て言ってもらいたいものだ

そして、何気に凜のほうも、小夜と視線を合わせないように顔を逸らしている

ちなみに、九十九の方は最初から、一純は自分の物と決め付けているので、大して気にはしていない

他の三人は無視して、少女のほっぺをムニムニと摘んでいる

「それはそうと、こやつの名前はどつする？」

ムニムニしながら、小夜達に尋ねる九十九

いい加減呼び名の一つでも決めておいた方がいいだろう

「ちなみに、小夜とロンに決定権は無しじゃ」

九十九が、ピシャリと二人を指差すとそう言い放つ

「な、何であんたにそんな事決められなきゃいけないのよ!？」

「あたしも、名付け親になりたいわよお？」

いきなりの発言に、当然不満炸裂の二人

その二人を見て、チツチツと指を振る九十九

「甘いのう、おぬしら二人は既に、『名付け親』以外のポジションに納まつておる。これ以上ポジションを増やすわけにはいかん！」

そう言つて、力強く腕を振り上げる九十九

「………また意味不明なことを」

ボソツと麻紀音が呟く

「まずロンは『生みの親』!!」

ズビシ!!と効果音がつきそうな位の勢いでロンを指差す九十九

なるほどね、と納得しながらケラケラと笑うロン

「・・・聞きたくないけど、私のポジションって一体何なの？」

すつごく不安そうな顔をして、小夜が尋ねる

「『叔母さん』」

「へ？」

「じゃから『叔母さん』、父親の妹じゃし当然じゃろう」

真顔で答える九十九

本人にしたら、悪意などは無く、そのままの事実を述べただけなのだろう

しかし、小夜にとってはこの上ない大ダメージだったらしい

まるで石膏で出来た像のように、真っ白に燃え尽きてしまっている

「おばさん叔母さんオバサンオバサンオバサンオバサンオバサンオバサンオバサンオバサンオバサンオバサン・・・」

どうやら、ダメージが脳神経にまで達したらしい

「・・・この映像をメモリーに保存・・・こんな貴重な映像はそうそう無い」

しかも、最も厄介な記憶媒体に記憶されてしまっていた

「まあ、小夜のことは放っておくにしておいてだ、名付け親はやはり一純が良いのではないか？我々が名づけるにしても、勝手に名づけるワケにもいくまい」

「……一生ついてまわるものだから、じっくりと考えるべき」

「……お前の名前はすぐに決まったではないか」

麻紀音の言葉に、凜が突っ込む

「……マスターがつけてくれたものだから問題は無い」

「……さいですか」

「まあ、今日はひとまずコレで解散にしましょう。時間も遅いし、おなか空いたし」

ロンがそう言って、パンパンツと手を叩く

「それでは、私は一純を呼んでこよう」

凜はそう言って、準備室から出て行く

発信機と盗聴器があるので、居場所もすぐにわかるだろう

「それよりも、どうするかのつコレは？」

九十九が小夜を指差しながら、面倒くさそうに言う

「オバサンオバサンオバサンオバサンオバサンオバサンオバサンオバサンオバサンオバサンオバサンオバサンオバサンオバサンオバサンオバサン」

未だに壊れたままの小夜

復活の日はいつか？

「……………あのおねえさんは、おとうさんのいもつと……………つまりおばさん……………あんだすたん？」

「いらん事を吹き込むなああああああああつ!!!!!!!!!!!!!!」

T o b e c o n t i n u e d

第28夜：トロイメライを聞きながら・・・ 5番（後書き）

新キャラ、未だ名前決まらず

何かいい名前ありませんかねえ？

第29夜：トロイメライを聞きながら・・・ 6番（前書き）

生きてます

第29夜：トロイメライを聞きながら・・・ 6番

一純達が帰路へ着く頃には、辺りは夕闇に包まれ、通学路にも人らしい人影は見当たらなくなっていた

凜と麻紀音もそれぞれの帰路に着いており、一純も、隣で石灰化している小夜の手を引きながら、背中で可愛い寝息をたてている少女をおぶさって、自宅へと足を進めている

小夜は叔母さん呼ばわりされたのが余程堪えたらしく、燃え尽きたボクサーのようになりながら「オバサンオバサンオバサン・・・」「と呪文のように呟いている。正直、このまま三日くらい放置していたら、得体の知れない何かを召還してしまいそうな勢いだ。というか、ぶっちゃけ怖い

・・・冗談はさておき、小夜は放っておいても問題無しという事にしておいて、放置しておいて問題な方は、背中でレム睡眠してらっしゃるこの娘さんだ

一純は、歩きながら思案に暮れる

話の流れと、なし崩し的な勢いでそのまま連れてきてしまったが、両親にはなんと説明したら良いだろうか

普通、高2の息子がいきなり「娘が出来ました」と言つて、十歳そこそこの女の子を連れてきたら、普通の親の反応であれば、ショックで心臓麻痺の一つでも起こしかねないだろう。おまけに、それが頭にでっかい角を生やした娘さんだったら、サービスで精神病の

一つでも付いてきそうだ

しかし、高倉家の親御さんは、いろんな意味で普通の両親ではないので、そここのところの心配はしなくても大丈夫だろう

逆に「初孫ヤッホイ！」とか言いながら小踊りして喜ぶだろう

父親は兎も角、母親の方はそういう人間だ

逆に問題なのは、承諾を貰ったその後だ。うまく背中の子の事を説明してやらないと、後々になってからひじょーーーーーに後悔する羽目になるだろう

父親は兎も角、母親はそういう人間だ

一度、一純が母親と一緒にTVでフランス料理の番組を見ていた時、何の気なしに「こういう人に料理を習ってみたいもんだ」と言ったら、一週間後の同じ時間、一純はパリ行きの飛行機の中で、現状を把握出来ないまま離れ行く日本の大地を見下ろしていた

勉強にはなったが、その一方で、母親の前で軽はずみな言動は控えようと思っただ瞬間である

今回の事も下手すれば、母親の悪ノリでメンドクサイ事になりかねない

そんな事を考え、難しそうな顔になる一純

眉間にしわを寄せ、難しい顔でうーんと唸る

「そんなに心配しなくても大丈夫ですよ兄さん」

一人、頭を悩ませ唸っていたら、不意に隣から声を掛けられる

視線を横へ向けると、つい数秒前まで明日のジョーしていた小夜が、モノクロからカラーへと復活を遂げていた

「お前、もう大丈夫なのか？」

さつきまで燃え尽きていた人間が急に復活したのだ。いろんな意味で心配になってくる

「ええ、何とか」

説明しよう。さかのぼる事数秒前、一純に手を繋がれている事実が遅ればせながら気づいた小夜は、その興奮によって脳内のドーパミンやら何やらの脳内麻薬がドツパドツパと溢れ返り、通常の78倍（当社比）という脅威的なスピードでの復活を遂げたのだ（精神的に）。以上、説明終わり

そして、この機会を逃すまいと、小夜は握られている手に更なる力を込め、話を続ける

「単身赴任の父さんは勿論の事、母さんの方も最近あまり帰ってきませんし、言い訳を考える時間は沢山あります。それにその気になれば、二人が来る時だけ誰かに預けるとしても」

小夜が言い切る前に、一純が言葉をさえぎるように掌を向ける

「……それは駄目だ。どういふ結果になろうとも、この子の説明

だけはしっかりする」

一純は、ハッキリと強い口調でそう答える

言葉の一つ一つから、迷いなど一切無い、強い意志が感じられる

小夜の方も、多くを聞かずとも、兄のその言葉の意図を汲み取っていた

「……そうですね、この子自身に後ろめたい事は何も無いのに、コソコソと隠れるような生き方をさせるなんて可哀想ですものね」

そう言うと小夜は、一純の背中で眠る少女の頭を優しく撫でる

オマケに、いつもの小夜からは想像出来ないような、慈愛に満ちた顔をしている

一純は心の中で、いつもこんな調子でいてくれたらなあと思ったが、口に出したら絶対機嫌を損ねるだろうから、口にチャックをしておく事にした

「まあどの道、良い言い訳が考え付くまで、母さんが帰ってこないに越した事はないと思いますけど」

「そうだな、流石に昨日の今日じゃ言い訳も思いつかない」

昨日の今日どころか、つい数時間前までは娘ができる事すら想像できなかった、というか誰が想像できただろうか

そうして話している間に、何時の間にもやら自宅まであと数メートル

前の角を曲がれば、晴れて帰宅とあいなるワケだ

「いつその事、正直に話してみてはどうですか？母さんなら一秒も迷わずに信じると思いますが」

「それもケースバイケースだ。後々の事を考えると下手な事は言えないから、やはり時間をかけて言葉を選んだ方が……」

そう話しながら曲がり角を右折、そして向かって左に見える我が家を見て……正確には、我が家の車庫を見て、兄妹は顔が固まる

兄妹の視線の先、車庫の中には黒い大型バイクがその存在感を誇示するかのようにデンと停まっていた。確かホンダのワルキューレとか言う名前のバイクだったと思う

高倉家であんなモンスターマシンに乗る人間は、一人しか頭に浮かばない

「……昔からこういう人でしたね。どうでもいい時にはいい癖に、いて欲しくない時にはまるでタイミングを計ったかのようによつてくる……」

「奇遇だな小夜、俺も同じ台詞を言おうとしていた」

そして、二人ともタイミングを計ったかのように、同時に溜息を吐く

なんにせよ、これで一純たちに小細工を考える時間は無くなってしまったワケである

「小夜……、腹を括るとしようか」

小夜も無言で頷く

背中の少女だけが、何も知らずに幸せそうにムニヤムニヤと寝息をたてるのだった

一純がゆつくりと玄関のドアを開くと、バタバタと騒がしい音と共に、誰かが居間から飛び出してくる

泥棒やそれらの類でないのなら、現在この家の内部にいる人間は必然的に限られてくる

小夜は隣にいるし、父親も連絡無しで急に帰ってくるという事はまずない

となれば、居間から出てくるのは一人しか存在しない

「おつかえんなっさい！！少年少女　！！」

居間から出てきたのは、無駄に元気の溢れる女性

外見は、セミロングの髪を右側だけショートポニーのように結び、左の目に片眼鏡、いわゆるモノクルというヤツをかけていて、無駄

に印象的な装いをしている20代後半の女性

しかしその正体は、高倉家が誇る半永久稼動式無公害騒音発生装置こと、一純と小夜のマザー、高倉 三日月みかづきその人なのである

マザーの響きとしては、お母さんと言うよりはエイリアンのマザーの方が正しい気がする

実年齢は40代そこそこのはずなのだが、そんな事を物ともしない若さを誇る、なんとも恐ろしい女性である

きつとストレスとかと無縁な人なんだろう、性格的に

しかしそれ以上に驚愕すべきは、そのスタイルだ

もう、何と言うかボン！キュッ！ボン！をそのまま形にしたようなスタイルである

そんじょそこらの小娘なんぞ、指先一つでダウンだ

同じ血を受け継いでいるはずなのに、ちっとも成長の兆しが現れない小夜とは雲泥の差である

きつと出産の際に、小夜のほうに行くはずの栄養を、全て吸い取ってしまったに違いない

三日月は、わが子達の姿をロックオンすると、見たこともない母独自のステップを踏みながら、更にスピンを加えつつ、一純達に飛び込んで来た

「今日は本当は偉い作家さんの直木賞受賞記念の祝賀パーティーがあっただけけどアタシの第六感が家に帰った方が面白い事があるって訴えかけてきたから式の途中からドロンさせてもらってバイクぶっ飛ばして帰って来ちゃったー！！途中でパトカーのサイレンとか聞こえたけど法定速度のトリプルスコアで逃げ切ってやったさー！！今日の晩御飯なにオゲツ!?」

息継ぎもせず、句読点も無しで一氣にまくし立て飛び出してきた三日月は、案の定足がもつれ、盛大に転んでひっくり返る

しかも、殆ど何言ってるか分からない

「痛い、痛いよ……」

ずれたモノクルを直しながら、ヨロヨロと立ち上がる三日月

頭には、漫画みたいなタンコブをこしらえている

その様子を、頭痛を感じながら見守る一純と小夜

自分達に、この母親のDNAが混じってるのだと思うと、それだけで恥ずかしくなってくる

「……母さん、いい大人なんだから、もう少し落ち着きを持ってください」

無駄と分かりながらも、数万分の一の奇跡を信じ、母親を諭す小夜

「なにさー！！落ち着いてるのがいい大人だっていうならアタシ大人になんてなりたくないやいー!!」

四十過ぎの熟女が、子供のような事を喚きながら口をとんがらせる

小夜は、本当にこの人が自分の母親かどうか疑いたくなってきた

(・・・私と母さんって本当に血のつながりがあるのかしら・・・全然似てないし、スタイルだって・・・ああ、いつその事、実は私が養子で、兄さんとは義理の兄妹だったなんてオチにならないかしらね)、そうすれば色々と面倒な事を考えなくても兄さんとの結婚まで漕ぎ着けられるのに)

言うておくが、そんなエロゲーのようなシナリオは一切無い

出産直後の証拠写真もある

小夜がありえない妄想に浸っていると、三日月がジューツという効果音を出しながら、一純の後方を見つめる

どうやら、一純の背負っている物体Xを捕捉してしまったらしい

全く、こういう事に関しては本当に目ざとい

「ありり〜？なに背負ってんの一純？夕飯のおかず？」

首をかしげ、ペコちゃんのような顔をしながら、息子の背負った少女を覗き込む母

人食い人種かアンタは

「それとも、少年が思春期特有の青い性を爆発させ、道行く名も知

らぬ幼女を本能の赴くままイクアウトしてきちゃったのかな？そして、何も知らない青い果実にあぐんな事やぐぐんな事をしちゃうつもりなのかい？そういう事なら、是非是非アタシも混ぜて」

「ち・が・い・ま・す！！！」

小夜が怒気を孕んだ声を放ちながら、エロ親父のように手をワキワキさせている三日月を睨みつける

こんな性格の母親の為か、小夜は三日月に対して非常に厳しい

普通は逆だろうが、この母親だったら納得だ

「・・・うう、ちょっとした冗談じゃんよう。そんなに睨まなくたっていいじゃないの〜」

娘の怒りの眼光に、シユンと大人しくなる三日月

そんな二人の様子を、疲労感を感じながら見つめる一純

そしてその背中で眠る、まだ名もない少女。一純の右肩に、顎を乗せるように体重を預け眠っている

巻き角がゴリゴリと一純の頭に当たっている為か、一純は頭を少し斜めに傾けている

そして、三日月が大人しくなった時を見計らい、本題を切り出す事にした

一純は背中に背負っていた少女を、三日月がすっかりと見えるよ

うに、背中から前のほうに持つてくる

そして少女を抱っこした状態になると、三日月を見据えこう言った

「母さん、娘が出来た」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

三日月のみならず、小夜まで硬直している

それもそのはずだ。さっきまで散々考えてモノを言おうと話していたのに、蓋を開けたら「娘が出来た」の一言だ

（ちょっと兄さん！？そのまま言ってどうするんですか！！）

小声で一純に言う小夜

（・・・・いや、改めて母さんを前にしたら、何を言ったとしても無駄のような気がしてなあ・・・・。それなら、最初から正直に言おうと思っ）

同じく小さな声で、申し訳なさそうに返す一純

そして、チラリと三日月に視線を移す

流石の三日月も、突然の発言に目を丸くして固まっている

そして、たっぷり数十秒の時間をかけて現状を把握してゆく

第29夜：トロイメライを聞きながら・・・ 6番（後書き）

ほんっつっつっつとうに久しぶりの更新です

仕事が忙しく、自由な時間は、8割睡眠に当ててました

それにしても、なかなか幼女が動くところまで話が進みませんねえ。一応このトロイメライ編のメインなのに、サブキャラの方が目立ってます

頑張つて書きまっしょい

それはそうと、現在コニ・タン先生主催の「コメディクロスオーバー企画」というものが計画されており、私も恥ずかしながら参加いたします

興味がある方は、秘密基地の仲間募集の欄をご覧ください

第30夜：トロイメライを聞きながら・・・ 7番

三日月火山が、初孫誕生の喜びに大規模な噴火起こし数刻

噴火直後は、何時止むかも分からぬ三日月の歡喜の絶叫という土石流に、住人達（一純と小夜）はその勢いに押し流されそうになってしまっていた。

だがこの三日月火山は、その噴火の衝撃で近くの海底にそびえる小夜海底火山を、不運にも・・・と言うか必然誘発的に大爆發させてしまった。小夜海底火山の噴火は凄まじかった。

その噴火の衝撃は大陸プレートをも動かし、地上にあつた三日月火山を大陸ごと大移動させてしまったのだ

・・・まあ分かりやすく言うと、三日月のあまりのハツチャけぶりに小夜の堪忍袋が破裂し、三日月の首筋にいい感じの一撃をお見舞いして、居間まで引きずって行ったのだ

そして、居間で正座させられる三日月。母親としての落ち着きと言うか威厳が微塵も感じられない。

今現在も、小夜のマシンガンのような説教の嵐をシュンとしながら聞いている。主な口撃内容は

「少しは疑問を持ってください!!」

「少しは大人としての自覚を持って下さい!!」

「そもそも、母さんは責任感や一般常識と言った事が著しく欠落しています!！」

「大体なんで娘の私に叱られるような事ばかりするんですか!！」

「私の胸囲が小さいのも、母さんが栄養を全部持っていったからでしょう!！」

などなど・・・

後半は殆ど言いがかりみたいなものだった

しかし真に恐ろしいのは、説教が終わったかと思ったら最初に戻って延々とループする、終わる事のない無限説教地獄にあるのである

三日月のその萎れっぷりは、まるで雨に濡れる子犬のように哀れで同情してしまいそうになるものがあった

一純はソファーに座りながら、巻き添えを食わぬようその様子を眺めている。その一純の膝の上には、未だ眠り続ける少女。ここまです五月蠅いのに眠っていられるのは大物の証なのか、それともただの無神経なのか・・・。自分の膝枕で寝息をたてる少女の、赤い癖つけのある髪を撫でつけながら、一純は小夜のマシンガン口撃でどんどん削られていく母を眺める

可哀想だが、頭に血の上った小夜を止められる奴はいない。まあ、そういう状況を作ってしまった己自身を呪うしかないだろう

すると、シユンとして下を向き俯いていた三日月が、少しだけ一純の方に顔を向ける。口では何も言わないが、向けられた目は雄弁

に一純へと訴えかける

『一純い……このままじゃあたし削られて無くなっちゃおうよ……
……ヘルプしておくれよう……』

涙目になりながら息子に訴えかける三日月。ウルウルとした目で放たれる母必殺の助けて光線だ

世界中の母親が発射可能であろうこの光線に、対象である世界中の息子が逃れる手立ては21世紀現在発見されてない

例に漏れず、一純も助けて光線から逃れることは出来ない運命なのだ

一純は目を合わせてしまったことに後悔しつつも、見る間に小さくなる母に助け舟を出す事にした

「小夜、そこまでにしておいてやってくれ。確かに母さんには色々
と頭が痛い事もあるが、素直に孫の誕生を喜んでいるだけだと思つ
と、そう責めてばかりやるのも可哀想だ」

一純の呼びかけに、小夜の口撃が一旦止まる

「そつだとしても！何の疑問も感じないと言つのは逆に問題あり
ます……！」

さつきまで誤魔化す事ばかり考えてた癖に……

頭でそう思つても、一純は口に出すことはしない。だって説教さ
れたくないから

「分かったよう・・・疑問に思うからもう勘弁してえ・・・」

床にベチヨリと突っ伏しながら、最後に力を振り絞って小夜に懇願する三日月。最早、正座の姿勢を保つ気力も無いらしい。なんだから、ふやけたシップみたいになっている

しかし一切の疑問も抱かないのも問題ありだが、強制的に疑問に思わされると言うのも如何なものだろうか・・・

三日月の悲痛なのに何故か気の抜ける声が、力なく居間に響くのだ
った

*

「それで？一純君や。奥さんは一体誰なのかな？」

少々萎れ気味ながらもいつもの調子を取り戻した三日月は、居間にある四人掛けソファの息子の真横に座り、一純越しにその隣の少女に手を伸ばす

その体勢は最早、一純の膝枕にうつ伏せになっている状態だ。三日月の暴力的なまで豊満な肉体が一純の大腿部に押し付けられその

形を歪めている。主に胸部の辺りが

自分の母親とはいえ、女性の胸（しかも な）が押し付けられると非常に気恥ずかしいと言うか、居心地が悪い

しかも、目の前で妹が凄いい目で睨んでいるので、更に居心地が悪い

「母さん？そんな事よりも、もっと疑問に思うべき事があると思うのですが？」

小夜が冷たい口調と、それ以上に冷ややかな視線を母に向ける

「うう、何で質問にまでダメ出しされなきゃならんのさ。・・・、娘なのに姑みたいだよこの子」

小さな声で三日月が愚痴をこぼす。そして、愚痴りながら少女の頭の角を撫でる

「母さんの撫でている、そのでっかい角に疑問は持たないのですか？」

小夜の冷気を孕んだ声が、容赦なく三日月に降りかかる

三日月の角を撫でる手がピタリと止まり、額には冷や汗が一筋流れる

無意識の行動が墓穴を掘ってしまったらしい

「・・・いいじゃんよう、角くらいあっても。人間なんて十人十色なんだからさ」

三日月がまた小さな声で愚痴をこぼす

「……何か言いました？」

小夜の耳に二度目は無い。集音機の如く母親の愚痴を拾い上げた

そしてギロリと撰氏零度の瞳で三日月を睨みつける

「うう……ごめんよう小夜、母さん頑張って質問するからもう睨まないでえ……」

三日月はもう半泣き状態になっている。本当にこの二人の親子関係は逆だと思う

もしかして、三日月が夜勤シフトなのも小夜が怖いからなのかもしれない

こうして三日月は、ようやく普通の人がまず最初に聞くであろう質問事項を挙げていくのだが、質問もその解答もごくごく普通のものであったので、ここはあえて割愛する事にしよう。

………決して書くのが面倒くさいとかそういう事じゃないぞ？

*

ひとしきり三日月からの質問が出尽くした後、一純はおさらいの意味を込め、少女誕生から今までの経緯を三日月に説明をする。

ちなみに、怒りの沸点が低い小夜に三日月の相手をさせるのは得策ではない・・・との判断が今更ながら下され、現在キッチンで夕飯の準備に勤しんでもらっている

流石に、母が一言何か言う度に妹にダメ出しされる姿に居たたまれなくなっただけらしい

小夜のほうも、いちいちダメ出しするのに疲れたらしく、すんなりとキッチンに引っ込んでいった。

疲れるくらいなら何も言わなければいいのに・・・

小夜という精神削岩機から開放された事で、三日月の方も幾分顔に生気が戻ってきており、テーブルに置いてあったお茶請けの煎餅を齧っている

「むぐむぐ・・・マイサンも随分凄い人と知り合いなんだねえ。あやし・・・バリバリ・・・ビックリして・・・思わずモノクルずれ

「ちゃったよ・・ムシャムシャ」

そう言いながら、言葉の通りずり落ちそうになってる片眼鏡を戻す三日月。だが驚いたと言ってる割に、顔はニヘラっとした締まりの無いユルユルフェイスだ。あと、食うか喋るかのどちらかにして欲しい

「まあ、いろんな意味で凄い人なのは確かだ」

一純の脳裏に、背後に触手を蠢かせ怪しげな薬品片手にケラケラ笑うロンの姿が浮かぶ

比喩とか誇張ではなく、あの人だったらリアルにその光景を作り出しそうだから怖い

「・・・むふふふ、その分だと一純ちゃんったら小早川兄弟の物凄さを知らないようだねい！！いいのだよいいのだよ、知らない事は罪じゃない・・・罪なのは知ろうとし無い事なのさ！！」

三日月は不気味な笑みを浮かべながら、どこぞの哲学者のような言い回しで偉そうに言うのと、いつの間にかテーブルの上に出現したお茶の入った湯飲みにズズッと口をつける。そしてお茶を啜りながらも、チラツチラツと一純の顔を窺う

・・・ようするに、小早川兄弟の物凄さについて説明したくてしなくては堪らないらしい

こんな回りくどい言い回ししなくても、一純はしっかりと聞くつもりなのだが、さっきまで散々小夜に罵られた三日月には、またダメ出しが出るのではないか？という警戒感が植えつけられてしまって

いるのだ、哀れな事に

そんな母を不憫に感じ、一純はとりあえず話だけでも聞く事にする

「・・・あの兄弟は、そんなにメジャーな人達なのか？」

母に余計な心労をかけぬように、慎重に言葉を選び尋ねる一純。

コレが小夜だったら

『もつたいぶらずに早く話してください。こっちは別に、母さんの話なんか聞かなくなつていいのですからね？』

と辛辣な言葉の一撃で、三日月をKOさせてしまつたろう

一純が話に食いついてきたのが嬉しいのか、三日月は湯飲みを置き満面の笑みを浮かべる

「あたしも一応編集者さんだからねっ！！それなりに時事ネタや業界の話は知ってるのさ！！」

一応仕事らしい事はしているらしい。一純は心のどこかで安心した

「2、3年前あたりかな？アメリカのちよく有名な科学雑誌に、兄弟揃って論文が掲載されたのさ。日本人が一度に二人も取り上げられるなんて前代未聞の快挙だったから、あん時はもうしつちやかめつちやかの大騒ぎだったのさね！！たしか、お兄さんの方が生物の分野で弟が機械工学だったと思うから、さっき一純が言った人達で間違いないと思うんよ」

生き生きとした表情で三日月はそう話した。小夜に邪魔されずに喋れるのが余程嬉しいらしい

「んでね？論文が掲載されてからしばらくして、お兄さんの方がフツと雲隠れしちゃったんだよねえ、忍者みたいにドロント。あ、ちなみにね？二人とも凜ちゃんのトコの研究施設に居たらしいよ？兄さんが類家科学で弟さんが類家エレクトロニクス」

「・・・あの人も凜のトコにいたのか」

それが何で、高校の教師をやっているのか。当然疑問に感じるものの、詮索するような事でもないだろう。人には色々な事があるものだ

それよりも忘れてはいけないのは、横で眠るお嬢さんだ

「・・・まあ、それはさておきとして」

一純はコホンと咳払いすると、改めて母の方に正面に向き直る

「母さん・・・今まで話した通り、この子の事を・・・」

そう言い掛けた一純の口を、三日月の人差し指が止める

「今更なに言ってるの一純。可愛い初孫の面倒を見るのは、おばあちゃんの甲斐性さね。心配しなさんなって」

そう話す三日月の顔は、いつもの馬鹿みたいな笑い顔ではなく、息子を想う母親の暖かい笑顔だった

「・・・ありがとう、母さん」

一純も、そんな母の真摯な言葉を受け取り、感謝の念を込め頭を下げる

台所から聞こえていたはずの包丁の音も、いつの間にか聞こえなくなっていた

「それはそうと一純」

三日月が不意に話しかける

「？」

「この子の名前、一体どうすんのさ？」

そう言われて一純も思い出す。確かに、何時までも名無しの子ちゃんでは可哀想だ

一純はうつむと唸る

「なんなら、あたしがつけちゃっても良いかな？」

三日月が目をキラキラさせながら一純に尋ねる

「母さんが？・・・いや、まあ良いんだけど」

一瞬考えたが、流石の母さんも孫の名前くらいは真面目に考えるだろう

そう思い一純は三日月を信じて、少女の命名を託す事にした

一純からGOサインを出された三日月は「やったね」と小さく言うと、腕を組みうーんうーんと唸りだした

三日月が何か考えている姿なんて初めて見たかも知れない。・・・もしかして、これは歴史的な快拳なのでは？

一純がそんな事を考えていると、三日月が指をパチン！と鳴らして立ち上がる

「よっしゃ！！決まったよ！！」

そういつち否や、三日月は韋駄天の速さで部屋から飛び出す

ドタバタと走る音は階段を駆け上り、二階のどこかの部屋に辿り着き、まるでひっくり返すような物凄い音・・・言葉では表現できないような、というかどうやったたらあんな音が出せるのか？と思うような爆音を響かせる。

そして、しばらくその音が続いたかと思ったら、転げ落ちるように二階から下り、居間に飛び込んだ

その手には、筆と硯と墨汁と半紙が握られていた

「いっくよー!」

息もつかずに、硯に墨汁をいれ筆を浸す三日月

「うりゃー!」

気合一闪、半紙に筆を走らせる三日月

その様子を黙って見つめる一純。あちらこちらに墨が飛んでいるのは、やはり注意すべきかと考えていた

「出来たよ!」この子の名前は、高倉メイちゃんに決まりだね!」

そう言って、でかかど下手な字で『メイ』と書かれた半紙を掲げる三日月

「おお・・・まともな名前だ」

心配とは裏腹にまともな名前を考えた三日月に、一純は驚きを隠せない

「ふふん!」どう?良い名前っしょ?」

得意げにふんぞり返る三日月

「ああ、正直驚いた。流石に母さんが初めて頭を使っただけのことはある」

何気に失礼な事を言う一純だったが、三日月が気づくわけも無い

「ところで、なんでメイなんだ？」

「小夜の姪だから。あと神託ってやつ？」

・・・その瞬間

— 純は三日月の背後に立つ、右手に包丁を持った鬼を見たのだった

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.
.
.
.
.
.

第30夜：トロイメライを聞きながら・・・ 7番（後書き）

いやいや、やっと名前でしたね幼女

いつになったらこの子がメインで動くんでしょう？

次回こそは・・・！！

第31夜：トロイメライを聞きながら・・・ 8番（前書き）

死んでました

第31夜：トロイメライを聞きながら・・・ 8番

三日月が小夜の手によって刺殺されたかどうかはさておき、その日の高倉家の食卓はいつもとは少々・・・いや、かなり異なっていた

食卓を囲むのは、いつも通りならば一純と小夜の二人というのが常なのだが、今回は珍しくこの時間帯はいない筈である母親の三日月がいる。そして、つい先程名前を授与されたばかりのキメラ娘のメイも、夕食という事で小夜に起こされ、一純の膝の上にチヨコンと座って足をパタパタとさせている。

そして・・・

「・・・何であなた達がいるんですか」

小夜は、目の前の椅子にさも当たり前のように座っている西明寺親子を、ジトツとした眼差しで睨みつける

小夜の黒い熱視線を受ける当の西明寺親子は、涼しい顔でいつの間にか用意されていた椅子に腰掛けながら、一純の膝の上にいる新生物にちよっかいを出している

「来ていたら悪いか。わしらはちゃんと一純から招待を受けて来ているんじゃないから、今更ギャーギャー言うな。・・・まあ、わしも母上がついて来るとは思わなかったがのう」

相変わらずの傍若無人で小夜にそう返す九十九は、一純の膝に座るメイの巻き角をグリグリと撫で回しながら弄んでいる。一方で八

尋の方は九十九越しに、まるで猫を呼ぶようにチチツツと言いなからメイを手招きしている

「あらあら、いいじゃないの。九十九だけお呼ばれなんて、お母さん羨ましくって羨ましくって……ねえ？」

そうやって八尋は、同意を求めるかのように一純へと視線を向けて、にこりと微笑む

一純としては、そのどうにも返答に困る言葉に曖昧に頷く事ぐらいしか出来ない

そして人外親子に弄られているメイは、状況はよく分からないが、とりあえず楽しいらしく、ニコニコと愛らしい笑顔を振りまいている

「……というワケだ小夜。先輩には今日の事で結構大きめの借りを作ってしまったからな。丁重にもてなしてあげてくれ」

一純は、早くも溜まりつつある小夜の怒りゲージが爆発する前に、その沈静にかかる。多分、爆発したら体が赤くなったり攻撃力が上がったってしまうのだろう。それだけは絵的にも展開的にも勘弁してもらいたい

実はそう言っている一純の方も、西明寺親子がやってくるまで、自分が九十九を夕食に招待したという事実をすっかり忘却の彼方にすっ飛ばしており、先程テレビを見ていた折に、画面から九十九が某天使の如くニヨキリと顔を出し現れて来てやっと思ひ出したのだった

「先輩。今度からは、ちゃんと玄関から入ってきてください」

その時の光景を思い出しながら一純は、メイを弄り回す九十九に、果敢にも人間界の常識を説いてみる

「気が向いたらのう」

九十九の気が向いたらは氣象庁の天気予想より当てにならない。きつと変な式神に乗ってきたり、空間転移やらの術でおかしなトコから現れるに違いない。一純の心臓的にも、ご近所の視線的にも、そういつたファンタスティックな事は勘弁してもらいたい。だけど、9割9分厘ファンタスティックな事になってしまっただろう、九十九の事だから

一純がそんな光景を想像しながらふと顔を前に向けると、自分のちようど向かいに座っている三日月が、難しい顔をしながら八尋の事をジーツと見ている。言い方を変えれば、睨んでいる・ガンを飛ばしてるとも言う

「へい、マイサン。この二人のお客さん、特にそっちの色々と大きな方のレディーについて説明をして欲しい今日この頃なんだけど、そこんトコどうよ?」

相変わらず意味不明な文法で一純に尋ねる三日月。確かに三日月と西明寺親子は初対面なのだから、互いに自己紹介も必要だろう

「ああ、そうだな。まずこの小さい方が学校の先輩の西明寺九十九先輩、それでこっちは先輩のお母さんの八尋さん。二人には色々とお世話になってるから、今日はそのお礼に夕飯に招待したんだ」

「下僕のくせに、小さいとか言うな!」

一純の小さいという言葉に反応して、九十九が一純の頭にチヨツプの一撃をお見舞いする。地味に鋭い一撃に一瞬脳がグラつくが、特殊スキル『我慢』を発動させる事で何とかしのぎ、今度は西明寺親子の方に三日月を紹介する

「先輩、八尋さん。アレがうちの母親です」

「……………」

「……………」

「……………あ、あれ？それで終わりなの？マイサン」

モノの数秒で終わった自分の紹介に肩透かしを食らう三日月

「母さんの説明なんて、それで十分でしょう」

小夜の容赦の無い一言が三日月を襲う。しかし三日月は珍しい事に、小夜が三日月の案外脆いハートを狙って放った一撃を、一純も持っている伝家の宝刀スキル『我慢』で耐えしのぎ、よろめきながらもターゲットのロックを外さずにいた

「ふふふ……、今のあたいは一味違うぜよ。……まあ、確かに自己紹介なんてこの際どうでもよし。問題なのは……」

そして再び、三日月の視線が八尋へと向けられる。その目つきはまるで、恋敵を狙うヤンデレヒロインのように鋭くどす黒い

（この熟女、見た目はオットリ系の癖にまるで隙が無い……。そ

「い、今ほど母さんを尊敬した時はありません……。そんなに凛々しく、しかも私でさえ強くモノを言えないような人に……。しかも、私の心を代弁するかのように!!!」

小夜の三日月への好感度がグンと上がった！ 0% 10%

そして三日月はまくし立てるかのように更に叫ぶ

「なにより、これ以上うちの純を狙う熟女が増えてたまるかつちゅーの!!!」

.....

.....

.....

「.....え？」

小夜は我が耳を疑った

ちなみに純は、三日月が最初に叫んだ後、メイを連れて二階に避難した。メイに悪影響を与えない配慮というやつだ

「か、母さん？に、兄さんを狙ってる熟女って.....」

小夜は動揺に声を震わせながら、三日月に尋ねてみる

「決まってるじゃないの!!! 類家んとこの捻くれ女以外に誰がいるって言うのさ!!!」

「人前にいる時と一人でいる時のギャップが可愛いんだとさ!!!」
ケワカンネエヨオツ!!!モギヤーツ!!!」

三日月が更に「又ガアアツ!!!」と絶叫し暴走モードに突入して
る中で、小夜は凜の母親の言葉の意味を理解していた

おそらく凜の母親は、何らかの経緯で凜の撮った一純盗撮ビデオを
見たのだろう

(分かる・・・分かるわ・・・凜のお母さん!!!)

小夜の脳内に、先日見た光景が蘇る

それは、お茶でも入れようと台所に入ろうとしたときの事だった。
扉が開けっ放しだったので、何の気なしに覗き見てみると、何かを
している一純の後姿が見えた。よく見てみると横には林檎の入った
籠がおいてある。どうやら林檎の皮を剥いているようだ

邪魔をするのも悪いのでそのまま一純を眺めていると、順調に剥か
れていた皮が、手元が狂ったのか厚めに剥かれ、そのまま千切れて
まな板の上にポトリと落ちる

一純は包丁と林檎を一旦置き、まな板の上に落ちた『身の部分が
多くついた皮』を持ち、それをジーツと見つめている

その光景を更に見つめていた小夜は、一純の心の中で行われて
いる二者択一が手に取るように見えた

食べる？ or 捨てる？

一純の頭の中は、まさにその二者択一で一杯だった

そして、リンゴの皮を持ち悩む事約三分。一純がキョロキョロと回りを警戒し始める

小夜は巧みに身を隠しながら、その様子を眺める。一純のその様子は、まるでエサを持つ小動物の如く

そして、エサを持つ小動物が取る最後の行動といえば一つしかない

(いけっ！そこよ兄さん！！レッツ・イート！！！！)

小夜のそんな念が通じたのか、一純はリンゴの皮を持ったまま物陰へとシュツ！と移動して、隠れるようにしゃがみ込む

そして、小夜の視界から一純の姿が消える、が

シャクシャクシャクシャク

(食ったあああああああああ！！！！！！！！！！)

小夜の心で、盛大なファンファーレと花吹雪が舞い、内なる小夜がガッツポーズをする

その一純の一連の行動は、まるでリスの如く。普段の一純だったら絶対にやらないだろう

そして、小夜が心だけでなく実際にガッツポーズをしていると、

九十九が、目の前でいきなり鼻血を出し始めた母親に少し引いている

小夜の心の中を読んだ八尋は、一純のあまりの小動物っぷりにクリティカルヒットを喰らったようだ

(人の心を読まないで下さい!!)

小夜は口には出さずに、心の声で八尋に反論する。それが届いたのかどうか分からないが、八尋はハンカチで鼻血を拭いながら相変わらずの笑みを浮かべている

そしてその横の床に目をやると、先程まで暴れ狂っていた三日月が白目を剥いて気絶していた。口からは泡みたいな物が出ている

「母上必殺・黄金の右フックが炸裂したのじゃ」

床に倒れる三日月をツンツンと突きながら九十九が説明する。どうやら、小夜が回想してる間に一撃入れたらしい。いくら普段温厚な八尋でも、三日月の暴れっぷりにいい加減うざったくなったのだろう

「人の母親に何するんですか!!.と、本来なら言うところだと思いますが、この母親の場合は別にいいでしょう。むしろ感謝します、八尋さん」

小夜は八尋に深々と頭を下げる

「あらあら、そんなにかしこまらなくても.私はやるべき事を

しただけですから」

八尋はニコリと微笑むと、頭を下げる小夜の肩をポンと叩く

「ついでと言っては何ですが、このままお母さんの歪んだ性根の修正を試みてみようと思つのですが、よろしいでしょうか？」

顔は笑ってるが目は笑っていない。どうやら平気そうに見えて、今までの三日月の言動にかなりご立腹の様子だったらしい

小夜の的にも、この提案を断る理由は全くの皆無だ。むしろガンガンいって欲しいとすら思っている

「ええ、喜んで。これ以上は酷くなりようが無いですから、思いっきりやっちゃってください」

小夜に提案を快諾された八尋は「そうですか」と言うと、ウフフと笑いながら気絶している三日月に近づいてしゃがみこむ

「さてさて、どうしてくれましょうか」

「どうせなら、悪いところ全部直してください」

三日月の回りにしゃがみこむ二人は、傍から聞けば怪しげな会話を交わしながら、三日月の修正に取り掛かるのだった

・・・修正の方法は各々の想像をお願いします

*

小夜と八尋がリビングで怪しげな事をしている時、一純はメイを連れてキッチンに来ていた

二階でメイと避難していると、メイのおなかから空腹を知らせる可愛らしい音が響いたので、空っぽのおなかを補給すべく二階から降りてきたのだ

そうして来て見ると、既にキッチンには痺れを切らした先客が冷蔵庫を漁っていた

「むづ、生で食べる物が少ないのう。……お、ハム見つけ」

ロリツインテールは発見した得物のハムを、小さな口でムシャムシャと2枚3枚と胃に収めていく

「……メイ、あの小さいお姉ちゃんみたいにならないようにな」

「……（コクリ）」

小さいメイでも、それぐらいの事は分かるらしい。しかし、九十

九がこの犯行に及ぶ理由も分からないでもない

リビングにいる三人のせいで、夕飯の時間が延びに延びているのだ。そりゃ誰だって空腹には勝てない

「先輩、冷蔵庫なんか漁ってないで座ってください。そんなことしなくても、すぐに準備しますから」

不意に背後から声を掛けられた九十九は、一瞬ビクン！と宙に浮くと、ハムを持ったまま一純に振り向くと、顔を真っ赤にして一純に飛び掛る

「お、遅いぞ！おぬしがさっさと準備をしないから、わしの腹はペコペコなのじゃ！」

恥ずかしさ紛れに、一純の背中をポカポカと叩く九十九。軽い力で叩いているのか、先程の脳震盪寸前の一撃に比べると全然痛くない

一純は「はいはい」と答えながら、愛用のエプロンを身につける

大体の作業は小夜が済ませており、あとは仕上げだけなのですぐに準備も終わるだろう

「先輩、メイと一緒に座ってください」

「しょうがないのう。・・・おい小っちゃいの、お前の父親が心配せぬよう大人しく座っておれ」

メイは九十九に言われずとも大人くしている、とは口が裂けても言えない。だが何だかんだで、九十九もメイを気にかけているよう

でちゃんと面倒を見てくれているようだ

その様子を確認し、一純は目の前の調理に戻る

そして調理をしながら一純は、帰り際にこっそりとロンに言われた言葉を思い返す

『いい、一純ちゃん。この子の人格形成が決まるのは、今日から約一週間。その間に、貴方がこの子にどんな事を教え、どんな事を経験させるかでこの子の人格やアイデンティティーがほぼ決まっちゃうわ。・・・くれぐれも、致命的な悪影響なんか与えないように気をつけることね』

ロンの真剣な表情が、一純の脳裏に鮮やかに蘇る

(全く、責任重大な事だ・・・)

そう思いながら、一純は考える。自分があの子に何をしてあげられるのが。一体、何を教えてあげられるのか・・・

人生17年目にして、子を育てるという責任を負うことになるのは、今まで想像したことも無い事だ

そうして考える一純は、一つの決意を心で決めた

その決意とは・・・

「おい一純!! 吹き零れておるぞ!!」

「おわっ!?!」

「……まあ、それはまた次回のお話でという事で

「ねえ八尋さん。母さん、なんだか魚が跳ねるように熱い良く痙攣してるんだけど、平気なんでしょうか?」

「ええ、死にはしないので安心してください」

三日月の運命や如何に

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.

第31夜：トロイメライを聞きながら・・・ 8番（後書き）

五ヶ月ぶりの更新でございます

現在、某大賞応募用作品にかかりつきりで、こっちは放置でした。
すみません

これからは、時間を出来るだけとってこっちも書き進めたいと思います

頑張ります

第32夜：トロイメライを聞きながら・・・ 9番（前書き）

なんとなくか、ちょっとした寄り道のつもりで書くと、それがそのまま一話分になってしまいます

本題に入れません

第32夜：トロイメライを聞きながら・・・ 9番

結局、その日のうちに三日月が目覚める事は無く夕食は終わり、リビングに三日月が放置されている事意外は特に何事も無く、西明寺親子もお土産に高倉家の置き菓子を貰い（奪い取ったとも言つ）、帰路へとついた

一純達も、九十九達が帰った後の後片付けを始める。といっても、する事といえば食器を洗う程度の事しかないので、一純と小夜の二人がかりでやってしまえばすぐに終わってしまうような作業だった。しかしそれでも、その時点で時計の短針は10を指し示す時刻となっていた。いい年の高校生ならまだまだこれから時間帯だが、この家の高校生達は心配になってしまつくらい規則正しい生活を送っているのです、この時間帯になるとそろそろ休む支度を始めてしまうのだ。ホント、ビックリだよね

相変わらず三日月はリビングに放置されたままの状態なのだが、その上には一応申し訳程度にタオルケットが掛けられている。おそらく一純が掛けたのだろう

その一純はというと、何やら困っている様子で居間のソファ一腰を下ろして唸っている

その隣ではメイも一緒に腰掛けている。服装も、いつまでも九十九のジャージを借りているわけにいかないのです、急遽仕舞ってあった小夜の小さい時の服を引っ張り出して着せられている。小夜曰く、向こうの学校にいたときに着れなくなった服を、捨てるのも勿体無いのでこっちに送っていたらしい。ちなみにメイが着ているのは、小麦色の肌によく映える白いワンピース。アクセントに着いた胸元

の青いリボンもポイントだ

麦藁帽子でもかぶせたら完璧なのだが、生憎とそんな物は無いし、家の中でかぶせる気も無かった

そして一純が何故に困っているのかと言うと、その原因もやはり隣に座っているこの幼女だった

一純が寝る前にひとつ風呂浴びようと、タオル片手に脱衣場へ向かおうとしたそのときだ（ちなみに三日月に掛けたタオルもこの時に掛けられた）。その一純の後ろをトコトコと歩いてついていくメイ。まるでカルガモの親子のような和む光景だ

そして一純は、居間の扉を開けようとドアノブに手を掛けようとした瞬間にふと気がつく

・・・あれ？もしかしてこの流れから行くと、俺この幼女と一緒に風呂に入らねばならないのか？と

普通にナチュラルにスムーズに背後からメイが着いてくる事に、まったく違和感無く風呂場へ直行するところだったが、よくよく考えれば結構デンジャラスな事ではないのだろうか？

いくら中身は生まれたばかりの赤子とはいえ、第三者から見れば10歳そこそこ。どう考えても、普通は妹くらいにしか見えない。いや、妹あたりじゃなきゃヤバイ

そう考えると、一純とメイが一緒に入浴する光景は、傍目から見たらちよつと危険な光景なのかもしれない

いや、そんな事抜きに一純個人としてもぶつちやけ恥ずかしい。幸運な事に、一純はロリコンやペドフェリア等の特殊性癖を持ち合わせてはいないのだが、一人の男性としてこれは少々ヤバイ

おそらく、出産に立会い、赤子の頃から長年にわたり暮らしてきた娘だったら、抵抗無く入るのが父親心理なのだろうが、それらの過程をすつ飛ばした場合は例外だ。

今日生まれたばかりのそこそこ育った娘なんてありえんでしょ？

一純の脳は、ドアノブを掴んでからコンマ3秒でこれらの事を想像した。そして、一度掴んだドアノブから手を離すと、そのままクルリと身を返す

「あつ」

後ろをついてきたメイは、そのままポフツと一純にぶつかる

「・・・おお、悪い悪い」

一純の腹に顔を埋め、そのまま腰にしがみつくメイの頭を撫でながら、そのままソファーまで引き返し、現在に至る

そしてソファーに座り唸ること数分、一純の頭に何かが閃いたらしく、唸り声が止み、台所へと顔を向ける

「おーい小夜ー!!」

そして一純は、台所にいるはずの小夜に声を掛ける

「なんですか？兄さん」

打てば響く鐘の如く、すぐに声に反応して台所から顔を出す小夜

「風呂にはまだ入ってないよな？よかつたらついでにこいつも一緒に入れてやってほしいと思っただが・・・」

そう言っつて、そのまま横に座るメイをズズイっと前に押す一純

パンが無ければケーキを食べればいいじゃない。自分がダメなら小夜に任せたらいいじゃない。そういう理論だ

「はーい！わかりまし・・・」

モチのロンで小夜がそれを断る理由なぞ皆無なわけで、すぐに了承の返事を返そうとしたその時

小夜の脳内世界に、真っ白い羽の天使・小夜さんと真っ黒い羽の悪魔・小夜様が降臨した

『馬鹿な事言わないで頂戴。私はこんなチビジャリなんかよりも、兄さんとの愛と欲望とインモラル溢れる世界へ旅立ちたいわぁ』

二頭身程でボンテージルックのような物に身を包んだ悪魔・小夜が、本体・小夜に語りかける

『いけませんよ小夜。ここは素直に兄さんのいう事に従いなさい。それが回りまわって、貴方への好感度へと繋がるのです』

すると、その言葉を遮るかのように、同じく二頭身の白い羽衣を見に纏った天使・小夜が悪魔の誘惑を阻止しようと出現する

「そ、そうよね。イ、インモラルの世界に旅立つなんて馬鹿の事をする訳・・・」

悪魔はハアッと溜息を吐くと、甘いわねと言ったふうにチツチツと指をふる

『甘いわあ。そんなんじゃ何時まで経っても兄妹の関係のままよお？ここは一つ大きなアクションを起こして、兄さんに女を意識させないとねえ？』

悪魔の誘いは甘美であるのが世の常。しかも中々に的を得ていると来たものだ。この言葉には本体どこるか天使まで心が揺らぎ墮天しそうな勢いだ

「た、確かにここらで積極的に動かないと、後だしジャンケン達に兄さんを取られてしまつかも・・・」

小夜の理性は、震度7の誘惑に激しく揺れ動き、ピサの斜塔くらい傾く

『い、いけません！！例えそうだとしても、兄さんとの想いが繋がるまでは清い心であらねばなりません！！』

揺らぐ心を必死に抑え、天使が本体を説得する

『そうですねえ・・・』

そう言って少し考える八尋。しかしその時間もほんの僅かで、すぐに何かを思いついたようにポンと手を打つ

『それでは、とりあえずメイちゃんとお風呂に入るのを断って下さい。ここでメイちゃんと一緒に入ってしまったら、もう一純ちゃんから一緒にお風呂に入りに来るっていう可能性は絶望的になりますから。だけど、先に二人を入れることが出来たら、後から理由をこじつけて、小夜ちゃんのほうから一緒に入浴する空間を作り出す事が出来ますよ?』

そう言うと、小夜に向かってニコリと微笑む八尋

「ああ！ありがとうございます八尋さん！！本物なのか脳内の妄想なのか分からないけど助かりました！！それがベストの選択なのですね！！」

本体小夜は、いろんな意味での確な八尋の神の言葉に、膝をついて感謝する

・・・そして天使と悪魔と本体は思った。神様って、天使の笑顔を持った悪魔なんだ、って

ちなみに、この小夜の脳内劇場も、コンマ3秒の事だった

「・・・あ。やっぱり兄さんが一緒に入った方が良いと思いますよ？」

一連の脳内劇場を終え、小夜は了承の返事を撤回する

そんな予想外の小夜の返事に一純は困惑する。いつもの小夜だったら真つ先にこういった事を阻止しようとするのが常だからだ

「いや、でもだな・・・」

小夜の思わぬNGに言葉が詰まる一純。そんな一純に畳み掛けるように、小夜は台所から半身だけ出して答える

「でも、じゃありませんよ？一応あの子にとって兄さんはお父さんなんです。最初くらいは一緒にお風呂に入ってあげてもいいじゃないませんか。親と一緒に過ごす事が、小さな

あの子にとっては一番幸せな事なので
すから」

小夜は優しげな顔で良い事を言うと、ススツと台所へ引っ込んで行く。顔は優しげだったが、その裏では策謀が張り巡らされている事を一純は知らない

「おふる〜おふる〜」

メイがそう言いながら一純の足に纏わりついてくる。無邪気に自分を親と慕ってくる姿を見ると、流石の一純も観念するしかない

(小夜の言った事ももつともだしな・・・)

まんまと小夜の説得に乗せられた一純は、足に纏わりつくメイを「よっ!」と抱き上げる。いわゆるお姫様抱っこというヤツだ

「仕方が無いな。大人しく一緒に入るとするか」

抱き上げたメイにそう言うと、一純はそのまま風呂場へと向かう

「あうっ」

抱き上げられたメイも、一純の首に腕を回しながら抱きつき、共に風呂場へと向かう

そして、二人がいなくなった居間を、そっと台所から覗く影が一つ

その影は二人がいなくなったことを確認すると、居間を通り抜け、同じように廊下を覗く。廊下を見ると、風呂場の脱衣場の明かりが煌々と点いているのが確認できる

それを確認した人影はゆっくりと居間を振り返ると、黒いノートを持ってそんな顔をして

「計画通り・・・!」

と呟くと、フフフフと怪しげな笑い声を洩らしながら廊下に出て二階へと駆け上がって行った

・・・あ、勿論小夜だからね？

小夜のそんな行動なんて露知らず、一純とメイは二人仲良く湯船に浸かっていた

最初に服を脱がせてやった時は、下着を穿いて無い事に一瞬怯んだが、そこは親心を発動させて持ち直し、自分も一応腰にタオルを巻いてから風呂場へと一緒に入った

まあ、いざ一緒に入ってしまうと案外平気なもので、風呂場にあったアヒルの玩具（おそらく三日月の物）でメイを牽制しながら、ゆっくりとその日の疲労を回復させていた

「気持ち良いか〜メイ〜？」

「あう〜」

「そうか〜、俺も気持ちいいぞ〜」

会話になっているのかいないのか傍から見ればサツパリだが、二人からしたらそれでいいらしい

メイの方も初めての入浴にもかかわらず、特に熱がったりする様

子も無く大人しく湯に浸かっている

「知ってるか、メイ。風呂場で眠くなったりするのは、どちらかという気絶に近い現象らしいんだってな。」

「あう。」

「はは、そうだな。気持ちよければどっちでも良いよな。」

一純はこの瞬間に幸せを感じていた。言葉に表す事は難しいが、おそらく小さい子供を持つお父さんというのはこういう気持ちなのだろう。なるほど、こりゃ親馬鹿になるのも頷ける

そうして小さな幸せに浸っていると不意に、入り口のガラス越しに動く影が現れた事に気がつく

「兄さん、湯加減はいかがですか？」

小夜だった。おそらくメイの着替えでも置きに来たのである。ガラス越しにボンヤリと影が浮かんでいる

「ああ、気持ち良いぞ。」

一純は夢見心地で小夜の呼びかけに答える。もうメイと一緒に入っただけがいが関係ないようだ。当のメイはあうあう言いながら一純にもたれかかりつつ、アヒルの玩具で遊んでいる

「そうですか。では・・・。」

ガラス越しにシュルリと衣のこすれるような音がした

……シュルリ？

その音に、夢見心地だった一純の脳がハッと覚醒する

「……小夜。何をしているんだ？」

一純は湯船に浸かり汗をかいているはずの体が、更に大量の汗を分泌し始めているのを感じた。一純が質問をしている間も、シュルシュルと衣のこすれる音が止まる事はない。

「ええ、服を脱いでいます。服を着たままじやお風呂に入れませんか」

「いやお前、さっきは俺に任せるって言ってないっけ？」

一純の言葉を無視して、小夜は服を脱ぎ続ける

「兄さん、行く川の流れは絶えずしてまた同じ川にあらずって、昔誰かが言っていた気がします。それに兄さん一人じゃ何かと大変でしょうっ？」

大変のところなんか欠片もない、むしろマツタリしていた。どちらかといえば、今のこの状態のほうが遥かに大変だ

「い、いや結構です。大丈夫です。間に合ってます。だから早く戻って下さい」

いつの間にか敬語になってる一純。それもそうだ。今まで平気だったのはあくまでメイの娘属性と幼女体型のおかげであり（おそら

く一純以外の男性だったら平気ではいられないと思うが)、流石に実妹で大人と呼んでも問題の無い女性との入浴というのは、いろいろな意味でNGだ

「それに鍵もかかっているから入れないぞ！」

まあ普通は鍵かけるよね

しかし小夜はフッフという意味深に笑うと、背後から何かを取り出す。シルエツトしか見えないので詳しくは不明だが、なにか長方形の物体らしい

「兄さん？風呂場の鍵なんて・・・あつて無いような物なんですよ！！！」

小夜がそういった瞬間、一純は長方形の物体の正体に気がつく。形は長方形だが、その厚さは僅か数ミリ

「下敷きかつ！！！」

高倉家の風呂場の鍵はフック式。ほんの僅かな隙間があれば、下敷き使つてすぐ開錠

カチャ

「ああああ！！止まれ小夜！！早まるな！！！！！」

ガラガラガラ

「あああああああああ・・・・・・あ？」

もうダメだ。最後の防衛網もアツサリ破られた。明日からは高校生にもなって妹と風呂に入った不貞の兄として後ろから罵られるんだ。……と思った一純の目に飛び込んできたのは

「……………スクール水着？」

目の前の小夜は、紺色のスクール水着に身を包んでおられた。残念ながら胸に名前などは書いていない。おそらくそういう役は九十九あたりがやるだろう

「……………流石に、裸は私だって恥ずかしいです」

小夜は顔を赤くしながら、恥ずかしそうに顔を背ける

「いや、だからってスクール水着って……………」

その姿は、小夜の驚異的な貧乳と相まって、こう言うては何だがよく似合ってる

「し、仕方ないじゃないですか！！……………これしか水着持ってないんですから」

恥ずかしそうに俯いてそう呟く小夜

一純はその言葉に少し驚く。女の子と言うものはもっと大量の水着を所有しているというイメージがあったからだ

「……………いつか買いに行こうな」

流石にお年頃の娘さんが、水着がスク水オンリーというのは可哀想すぎる

「え？いいんですか！？やったあ！！」

本来の目的も忘れ無邪気に喜ぶ小夜

その様子を見て一純は

（あっちの生活はそんなに厳しかったんだろっか……）

もうちょっとだけ小夜に甘くしてやろうと思ったのだった

結局その夜は、小夜の策謀というよりも不憫さのお陰で、小夜の目的は達成された

そして翌朝

朝日が窓に差し込む頃、小夜は朝食を作るために二階から下に取りてくる

まだ顔も洗っていないので、少々ボンヤリとした、普段は見られないような油断しきったふにゃ〜んとした顔をしている

昨日一純と一緒に風呂に入ったお陰で、その興奮がなかなか治まらず寝不足気味なのだ。ちなみにメイの頭を洗った後、ついでに自分の長い髪を洗うのも手伝ってもらった。長い髪の手入れは大変ですからと巧みに説得して得た至福の時間だ。まあ、紙の手入れが大変なのは本当だが

「ふああ〜……………」

そんな寝不足の小夜から小さなあくびが漏れてくる。昨日洗ってもらった腰まである黒髪も、心なしシナっとしている気がする

そんな通常の7割引き程小夜は、まず家の中に朝日を招き入れるべく、カーテンを開けようと居間へ向かう

居間に入ると、昨日気絶していたはずの三日月は姿を消していた。小夜は、どうせ夜中に目が覚めたのだらうと、気にせずカーテンに手を伸ばし勢いよくそれを開く

カーテンを開け放った窓から、眩しい朝の光が居間の中に降り注ぐ

「ん〜……………、今日もいい天気……………！」

強い朝日に目がチカチカしながらも、その日差しの強さに今日の晴天を感じる

カーテンを開けた小夜が台所へ向かおうと後ろを向くと、居間の

テーブルの上に紙が置いてある事に気がつく

「なにかしら？」

昨日の晩には無かったはずだ。そう思ってその紙を手取る小夜。見てみると、どうやら何か書かれたメモのようだ

「どれどれ・・・？」

その文面に目を通す小夜

『 小夜へ ちょっと一週間ばかりメイと旅に出ています。学校には母さんが連絡を入れておいてくれるらしいから心配しないで下さい 一純 』

そしてその下に重なってもう一枚

『 小夜へ 私もついて行くから、あとはよろしく 三日月
p s 戸棚のドラ焼きは食べないでね！ 』

第32夜：トロイメライを聞きながら・・・ 9番（後書き）

なんか、書いていたらいつの間にか旅立ってしまいました

え？次回から世界一周編？

それはないない

すぐに戻ってきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5898c/>

レストロ アルモニコ（旧）

2011年8月5日04時48分発行